中　学　校

平成２６年度

研究開発委員会指導資料

国　語
社　会
数　学
理　科
保健体育
道　徳
外国語

平成２７年３月
東京都教育委員会

〔　目　次　〕

中学校国語研究開発委員会	1
中学校社会研究開発委員会	２３
中学校数学研究開発委員会	４５
中学校理科研究開発委員会	６９
中学校保健体育研究開発委員会	８７
中学校道徳研究開発委員会	１０９
中学校外国語研究開発委員会	１３１

〈中学校国語研究開発委員会〉

研究主題

〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕に係る教材及び指導法の開発

研究の概要

平成20年に告示された学習指導要領では〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕に「ア　伝統的な言語文化に関する事項」が示されている。第１学年では、文語のきまりや訓読の仕方を知って音読し「古典の世界に触れること」、第２学年では、古典に表れたものの見方や考え方に触れ「古典の世界を楽しむこと」、第３学年では、歴史的背景などに注意して古典を読み、「(古典の）世界に親しむこと」となっている。

そこで、本研究では、「古典に親しむ」態度を整理・分析し、生徒に身に付けさせたい力を「古典に親しむ態度を育てるために必要な力」として明示することとした。また、古典に親しむことができる教材開発・教材選定を工夫し、主に「話すこと・聞くこと」、「書くこと」の領域を通して「古典に親しむ」態度を育成することを目指し、指導法の在り方を追究した。

Ⅰ　研究の目的

中学校の古典指導の在り方として、主に、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」の領域を通して、「古典に親しむ」態度を育成する指導法の充実を図る。

Ⅱ　研究仮説

古典の指導において、各領域における指導法を工夫するとともに、単元構成、言語活動及び学習形態を工夫することで、生徒は「古典に親しむ」態度を身に付け、古典に対して興味や関心をもつであろう。

Ⅲ　研究の方法

１　基礎研究

各領域における古典の指導法の参考にするために、東京都教職員研修センター内にある教育資料閲覧室所蔵の現行の教科用図書（小学校、中学校、高等学校）を閲覧し、各校種で取り上げている教材や発達段階における教材の取り上げ方の違いを確認した。また、「古典に親しむ態度」を目指す生徒像と結び付け、「育てたい力」について研究開発員による協議を深め、研究の基礎とした。

２　調査研究

昨年度の開発委員会資料説明会資料にある意識調査を再度分析し、本年度の実態調査の参考にした。本年度は研究開発委員の所属校において、「古典に親しむ」意識や指導の手だてを中心に調査を実施した。また、検証授業後に意識調査を行い、生徒の意識の変容から指導の手だての有効性を検証した。

３　開発研究

「古典に親しむ」ことができる教材開発及び指導法の工夫を研究の柱とした。古典の作品に親しみがもてるよう、古典の原文とともに現代語訳を用いた。現代語訳に関しては、教科用図書にはない章段を複数提示し、生徒が興味・関心をもって取り組めるようにした。また、個に応じた指導として、一人一人が古典の内容を理解し楽しさを共有できるよう、学習形態を工夫し、個別学習、グループ学習、一斉学習の順に行うこととした。

Ⅳ　研究構想図

「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」に係る教材及び指導法の開発

研究の背景
・文化審議会答申（平成 16 年２月）
「これからの時代に求められる国語力について」
・中央教育審議会審議経過報告（平成 18 年２月）
・教育基本法の改正（平成 18 年 12 月）
・学校基本法の改正（平成 19 年６月）
・中央教育審議会答申（平成 20 年１月）

関連施策等
・学習指導要領の改訂
・東京都教育ビジョン（第３次）
〔主要施策１〕基礎・基本の定着と学ぶ意欲の向上
〔主要施策２〕思考力・判断力・表現力等を育成し、時代の変化や社会の要請に応える教育の推進
〔主要施策２〕国際社会で活躍する日本人の育成

研究のねらい
学習指導要領改訂の趣旨を踏まえた中学校国語科における古典の指導方法を開発するため、「古典に親しむ」生徒の姿を明らかにし、古典に親しむための教材の開発及び「話すこと・聞くこと」、「書くこと」の領域を通した指導法の充実を図る。

研究仮説
古典の指導において、各領域における指導法を工夫するとともに、単元構成、言語活動及び学習形態を工夫することで、生徒は「古典に親しむ」態度を身に付け、古典に対して興味や関心をもつであろう。

基礎研究
○学習指導要領解説における「古典に親しむ態度」に関する内容の整理
○小学校・中学校・高等学校の教科用図書で扱っている古典教材の実態把握
（東京都教職員研修センター教育資料閲覧室所蔵の教科用図書）
○教科用図書における古典教材の扱い方についての比較
○「古典に親しむ態度を育てるために必要な力」の明確化

調査研究
○昨年度の研究開発委員会において明らかになった結果の再分析及び課題の確認
○「古典に親しむ態度」等に関するアンケートの実施及び結果分析
〈都内公立中学校における調査及び時期〉
・第１学年（82 名）・第２学年（101 名）
・第３学年（59 名）【平成 26 年９月～10 月】
〈調査内容〉
・古典の学習で好きな（苦手な）もの　等

開発研究

１ 単元構成の工夫

Ⅰ部	教科用図書で扱う作品の音読、古典の基礎的な知識や技能に触れる
Ⅱ部	本文以外の場面（現代語訳）で古典世界の広がりや奥行きを感じる

２ 身に付けさせたい力の具体化
中学校第１学年から第３学年で身に付けさせたい「古典に親しむ態度を育てるために必要な力」を明確にし、段階ごとに指導することとした。

古典に親しむ態度を育てるために必要な力

(1)古典作品の雰囲気を感じ取ることができる力
(2)古典作品に共感することができる力
(3)古典作品を自己の向上に役立てることができる力
(4)古典作品を他者との交流に役立てることができる力

３ 教材開発・教材選定の工夫
(1)身に付けさせたい力に応じた教材
(2)興味・関心を高める教材

４ 指導法の工夫
(1)身に付けさせたい力の確認
(2)創造的な意見が出る課題設定及び学習形態

５ 個に応じた指導
一人一人の生徒が課題を把握し、主体的に取り組むための個に応じた指導

個人で考える	グループで話し合う	全体で共有する	個人で考えをまとめる

研究成果・課題
〔成果〕明らかにした「古典に親しむ態度を育てるために必要な力」を基に、古典に親しむための教材開発・教材選定、指導法を提案することができた。
〔課題〕各領域における身に付けさせたい力と「古典に親しむ態度を育てるために必要な力」との関連を明確にする必要がある。

Ⅴ　基礎研究

中学校における古典の指導は、生徒が小学校から系統的に学んできた「伝統的な言語文化に関する事項」を踏まえ、「一層古典に親しませる」ことをねらいとし、第１学年では「古典の世界に触れること」、第２学年では「古典の世界を楽しむこと」、第３学年では「古典の世界に親しむこと」としている。

そこで、生徒の「古典に親しむ」姿を、①古典を楽しむ、②古典を好きになる、③古典と向き合う、④古典と積極的に関わる力を付けるというように、発達段階により内容が深まり広がっていくものであると考え、教材の開発及び指導法の開発を行っていくことにした。

教材を開発するにあたっては、東京都教職員研修センター内にある教育資料閲覧室の教科用図書のうち、小学校、中学校、高等学校の教科用図書を閲覧し、取り上げている教材について比較を行った。その結果、発達段階ごとに扱う作品や教材の取り上げ方に違いが見られることや様々な作品が幅広く取り上げられていることが分かった。同時に、生徒が古典により親しむためには、教科用図書で扱う教材だけでなく、古典には数多くの作品があることを生徒に伝えていく必要があることも分かった。

また、学習指導要領には、古典に関する教材について、「古典の原文に加え、古典の現代語訳、古典について解説した文章などを取り上げること。」とあることから、教科用図書に幅広く取り上げられている教材（第１学年「竹取物語」〈物語〉、第２学年「徒然草」〈随筆〉、第３学年「おくのほそ道」〈紀行文〉）を取り上げ、古文のリズムや文語の特徴といった基礎的事項を押さえた上で、古典の現代語訳など、さらに古典に親しませるための教材を用意した。そして、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」の指導を通して古典に親しむ態度を育てる実践を行うこととした。

Ⅵ　調査研究

古典の授業における生徒の実態と教える側の意識について、昨年度の研究開発委員会で実施した意識調査の結果等から次のように分析した。

【生徒の古典に対する意識】

- 暗唱や音読する活動に、意欲的に取り組む生徒が多い。
- 昔の人の様子や考え方を知ることを面白いと感じる生徒がいる。
- いろいろなことを知りたいという意欲をもった生徒は多い。
- 中学校入学時に、すでに古典に対する苦手意識がある生徒がいる。
- 昔の作品世界と現在の生活とのつながりを考えていない生徒がいる。

【指導上の課題】

- 作品の面白さを理解させるためには歴史的な知識も必要になるが、歴史的な知識を教えすぎると社会科（歴史）の授業のようになる。
- 「親しませる」という指導目標が、教員によって解釈が異なっている。（生徒が楽しんで活動するのみとなっている、文法や知識に関する指導への偏重　など）
- 親しませたいポイントによって、作品への迫り方は異なるので、教科の目標と生徒の実態に合った指導が必要である。

（参考）平成 25 年度研究開発委員会指導資料　中学校（東京都教育委員会　平成 26 年３月）

検証を深めていくために、今年度も生徒へのアンケートを古典に関する単元の前後に取ることとし、「古典に親しむ態度が変容したかどうか」を焦点化させることにした。事前のアンケートは、検証授業を行う学校の該当学年で授業前の９月から 10 月の間に行い、第１学年については、小学校での古典の学習を振り返らせるようにした。

事前アンケートの結果及び考察を以下に示す。なお、事後アンケートの結果と生徒の変容については、各実践事例「７　指導の結果と考察」にまとめた。

＜第２学年・第３学年の結果＞

① 古典の作品（古い時代に書かれた作品）について

質　問　内　容	第２学年（101 名）	第３学年（59 名）
ア　面白さを感じている。	62%	53%
イ　楽しむために必要な力を知っている。	38%	29%

② 古典の学習について

項　　目	好きだと思うもの		苦手だと思うもの	
	第２学年	第３学年	第２学年	第３学年
・作品を音読すること	56%	44%	16%	27%
・作者や作品の歴史的な背景を理解すること	38%	46%	36%	41%
・作品のなかの情景や場面を想像すること	52%	63%	21%	25%
・作者や登場人物の心情を想像すること	37%	22%	32%	63%
・作者や登場人物のものの見方や考え方に対して、自分の意見をもつこと	20%	15%	57%	78%
・作品を読んで思ったことや考えたことを、人に伝えること	16%	15%	64%	58%

＜第１学年の結果＞（82 名）

① 小学校の古典の授業でやっていた学習

・音読や朗読（80%）・現代語に訳すこと（18%）・昔の人のものの見方や考え方に触れること（10%）
・今と昔を比べること（9%）・俳句や短歌等を作ること（57%）

② 小学校で古典の学習を行ったことを踏まえて

質　問　内　容	あてはまる	あてはまらない
古典の学習は好きである。	40%	53%
古典を学習することは大切なことだと思う。	79%	18%
昔話や神話を読むことは好きである。	75%	23%
短歌や俳句を学ぶことは好きである。	55%	43%
古典の文章や現代語を読むことは好きである。	43%	54%

③ 古典の学習で大切だと思うこと・難しいと思うこと

	大切だ	難しい
音読や朗読	31%	12%
現代語に訳すこと	23%	62%
昔の人のものの見方や考え方に触れること	58%	36%
昔と今を比べること	31%	90%
歴史的仮名遣いや言葉の決まりを学ぶこと	57%	68%

④ 古典の学習によって身に付くと思うこと

古文を読む力	46%
古文を現代語に訳す力	17%
日本の伝統や文化を理解する力	60%
昔の人のものの見方や考え方を理解して、今と比較する力	42%
歴史的仮名遣いや言葉の決まりに知識	26%

【考察】

事前に行ったアンケートの結果から、生徒は教師が思っている以上に、小学校での授業を通して音読や朗読に親しんでいることや、作品の情景や場面、作者や登場人物の心情を想像する活動に興味をもっていることが分かった。また、古典の授業では、今までの中学校の古典学習で中心となっていた現代語訳や言葉のきまりを学習することよりも、「昔の人のものの見方や考え方に触れること」や「日本の伝統や文化を理解する力」が大切であると感じていることも分かった。

このことから、小学校及び中学校での生徒の実態を踏まえ、高等学校へとつなげていくために、中学校における新たな古典の授業の在り方を考える必要があると考えた。そこで、教科用図書に幅広く取り上げられている教材で基礎を押さえる学習を行い、その上でさらに古典に親しませるために、現代語訳を中心とした資料を読んで作品の情景や場面を想像し、昔の人のものの見方や考え方に対して自分の意見をもち、人に伝えるという学習を「話すこと・聞くこと」及び「書くこと」の学習活動で行うこととした。

また、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」の学習を深め、個に応じた指導を行っていくための方法として、「個人の学習→小グループでの学習（交流）→全体での学習（交流）→個人のまとめ」という形態での指導法を開発した。

Ⅶ　開発研究

1　単元構成の工夫

古典を扱う授業では、現代の現代語と異なる古文特有のきまりがあることなどから、生徒が主体的に学習することが難しく受身になりがちな傾向にある。昨年度の研究開発委員会の調査でも、生徒の半数以上が、古文を現代語に訳す学習や言葉のきまりの学習に対して、「古典の授業で好きな学習」として挙げていないという実態が明らかになった。また、教科用図書で触れられる古典作品の数には限りがあり、生徒が様々な古典作品に触れ、古典の広がりや奥行きを実感する機会が少ないことが考えられる。

そこで、本委員会では、生徒が古典の内容を理解し、主体的に学習できるために、単元全体を通して古文の現代語訳を活用することとした。現代語訳の活用により、生徒は多くの時間をかけずに作品の内容を理解することができ、主体的に登場人物や作者の思いを想像し、昔のものの見方や考え方を知ることができると考えた。また、古典作品の広がりや奥行きを実感するためには、教科用図書で扱う作品には、取り上げている教材以外にも様々な章段があり、そのことを知ることで作品全体をつかむことができると考えた。

以上のことから、生徒が興味・関心をもち、古典に親しむ学習活動となるよう、指導における単元構成を表１のとおり２部構成とした。

Ⅰ部	教科用図書の作品で本文を扱い、音読、古語と現代語の対応、作品の歴史的な背景など、主に基礎的な知識や技能に触れさせる。
Ⅱ部	教科用図書の作品で、本文で取り上げていない場面を現代語訳で示した資料を扱い、主に古典の世界の広がりや奥行きを感じさせる。

表１　古典指導の単元構成

また、これまで「伝統的な言語文化に関する事項」の指導に関して「読むこと」の領域を通して行うことが多かったが、古典に親しむためには、「読むこと」に留まらず、「話すこと・聞くこと」及び「書くこと」の領域で指導を行うことが重要であると考えた。そこで、身に付けさせたい力を明確にし、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」の領域の指導を通して指導する単元構成とした。このような多様な方法を通して、古典作品に触れることに対する、生徒の興味・関心を高めさせることを目指した。

（例）・登場人物の立場に立って、作品の内容を用いて自由に想像し、相手に思いの伝わる手紙を書く活動（1年「竹取物語」）

・作品の魅力について、身の回りの出来事や体験などを交えて、発表形態を考え、全体の前で話す活動（2年「徒然草」）

・作品の魅力について、表現を工夫し、古文の一節を引用して、キャッチコピーを書く活動（3年「おくのほそ道」）

2　身に付けさせたい力の具体化

中央教育審議会答申（平成 20 年１月）では「我が国の言語文化を享受し継承・発展させるため、生涯にわたって古典に親しむ態度を育成する指導を重視する」ことが明示されている。このことは、古典の指導において、内容や知識を教え込むのではなく、生徒が小学校の時に、音読を中心とした学習を通して身に付けた古典世界への興味や関心を基にして、生徒が高等学校などで古典の学習に取り組む際、主体的に作品と向き合うために必要となる意欲や態度を育むことの重要性があることを示している。

そこで、本委員会では、学習指導要領で学年の発達段階ごとに示されている、第１学年「古典に触れる」、第２学年「古典に楽しむ」、第３学年「古典に親しむ」態度を、「古典に親しむ態度を育てるために必要な力」として以下のように具体的に示しその姿の例を示した（表２）。

（１）古典作品の雰囲気を感じ取ることができる力
（２）古典作品に共感することができる力
（３）古典作品を自己の向上に役立てることができる力
（４）古典作品を他者との交流に役立てることができる力

また、これら（１）から（４）の力については、段階的に指導していく必要があると考えた。生徒の実態や発達段階に応じて、意図的・計画的な指導を行うことが望ましい（図１）。

古典に親しむ態度を育てるために必要な力
（１）古典作品の雰囲気を感じ取ることができる力 （例）・リズムや響きを楽しむことができる。 ・様々な種類の作品に興味をもつことができる。 ・作品や場面のイメージを描くことができる。
（２）古典作品に共感することができる力 （例） ・作者や登場人物に憧れを抱くことができる。 ・作者や登場人物の心情や考え方に共感を抱くことができる。
（３）古典作品を自己の向上に役立てることができる力 （例） ・歴史的な知識や風習を理解することができる。 ・自分自身の体験や身の回りの出来事を挙げることができる。 ・自分を振り返り必要な教訓を見いだすことができる。
（４）古典作品を他者との交流に役立てることができる力 （例） ・古典作品に対して自分が思ったことを、他者に伝えることができる。 ・古典作品に対して他者が思ったことを聞き、さらに読み深めることができる。

表２「古典に親しむ態度を育てるために必要な力」

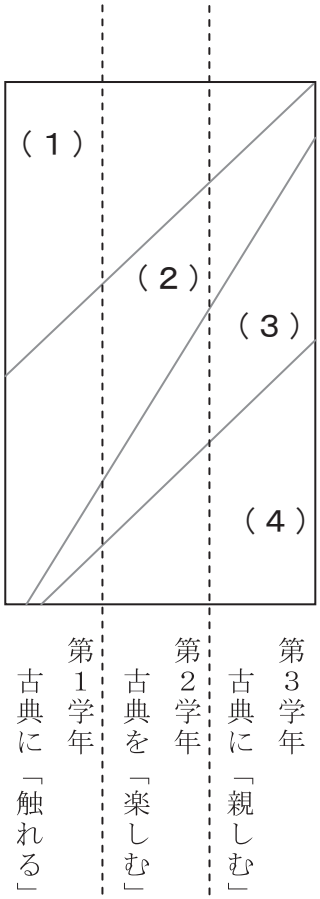


図１ 段階的な指導のイメージ

３　教材開発・教材選定の工夫

(1)　身に付けさせたい力に応じた教材

教材を選ぶ際には、先に示した「古典に親しむ態度を育てるために必要な力」と照応させることが必要である。Ⅰ部において、本文と、その単元で身に付けさせたい力とを照らし合わせ、その力を十分に活用させられる場面を中心的に扱う。それを受けて、Ⅱ部で示す資料についても、教科用図書の本文と資料とを照らし合わせて、その単元で身に付けさせたい力を十分に活用させられる場面を選ぶ。

（例）・登場人物の心情を深く味わわせるために、教科用図書にない、かぐや姫から翁への手紙の場面を現代語訳で資料として示し、翁の立場でその返事を書かせる（1年「竹取物語」）

・作者のものの見方や考え方を想像しやすくするために、教科用図書にない、別の章段を現代語訳で資料として示し、作品の面白さについて考えさせる（2年「徒然草」）

・作品の全体像を捉えさせるために、教科用図書にない、芭蕉たちの旅先の場面を現代語訳を資料として示し、作品のもつ魅力について考えさせる（3年「おくのほそ道」）

(2)　興味・関心を高める教材

生徒一人一人に、古典の世界を身近に感じさせるために、現代語訳の付いた資料を取り上げることとした。また、扱う作品の世界をより深く理解させるために、写真や映像などの視聴覚教材や資料集等を積極的に用いることとした。その際、現代語訳自体が難解だと思われる箇所は、生徒の実態に応じて分かりやすい表現に改めた。

（例）・「天の羽衣」の場面について、生徒の実態に応じた分かりやすい文体の現代語訳を選択して提示（1年「竹取物語」）

・教科用図書や資料にある事物を具体的にイメージさせるための資料集の活用（2年「徒然草」）

・資料内にある「吟懐」「松笠」といった表記を、「思い」「松ぼっくり」などに改める資料作り（3年「おくのほそ道」）

4　指導法の工夫

(1) 身に付けさせる力の確認

指導を行う際は、先に示した「古典に親しむ態度を育てるために必要な力」について、生徒が具体的に捉えていることが必要である。そのため、単元の初めに最終的な目標及び活動の姿を示すとともに、各授業においても、冒頭で本時の目標を具体的に提示し、最後にその振り返りを行った。

(2) 創造的な意見の出る課題設定及び学習形態

課題を設定する際は、原則として、本文中に根拠を示して、個々に多様な見解のもてるものが望ましい。また、多様な考えを出し合い、共有できる学習形態としてグループ学習がふさわしいと考えた。

（例）・翁がかぐや姫に手紙の返事を書くという場面設定をして、より翁の心境に沿った内容について、作品の内容を引用しながら想像して書く活動（1年「竹取物語」）
・作品に対して抱いた面白さについて理由を述べながら話し合い、伝え方を工夫して発表する活動（2年「徒然草」）
・作品が映画化されると仮定して、より多くの人の心をつかむキャッチコピーについて、理由や表現の工夫を示して話し合い、書く活動（3年「おくのほそ道」）

5　個に応じた指導

一人一人の生徒が課題を把握し、課題解決のために主体的に学習に取り組むためには、生徒の意欲や理解に応じた指導が必要となる。一人一人が、それぞれ新たな気付きを得られる授業展開として考えられるものは、図２のとおりである。

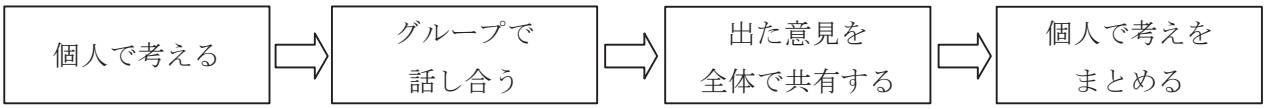


図２　個に応じた学びを促す授業展開

（例）・「翁」の立場でかぐや姫に手紙を書き、グループで読み合ってよいものを選び、各グループの発表を聞いた上で振り返るという授業展開（1年「竹取物語」）
・作品の面白さについて個人で考え、グループで読み合ってお互いに考えを広げ、代表生徒の発表を聞いた上でまとめるという授業展開（2年「徒然草」）
・キャッチコピーを個人で考え、グループで話し合ってよいものを作り、各グループが出したものを読んだ上で振り返るという授業展開（3年「おくのほそ道」）

実施に際しては、生徒が十分に思考する時間を確保するために、発問を焦点化する必要がある。また、生徒が個人で考える場面において、意欲や理解など個に応じて教師は机間指導を行い、全ての生徒が課題に対して自分の意見がもてるよう助言する。

さらに、生徒がグループで話し合う場面においては、理由とともに意見を述べるよう指導し、同時に、分からなければ質問させるようにする。意見を述べることは自分が考えたことを整理することにつながり、他者の意見を聞くことにより自分の意見をもつことができるなど主体的な学びとなり、一人一人の達成感や充実感につながると考える。なお、この指導展開は、国語科の全ての領域において応用することができるものであるが、古典の学習においては、苦手意識をもつ生徒もいることから、特に有効であるとともに、全ての生徒に意欲と安心感を与えるものであると考える。

Ⅷ　実践事例

【指導事例１】第１学年「書くこと」

１　単元名　　翁（おきな）の気持ちを想像しよう

教材名「蓬莱の玉の枝」（光村図書　第１学年）

２　単元の指導目標

・伝えたい事実や事柄について自分の考えや気持ちを根拠を明確にして書く。
（Ｂ　書くこと　ウ）

・古典の作品のリズムを味わって音読する。
（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項ア（ア））

３　単元の評価規準

国語への 関心・意欲・態度	書く能力	言語についての 知識・理解・技能
①　古典の作品に関心をもち、音読や暗唱に取り組もうとしている。 ②　参考資料を読み、「竹取物語」の登場人物の心情について想像しようとしている。	①　登場人物の心情を伝える文章を、自分の言葉で書いている。	①　古典の作品のリズムを味わい古典の世界に親しんでいる。 ②　資料にある部分の現代語訳を読み、古典の世界に興味をもっている。

４　研究主題に迫るための手だて

(1)　単元について

第１学年では、古典の世界に触れることが求められている。この単元は、中学校で最初に学ぶ古典であり、教科用図書では「いにしえの心にふれる」というテーマが設定されている。本単元では、古典作品の「竹取物語」を読み、あらすじや登場人物の気持ちを想像する。その中から、人間の心情は、時代を超えて今も昔も変わらないことを、この作品を通して生徒に感じ取らせたいと考えた。

(2)　教材について

「竹取物語」は絵本にもある昔話の一つで、生徒も身近に感じている作品であると考えられる。歴史的仮名遣いの読み方など古典を読む上で必要な基礎的な知識も身に付けさせるが、本授業での中心は教科用図書にない部分も現代語訳で取り上げることである。現代語訳にもいくつかあるが、できるだけ現代の言葉に近く、生徒に分かりやすいものを資料として提示することで「竹取物語」に抵抗なく取り組めるようにしていく。

(3)　生徒について

小学校の古典学習についてアンケートをとったところ、「音読や朗読、暗唱」については、約８割の生徒がやっていたと答えていたが、無回答の生徒も数人いた。

また、「古典の学習は好きである」という質問に対しては、「好きではない」、「あまり好きではない」と回答した生徒が、約５割いることも分かった。さらに、「古典の学習は好きではない」と答えたにも関わらず、約８割の生徒が「古典を学習することは大切なことだと思う」と答えているという実態も明らかになったので、第１学年としての学習に対する真面目な態度が伺えた。

「古典の学習で特に難しいと思うこと」という質問に対しては、「現代語に訳すこと」、「歴史的仮名遣いや言葉のきまりを学ぶこと」の二つを挙げた生徒が約６割いたことも念頭に置いて学習を進める。

(4)　本単元において身に付けさせたい力及び目指す生徒の姿

登場人物の心情を想像し、作品中に出てくる「手紙」を翁の立場に立って書かせることで、古典作品を身近なものとして感じることができることを目指した。時代が変わっても、親が子を思う気持ちや、別れをつらく感じる気持ちなどには十分共感できるだろうと考えた。

(5) 具体的な手だて

「伝統的な言語文化に関する事項」に係る教材及び指導法の開発における具体的な手だて	
教材の開発	①教科用図書に載っていない「竹取物語」の場面を原文で示す際、できるだけ短く必要な部分のみを示す。(「天の羽衣」) (「天の羽衣」(原文) かぐや姫から翁への手紙) この国に生まれぬるならば、嘆かせ奉(たてまつ)らぬ程まで侍(はべ)らで過ぎ別れぬること。かへすがへす本意(ほい)なくこそ覚え侍れ。脱ぎ置く衣(きぬ)を形見と見給へ。月の出でたらむ夜は、見おこせ給へ。見捨て奉りてまかる空よりも、落ちぬべき心地する。 ②現代語訳は生徒の実態に合わせて分かりやすいものとする。
指導法の開発	①「古典に親しむ態度」を具体的な項目として整理し、どの活動でどのような態度を求めるのかを明確にした。 ②個に応じた指導として、個人で考えたものをグループで話し合い、全体で共有し、最終的に個人でもう一度考えるという学習形態を工夫することで、一人一人が作品と向き合う時間や場面を確保した。 ③上記の学習形態の工夫を毎時間行うことで、生徒が学習方法を学べるようにする。

(6) 個に応じた指導について

各授業において、グループでの話し合い活動を設定した。個人の力でできない部分があったとしても、グループでの教え合いや気付きで補い合うことができると考えた。

5　単元の指導計画（５時間扱い）

時	学習活動	◇留意点◎評価規準◆研究主題に迫る手だて
1	・単元のねらいと学習の流れを確認する。 ・「竹取物語」の現代語訳を読み、あらすじをつかむ。 ・原文（冒頭部分）を読む練習を行う。（個人→グループ）	◇第５時までに取り組む課題を提示し、学習の見通しと目的意識をもたせる。 ◎音読を繰り返し行うことで、古文のリズムをつかんでいる。 ◆歴史的仮名遣いに注意して、リズムをとらえて読もうとしている。
2	・冒頭部分の読みを再度確認する。 ・「蓬莱山の様子を語った部分」、「富士山の言い伝えの部分」の原文を読む練習をする。(個人→グループ) ・資料集で確認する。 ・登場人物の心情を教科用図書の表現から想像して書く。	◎歴史的仮名遣いに注意して、リズムをとらえて読もうとしている。 ◎くらもちの皇子の心情を想像し、自分の言葉で書いている。 ◇人物の心情が読み取れない生徒には、自分のことに置き換えて考えさせるなど机間指導を行う。
3	・教科用図書に掲載されていない部分「天の羽衣」(現代語訳抜粋) を音読し、話の内容を確認する。 ・かぐや姫から「翁・媼」、「帝」へ送られた手紙などに注目し、心の中の言葉を書く。 (個人→グループ)	◎興味をもって現代語訳を読もうとしている。 ◇本文や手紙の表現から、「かぐや姫」や「翁」の言葉に着目させ、心の中の言葉を書くよう促す。 ◆自分一人で考えることが難しい生徒のためにグループの中で書いたものを読み合う時間を設け、参考にできるようにする。
4 本時	・これまで学習した内容を振り返り、「翁からかぐや姫への手紙」を書く。 ・書いた手紙をグループで互いに読み合う。 ・グループの中で、翁の気持ちを一番よく表している手紙を選ぶ。 ・選ばれた手紙を発表する。(全体) ・発表を聞いて気付いたことをまとめる。(個人)	◎翁の心情を想像して、具体的なエピソードや気持ちを表す言葉を使って、自分の言葉で手紙を書いている。 ◆手紙の内容についてグループ内で読み合い、よいところを互いに伝え合うようにする。 (代表者を選ぶときのポイント) 気持ちが伝わる言葉や表現が使われている。 話の中に出てきたエピソードが盛り込まれている。

5	・前時の手紙を読む。振り返る。 （前時に紹介した手紙以外の文章を紹介する） ・かぐや姫が月に帰るときに書き残した手紙の原文を提示し、読み練習を行う。（個人→グループ） （翁への手紙、帝への手紙） ・授業全体の振り返りを行う。	◇気持ちが伝わる言葉や効果的な表現が使われている作品を紹介する。 ◎興味をもって原文を読もうとしている。 ◎音読を通して、古文のリズムを味わっている。

6　本時の指導（第４時）

(1) 本時の目標

・翁の気持ちを想像して「翁からかぐや姫への手紙」を書く。
・書いた手紙を読み合い、気付いたことや工夫した点を挙げる。

(2) 展開

	学習活動	◇指導上の留意点　◎評価規準 ◆研究主題に迫るための手だて
導入	1　前時を振り返り、本時の目標を確認する。 **登場人物の心情を想像しながら手紙を書こう**	◇かぐや姫から翁に宛てた手紙の内容を確認し、本時の目標を意識させる。
展開	2　翁の心情を想像して手紙を書く。 **（これまでの学習で、手紙を書く際に参考となる内容）** **・光る竹の中からかぐや姫を見付け、連れて帰った。** **・五人の貴公子がかぐや姫に求婚した。** **・かぐや姫は羽衣という形見を残して行った。** **・かぐや姫は手紙を残して月へ帰って行った。** 3　個人で考えたものを持ち寄り、グループで読み合う。 4　それぞれが書いた手紙の中で、翁の心情が最もよく表れているものを一つ選ぶ。 5　グループの代表者が自分の手紙を全体で発表する。 6　グループの代表者は、なぜその手紙が選ばれたのかという理由を発表する。	◇月に帰る場面におけるかぐや姫と翁、嫗（おうな）とのやりとりや、これまでのあらすじを振り返らせる。 ◇手紙を書く観点を示す。 （例） ・これまでの経緯を踏まえて気持ちが表れていること ・これまでの出来事が書かれていること ・登場人物になりきっていること ・表現が効果的であること ◇手紙の書き方については、資料集などを活用し、形式等を参考にして書くように指導する。 ◆作業中に机間指導を行い、書けていない生徒については個別にアドバイスを行う。 ◎翁の心情を想像して、気持ちを表す言葉を使って、手紙を書いている。 ◇翁の心情が表れている作品を選ぶ観点を示しておく。 ◎他の人の書いた手紙から、気付いたことや工夫点を探している。
まとめ	7　発表を聞いて、気付いたことをまとめる。 8　授業の振り返りを行う。	◇これまでの学習を振り返り、登場人物の心情を想像して、手紙が書けたかどうかを確認する。

7　指導の結果と考察

本授業では「古典に親しませる」ことをテーマとし、古典に慣れさせるために現代語訳で教科用図書以外の部分を提示し、興味・関心をもたせる指導の工夫を試みた。また、「個」で考えたことを、「グループ」で話し合い、「全体」で共有し、最後にもう一度「個」に戻して考えさせるという流れで授業を行うことで、理解するのに時間がかかる生徒や、自分の力では登場人物の心情を想像するのが難しい生徒にも、古典に親しむことをねらいとした。

授業後のアンケートで、「翁になったつもりで、気持ちを想像して手紙を書くことができたか」という問いに、89%の生徒が肯定的な回答をしていた。また、単元終了後のアンケートでは、「話合いを通して、自分の考えを深めることができた」と答えた生徒は84%いた。分かりやすい現代語訳を用いたことや自分では想像できなかった翁やかぐや姫の気持ちをグループで話し合ったことが、この結果につながったのではないかと考えられる。生徒は配られた資料に印を付けるなど工夫して読み取りを行っていた。

事前アンケートで「古典の学習は好きである」と答えた生徒は15%であったが、単元後は「古典に対して興味や関心をもつことができた」と答えた生徒が85%となっており、この授業は古典に親しませる手がかりとなったと考える。翁になったつもりでかぐや姫に書いた手紙には、指導者が予測していなかった視点やアイディアがあふれていた。また、原文に書かれている内容や表現を引用して書かれている作品もあった。

手紙を書いている様子

グループで読み合う様子

代表者が手紙を発表する様子

（生徒の作品より）

もうお忘れでしょうが、竹取の翁こと「さぬきのみやつこ」です。お元気ですか。私は姫が月に帰ってから泣き続け、満月の時には、泣くのをおさえ、姫が形見として置いていった着物と手紙を見るたび、姫がそこにいるような気がします。このような地球という汚れた地に来てくれてありがとうございます。そして、何より私と出会ってくれてありがとうございます。

この手紙を読んで、想像でも構いません。私のことを思い出してくれれば幸いです。

地球で姫を育てた「さぬきのみやつこ」より

（生徒の作品より）

別れから一年たった今、私はさびしくてたまらない。思い出すといろいろなことがあった。最初に竹の中に入っていた時はすごく驚いたよ。それからすくすくと大きくなるかぐや姫を見ていると嬉しくてたまらなかった。別れの時、力ずくで守ろうとしたら、かぐや姫は「何も役に立たない。」と言ったね。それを聞いた時、私はくやしくてつらかったし、自分の本当の弱さも知ったのだ。また帰って来てくれると信じている。かぐや姫には多くのことを学ばせてもらった。ありがとう。かぐや姫、また会う日まで。

○古典の学習について

質　問　内　容	指導前	指導後	増減
古典の学習は好きである。	40%	82%	＋40
古典を学習することは大切なことだと思う。	79%	87%	＋8
古典の文章や現代語を読むことは好きである。	43%	78%	＋35

○古典の学習で身に付く力について

	古典の学習で身に付いたと思う
古文を読む力	62%
古文を現代語に訳す力	30%
日本の伝統や文化を理解する力	32%
昔の人のものの見方や考え方を理解して、今と比較する力	30%
歴史的仮名遣いや言葉の決まりに知識	36%

【指導事例２】第２学年「話すこと・聞くこと」

１　単元名　　古典作品の面白さを見付け、友達に伝えよう

教材名「仁和寺にある法師―『徒然草』から」（光村図書　第２学年）

２　単元の指導目標

・目的や状況に応じて、資料や機器などを効果的に活用して話す。
（Ａ　話すこと・聞くこと　ウ）
・話の論理的な構成や展開などに注意して聞き、自分の考えと比較する。
（Ａ　話すこと・聞くこと　エ）
・古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いを想像する。
（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項　ア（イ））

３　単元の評価規準

国語への 関心・意欲・態度	話す・聞く能力	言語についての 知識・理解・技能
① 古典作品の面白さを見付け、伝え合う活動を通して、自分の考えを広げようとしている。	① 調べたり考えたりしたことを、聞き手に理解してもらうように、資料を効果的に活用して話している。 ② 話の要点を押さえて聞いている。	① 古文の言葉遣いや意味、用法等を知り、古典の文章を読んで登場人物や作者の思いを想像している。

４　研究主題に迫るための手だて

(1)　単元について

第２学年では、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」及び「読むこと」の指導を通して、〔伝統的な言語文化に関する事項〕（ア）作品の特徴を生かして朗読するなどして、古典の世界を楽しむこと、（イ）古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像することを指導することになっている。

本単元では、古典作品の「徒然草」を読み、そこに表れている作者のものの見方や考え方に触れ、その思いなどを想像すること、作品の面白さを見付け、自分の考えや話の要点が相手に伝わるように資料などを効果的に活用して話すこと、話の要点を押さえて自分の考えと比較して聞き、自分の考えを広げていくことを指導する。

(2)　教材について

授業で扱う序段は、兼好法師がこの随筆を書き付ける心境を述べている。「仁和寺にある法師」（第 52 段）は、前半に主人公である仁和寺の法師の失敗譚が書かれ、後半にそれに対する作者の考えが述べられている。学習するにあたっては、序段の音読を通して「徒然草」の世界に触れ、「仁和寺にある法師」の内容を理解することで、説話的な面白さや兼好法師のものの見方や考え方、表現の面白さに興味をもたせたい。そのうえで、現代社会でも通用する人間観・人生観、生き方の知恵などを、資料として提示する他の章段からも感じ取らせる。また、「徒然草」を生徒が主体的に読み取り、古典を学ぶ楽しさを感じられるように、自分たちで作品の面白さを見付け出し、資料を活用して他の人に伝える発表を工夫して行わせるようにした。

(3)　生徒について

事前のアンケートでは、古典作品に対して面白さを感じている生徒とそうでない生徒の割合は二対一であった。「作品を音読すること」、「作品の中の場面や情景を想像すること」が好きな生徒が、５割以上であった。これは、これまで行った音読や作者の思いを感じるという古典の指導が生徒にとってあまり抵抗がなく、古典に親しみをもって取り組めたからだと考えられる。しかし、「作品を読んで思ったことや考えたことを人に伝えること」や「作者や登場人物のものの見方や考え方に対して、自分の意見をもつこと」に苦手意識をもつ生徒が多かったため、より一層生徒が古典の世界に積極的に関われるように学習内容や形態を工夫していくことが重要であると考える。

以上のことから、これまで学習し慣れ親しんできた「作品を音読すること」や「作品の中の場面や情景を想像する」活動を行い、「作品を読んで思ったことや考えたことを人に伝えること」や「作者や登場人物のものの見方や考え方に対して、自分の意見をもつこと」という次の段階につながる活動に取り組ませていくことが大切であると考えた。

(4)　本単元において身に付けさせたい力及び目指す生徒の姿

作品に興味をもち、古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いを想像することを通して、古典に親しむことのできる態度を養う。また、目的や状況に応じて、資料などを効果的に活用して話すこと、話の論理的な構成や展開などに注意して聞く力を高めさせる。

(5)　具体的な手だて

「伝統的な言語文化に関する事項」に係る教材及び指導法の開発における具体的な手だて	
教材の開発	①　作品に興味をもたせ、作者のものの見方や考え方を想像しやすくするために、教科用図書以外の章段にも触れさせる。 ②　教科用図書以外の章段は、興味をもって読めるよう、現代語訳から紹介する。 ③　紹介する資料は、生徒が親しみやすい内容のもの、作者のものの見方・考え方がうかがえるもの、現代でも通用する考え方が書かれているもの、中学生にも読みやすい分量のものとして、次の 10 段を取り上げる。 **・神無月の頃　・弓射ることを習すに　・公世の二位のせうとに** **・丹波に出雲といふ所　・八つになりし年　・高名の木登り** **・猫また　・能をつかんとする人　・友とするに** **・寸陰惜しむ人無し**
指導法の開発	①　「話すこと・聞くこと」と「伝統的な言語文化に関する事項」に係る既習事項（音読、古文の知識など）を生かして、授業を展開する。 ②　自分の考えや思いなどを、資料を効果的に活用して伝えられるようにするために、紙芝居や寸劇などの活動を取り入れる。 ③　個人で考え、小グループや全体で交流し、最後にもう一度、個人で考えるという流れで取り組ませることで、一人一人がより深く古典の作品と向き合い、思考、判断、表現できるようする。

(6)　個に応じた指導について

小グループでの話合いや交流する活動を設定し、自分が気付かなかったことに気付いたり、分からないことについて教え合ったりする中で、個々の習熟の度合いに応じた達成感と充実感を味わわせる。

5　単元の指導計画（５時間扱い）

時	学習活動	◇留意点　◎評価規準 ◆研究主題に迫る手だて
1	○単元の目標を確認し、学習の見通しをもつ。 ○「徒然草」の基礎的な知識を学習し、「仁和寺にある法師」を読む。 ・作者、時代背景、序段の音読 ・歴史的仮名遣い、言葉のきまり等	◇学習の見通しをもたせる。 ◇資料集を活用する。 ◆現代語訳を確認する。 ◎古文独特のリズムや響きを楽しんでいる。 ◎作者の思いを理解している。
2	○「仁和寺にある法師」を読む。 ・登場人物や作者の思い、内容の面白さについて自分の考えをまとめて書く。 ・グループ（５～６人）で発表し合い、考えを広げる。 ○「徒然草」の他の章段を読み取る。 ・現代語訳から作品の内容をとらえる。	◇次時の学習活動への準備とするため、まとめる視点をワークシートに示しておく。 ◆個人で考えたことを交流させる。 ◎作者のものの見方や考え方、文章の面白さについて考え、まとめている。 ◆内容、分量等適切なものを提示する。
3	○自分が興味をもった段を二つ選び、内容の面白さ、共感できる点、現代との共通点や相違点などを考える。 ○同じ段を選択した者同士でグループを作り、担当する章段の面白さをどのようにして学級全体に伝えるか話し合い、発表のための資料を作成する。 ・資料の効果的な活用の仕方を考える。 ・効果的に伝えるために、説明の仕方や具体例の出し方、描写の工夫をまとめて資料を作成する。 ○発表の練習と準備をする。	◇ワークシートに取り組むことによって、登場人物や作者の思い、内容の面白さを見付け、まとめさせるようにする。 ◎資料を読んで、作者の思いや内容の面白さを見付けようとしている。 ◇発表に必ず入れる事柄を共通で決めておき、発表の内容が効果的に伝わる方法について、グループで考えさせる。 ◆発表の内容（面白さ）を、他の人に効果的に伝えるという意識をもたせる。 ◎章段の面白さが伝わるような資料を準備し、資料を活用して練習している。

4 本時	○グループ毎に、担当した章段について、学級全体で発表する。 ・作成した資料を活用して発表する。 ・グループ毎に、互いに内容や面白さが伝わったかを評価する。 ○全グループの発表を聞いて、自分が興味をもった章段についての感想や気付いたこと、「徒然草」の面白さや、古典作品の学習を通して感じたことをまとめる。	◇一人一役で発表をさせる。 ◇聞く時のポイント（評価の観点）を示して聞かせる。 ◎資料を基にして面白さが伝わる発表をしている。 ◎グループ毎に評価表に記入している。 ◆自分のグループの発表、他のグループの発表を基に、作品に表れている登場人物や作者の思い、内容の面白さを自分で考え、まとめるようにさせる。 ◎自分が感じたことや気付いたことを、ワークシートにまとめている。
5	○今までの学習を振り返り、自分がまとめたことを班で発表し合い、全体で共有する。 ・グループで自分のまとめを伝え合う。 ・グループの代表者による発表を全体で行い、それぞれの意見を共有する。 ○古典の学習のまとめをする。	◆「徒然草」の文章に触れ、伝え合う活動（話す・聞く）を通して、古典の世界を楽しむことができたかを振り返り、今後の学習に生かすことをまとめさせる。 ◇前時に書いたワークシートや各グループの発表を振り返り、まとめができるようにする。 ◎自分の考えをまとめている。

6　本時の指導（第４時）

(1) 本時の目標

・担当した章段について、資料を効果的に活用して発表する。
・各グループの発表について要点を押さえて聞き、自分が興味をもった章段についての感想や考えたことをまとめる。

(2) 展開

	学習活動	◇指導上の留意点　◎評価規準 ◆研究主題に迫るための手だて
導入	1　本時の目標を理解する。 **グループの発表を聞いて、自分の考えをまとめよう**	◇板書で「今日の目標」を明示する。 ◇話すこと・聞くことを通じて、古典を身近なものとして捉えるよう促す。
展開	2　グループ毎に、担当した章段について、学級全体に伝わるように工夫して発表する。 ・前に出て、作成した資料を基に発表する。 ・グループ毎に、内容や面白さが伝わったかで評価する。 3　全グループの発表を聞いて、自分が興味をもった章段（面白さを感じた章段）についての感想や考えたことをまとめる。	◇資料を作成するに当たっての確認事項を押さえる。 ・発表時間（３分以内）、一人一役 ・発表に盛り込む内容 原文、自分たちが考える面白さ、現代との共通点や相違点、兼好法師のものの見方や考え方、感想　等 ◎資料を基にして面白さが伝わる発表をしている。 ◇聞くポイント（評価の観点）を示す。 ◎グループ毎に、評価表に記入している。（評価表・観察） ◆自分のグループの発表、他のグループの発表を基に、作品に表れている登場人物や作者の思い、内容の面白さを自分なりに見付け、まとめるようにさせる。 ◎まとめる活動を通して、自分の考えを広げている。（ワークシート・観察）
まとめ	4　本時の学習を振り返り、次時の学習の見通しをもつ。	◇ワークシートに本時のまとめと自己評価を記入させ、次時の学習の見通しをもたせる。

7　指導の結果と考察

本授業では、「話すこと・聞くこと」の領域と関連させた単元構想を提案し、古典に親しみ、古典を身近なものとして捉えさせる指導の在り方を検証した。授業のまとめとして行った生徒の文章（資料１）から、学習活動の内容に対して、現代との共通点やつながりがあるということに気付いたり、古典を身近に感じたりした生徒が多く、同時に他の章段や古典の作品をもっと読んでみたいという感想や古典に対して好意的な印象を持つようになった生徒が多く見られた。

授業の形態についても、小グループでの交流で作品の内容を深めることができたという意見や、全体での共有によって新たな気付きがあったという生徒の意見も多かった。

また、事前と同じ「古典に対する意識に関する」アンケートを事後にも行ったが、「古典作品に対して面白さを感じている」とした生徒が 62%から 95%と大幅に増え、「古典の学習で好きだと思うもの」に、「作者や登場人物のものの見方や考え方に対して、自分の意見をもつこと」や「作品を読んで思ったことや考えたことを、人に伝えること」を挙げた生徒が36%から 47%とわずかではあるが上昇した。

本授業から、授業の内容や形態及び資料を工夫することによって、生徒が古典に親しみをもち、古典に対する興味・関心を高めることができると考える。

紙芝居を使って伝えている様子

個人でまとめをしている様子

全体の様子

- この「徒然草は」、現代に通じる教訓、思想、皮肉などを述べているところが面白いと思う。私が共感できたのは、「弓射ることを習うに」、「猫また」、「寸陰惜しむ人なし」の三つである。これらの話は、現代に生きる人たちにとっても、とても大切な教訓となるものなのに、古くさいと言われ、古典がどんどん読まれなくなってしまうのはとても残念である。

- 僕は、現代の随筆よりも昔の随筆の方が好きになりました。周りの人から聞いた話や自分で考えたこと等、今の随筆よりもとても幅広く書かれているような気がするからです。兼好法師が七百年も前に考えていた思いに触れることができてよかったです。昔の人の考え方に触れ、現代の自分の考えと比較して読んでいくことが今回の授業で一番面白かったです。比較することで、現代との共通点、相違点を知り、徒然草をもっと深くまで楽しめました。

- 今では使われていない昔の言葉を聞くことによって、新しい言葉の意味や使い方を発見することができたし、言葉は長年受け継がれている文化でもあると思うので、大切に使っていこうと改めて思った。

- 「徒然草」は、日々耳にする様々な出来事に対し、人生について考える兼好法師のゆったりとした生活が見えてくるような気がした。そして、今回の活動を通して、昔の人のものの見方や考え方に触れ、古典に親しむことができたので、次に学習する時にはもっと細かいところにも注目していきたい。

資料１　生徒の授業のまとめ

【指導事例３】第３学年「書くこと」

１　単元名　古典作品の面白さを見付けて伝えよう

教材名「夏草―『おくのほそ道』から」（光村図書　第３学年）

２　単元の指導目標

・古典の一節を適切に引用するなどして、説得力のある文章を書く。（Ｂ　書くこと　イ）
・地理的・歴史的背景などに注意して、古典の世界に親しむ。
（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項　ア）

３　単元の評価規準

国語への 関心・意欲・態度	書く能力	言語についての 知識・理解・技能
① 古文や参考資料を読み、芭蕉や曾良の感動を想像しようとしている。 ② 古文や参考資料を読み、「おくのほそ道」の面白さについて考えようとしている。	① 古文や参考資料を適切に引用して、芭蕉や曾良の心情を説明する文章を書いている。 ② 古文や参考資料を適切に引用して、「おくのほそ道」の面白さを伝える文章を書いている。	① 地理的・歴史的背景を踏まえ、作品の理解に役立てて、芭蕉や曾良の感動について考えている。

４　研究主題に迫るための手だて

(1) 単元について

第３学年においては、古典の世界に親しむ態度を養うことが求められている。その中で、本単元においては、同じ国に生きた先人達が感じたことに思いを馳せ、そこに共感を覚え、今に残された作品に対して魅力を感じ、そこに面白さを見いださせることを目指している。その際、ただ思いつくまま感じたことを述べるのではなく、古典の一節を引用して「おくのほそ道」の魅力を伝える表現を考えさせることで、先人の残した一つ一つ言葉に対して、より主体的に向き合わせたいと考えている。同時に、教科用図書にはない場面にも補助教材で触れさせることで、作品の全体像をつかませる。そうして、先人達の思いに共感したことを踏まえて考えたことを他者に伝えようとする姿勢を育む中で、古典に親しむ態度の育成を図る。

(2) 教材について

「おくのほそ道」は、江戸時代に松尾芭蕉によって書かれた、俳諧の融合された紀行文である。基本的には、各場面において、芭蕉自身の見聞が文章の形で先に記され、最後に、その感動を俳諧の形でまとめる、という構成となっている。

したがって、授業においては、最後の俳諧に込められた感動について、先に記された文章の言葉を引用して迫るという形を取る。教科用図書には二つの場面が挙げられているので、そこで、俳諧に込められた感動を捉える視点を示して、文語のきまりを確認し、古文特有のリズムを味わわせる。

また、教科用図書にはない場面を現代語で資料として示し、作品の全体像をつかませ、そこから、「おくのほそ道」そのものの面白さについて考えさせる。

(3) 生徒について

生徒の実態については、３ページにある「Ⅵ　調査研究」にあるとおりである。したがって、より多くの生徒に古典作品に面白さを感じさせるためには、「作品を音読すること」を導入として用いて、「作品の中の場面や情景を想像する」、「作者や作品の歴史的な背景を理解する」といった比較的生徒が好きな活動を発展させ、「作者や登場人物のものの見方や考え方に対して、自分の意見をもつ」という生徒の苦手な活動に取り組ませる流れが望ましいと考えられる。その際、小グループの中で意見を交換し合う場を設けることで、個に応じた形で一つ一つの課題に対して意欲的に取り組ませ、そこに充実感や達成感を味わわせて、古典の中での学習活動そのものが好きなれるよう、指導を重ねていく。

(4) 本単元において身に付けさせたい力及び目指す生徒の姿

作品に興味をもち、作者や作中の人物に共感を覚え、その魅力を他者に伝えようとする中で、古典の世界に親しむことのできる態度を養う。同時に、その中で気付いたことや考えたことを、作品の一節を引用して、説得力のある文章を書く力を高めさせる。

(5) 具体的な手だて

「伝統的な言語文化に関する事項」に係る教材及び指導法の開発における具体的な手だて	
教材の開発	①教科用図書には無い「おくのほそ道」の場面を現代語で資料として示す。その際、以下の点に留意した。 ・教科用図書で扱う場所と資料で扱う場所を、一つの地図の中に示すことで、興味をもって作品の全体像を捉えさせる。 ・地図とともに、教科用図書で扱われていない場面をバランスよく示すことで、旅程の全体像を捉えやすくする。 ・引用元の文献に見られる、生徒には難解と思われる語句について、あらかじめ分かりやすく言い換えたものを示すことで、それぞれの場面の情景や芭蕉達の思いを想像させやすくする。 （「おくのほそ道」で取り上げた教科用図書以外の場面） 「白河の関」「松島」「山中」「大垣」 ②作品の歴史的な背景や文化的な価値について、歴史の資料集やビデオ教材を用いて、分かりやすく理解させた。
指導法の開発	①「古典に親しむ態度」を具体的な項目として整理することで、どの活動で、どのような態度を求めるのかということを明確にした。 ②キャッチコピーという、生徒一人一人が創造的な意見をもつことのできる課題を設定し、生徒が意欲的に学習に取り組めるようにした。 ③まず、個人で考え、次にグループで話し合ったものを全体で共有し、最後に個人で考えさせるという流れで取り組ませることで、一人一人がより深く作品と向き合い、思考、判断、表現できるようにした。

(6) 個に応じた指導について

授業においてグループでの話合い活動を設定し、その中で、自分が気付かなかったことに気付いたり、分からないことについて教え合ったりする中で、個々の習熟の度合いに応じた達成感と充実感を味わわせる。

5　単元の指導計画（６時間扱い）

時	学習活動	◇留意点　◎評価規準　◆研究主題に迫る手だて
1	・単元のねらいと学習の流れを確認する。 ・ビデオを見て、松尾芭蕉と「おくのほそ道」への関心を深める。 ・冒頭部分を繰り返し音読する。	◇第６時で取り組む課題を示し、単元を通して目的意識をもたせる。 ◇ポイントを意識させて映像資料を提示する。 ◆映像資料を示す。 ◎作品の地理的・歴史的な背景を理解している。 ◎古文独特のリズムや響きを楽しんでいる。
2	・内容を整理して「草の戸も」と詠んだ芭蕉の心情を、自分の言葉で書き表す。 ・ビデオを見て、平泉に生きた人々への関心を深める。	◎「草の戸も」の俳諧に込められた心情を、根拠となる表現を適切に引用して、自分の言葉で書き表している。 ◆俳諧に込められた心情について、グループで話し合わせる。 ◆作品の概要に関する映像資料を示す。 ◎本文の地理的・歴史的な背景を理解している。
3	・資料を読み「かっこいいと思う平泉ゆかりの人ベスト３」を選ぶ。 ・平泉の前半場面を繰り返し音読する。 ・内容を整理して「夏草や」、「卯の花に」という俳諧を詠んだ芭蕉と曾良の心情を、自分の言葉で書き表す。	◆平泉ゆかりの人物に関する文書資料を示す。 ◎古文独特のリズムや響きを楽しんでいる。 ◎「夏草や」、「卯の花に」という俳諧に込められた心情を、根拠となる表現を適切に引用して、自分の言葉で書き表している。 ◆俳諧に込められた心情について、グループで話し合わせる。
4	・平泉の後半場面を音読する。 ・内容を整理して「五月雨や」という俳諧を詠んだ芭蕉の心情を、自分の言葉で書き表す。	◎古文独特のリズムや響きを楽しんでいる。 ◎「五月雨や」という俳諧に込められた心情を、根拠となる表現を適切に引用して、自分の言葉で書き表している。 ◆俳諧に込められた心情について、グループで話し合わせる。

5 本時	・教科用図書にない場面を資料で読み合い、「おくのほそ道」の面白さについて自分の意見をもつ。	◎「おくのほそ道」の面白さについて、根拠となる表現を適切に引用して、自分の言葉で書き表している。 ◆作品の面白さについて、グループで話し合わせる。
6	・学習してきた内容を振り返り、「おくのほそ道」のキャッチコピーを作る。	◎「おくのほそ道」の魅力を伝えるキャッチコピーについて、根拠となる表現を適切に引用して、自分の言葉で書き表している。 ◎作品の面白さを他者に伝えようとしている。 ◆作品を読んだことのない２年生を伝える相手とし、相手意識をもって取り組ませる。 ◆作品にふさわしいキャッチコピーについて、グループで話し合わせる。

６　本時の指導（第５時）

(1) 本時の目標

・「おくのほそ道」の面白さについて、根拠となる表現を適切に引用して自分の言葉で書き表す。
・自分が見いだした「おくのほそ道」のよさについて、人に伝えようとする。

(2) 展開

	学習活動	◇指導上の留意点　◎評価規準 ◆研修主題に迫るための手だて
導入	1　既習の俳諧を音読する。 2　本時の目標を確認する。 「おくのほそ道」の面白さを見付けて書こう	◇作者が込めた心情を想像させて読ませる。
展開	3　資料を読み、俳諧に込められた思いと、「おくのほそ道」の面白さについて、自分の意見をもつ。 4　グループで話し合い、俳諧に込められた思いと「おくのほそ道」の面白さについて、意見をまとめる。 5　各グループ１名からなる小グループで話し合い、俳諧に込められた思いと「おくのほそ道」の面白さについて、理解を深める。 6　初めのグループに戻り、各グループで話し合われたことを報告し合い、「おくのほそ道」の面白さについての理解を深める。 7　「おくのほそ道」の面白さについて、自分の意見を書く。	◇地図で資料にある場面を示し、芭蕉達の行程を確認する。 ◇面白さを見付ける視点を示す。 ◇既習の俳諧と関連させる。 ◆教科用図書にない場面について、資料を通して触れることで、作品全体への関心を深めさせる。 ◎自分が見いだした「おくのほそ道」のよさについて、人に伝えようとしている。（発言・観察） ◆テーマを決めて話し合うことを通して、自分のものの見方を広げさせる。 ◎グループで見いだした「おくのほそ道」のよさについて人に伝えようとしている。（発言・観察） ◇意見に対して、質問や確認はしても否定や批判はしないようにさせる。 ◎「おくのほそ道」の面白さについて、根拠となる表現を適切に引用して、自分の言葉で書き表している。（ワークシート・観察） ◇簡単な文の型を示す。 ◆話し合ったことを踏まえて最後に個人で振り返らせることで、自分の意見を深めさせる。
まとめ	8　本時で学んだことを確認して、次時の予告を行う。	◇数名指名して発表させた後、ワークシートを回収する。

7　指導の結果と考察

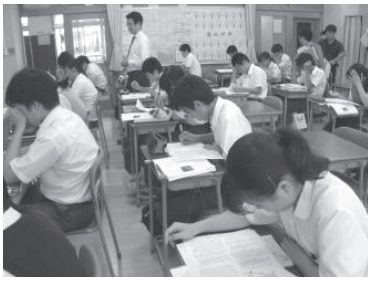
(1) 理解の深まりについて

本時の冒頭において、「おくのほそ道」の面白さ（魅力・特徴）について、言葉にまとめられない生徒や、言葉にできても一言で終わってしまう生徒も見られたが、資料を読んで話し合うことで意欲的に理解を深め、本時の最後には、全ての生徒がその面白さと根拠を自分の言葉で表すことができた。

さらに、次時において、単元のまとめとして、「おくのほそ道」のキャッチコピーを書く活動を行った。各グループが最終的にまとめたものは次のとおりである。生徒一人一人が自分なりに作品と主体的に向き合い、関心を深めたことが伺える内容である。

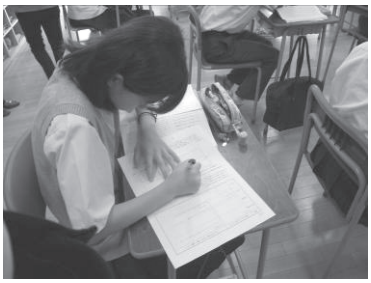
「17音に込められた日本」
「長い歴史と長い旅」
「歴史を知り、芭蕉を知る」
「2400km で言いたいこと、伝えたいこと」
「命の五・七・五」
「秘境を巡り、言葉を旅する」
「あなたは知っているか　芭蕉の見たものを」
「俳句で旅する東日本」
「先人たちの歩いた道」
「俳句心中」
「旅は永遠に」
「古人と私たち」

生徒が考えた「おくのほそ道」のキャッチコピー



個で考える様子

グループで話し合う様子



個で考えを深める様子

(2) 意識の変容について

単元の最後に、単元の冒頭で行ったものと同じアンケートを行った。結果は以下のとおりである。

①古典作品への印象について

項　　目	「とてもそう思う」又は「そう思う」と答えた割合		
	指導前	指導後	増減
古典作品（古い時代に書かれた作品）に対して、面白さを感じている。	52.5 %	83.1 %	＋30.6
古典作品（古い時代に書かれた作品）に親しむために必要なこと（必要な力）を知っている	29.0 %	69.0 %	＋40.0

②古典の学習の中で好きな活動について

項　　目	「好き」と答えた割合		
	指導前	指導後	増減
作品を音読すること	44.1 %	52.5 %	＋8.4
作者や作品の歴史的な背景を理解すること	45.8 %	71.2 %	＋25.4
作品の中の情景や場面を想像すること	62.7 %	78.0 %	＋15.3
作者や登場人物の心情を想像すること	22.0 %	39.0 %	＋17.0
作者や登場人物のものの見方や考え方に対して、自分の意見をもつこと	15.3 %	30.5 %	＋15.2
作品を読んで思ったことや考えたことを、人に伝えること	15.3 %	28.8 %	＋13.5

このことから、単元を通して多くの生徒は新たに古典作品に面白さを感じるようになり、どうすれば親しむことができるのかという視点についても理解を深めたということができる。また、古典の学習における個々の具体的な活動に対しても、意欲的に取り組む生徒が増えた。今後は、作者や登場人物の心情や考えを自分の言葉で表したり、読んで思ったことを人に伝えたりすることに対して抵抗感をもっている生徒に対応するため、さらに意識を変えるための指導を充実させていくことが必要である。

Ⅸ　研究のまとめ

１　生徒の変容に見られる成果と課題

検証授業において、単元を扱う前と後では、古典作品に対して面白さを感じている生徒の割合が、どの学年でも大幅に増えた。また、古典の学習における活動についても、単元の中で中心的に扱ったものほど、「好き」と答えた生徒の割合は増えた。さらに、古典作品に親しむための視点を、より多くの生徒がもてるようになり、その結果、生徒は古典の学習における個々の活動に対して、その意義を理解して主体的に取り組めるようになった。

このように、生徒が中学校卒業後も、古典の作品に主体的に向き合っていくための素地をある程度作ることができたと考える。

一方で、音読したり、場面を想像したりする活動に比べると、作者や登場人物の心情や考え方に対して自分の意見をもつことや、その意見を他者に伝える活動に対して、生徒は苦手意識をもっていることが認められた。古典の世界を傍観するだけでなく、古典の世界に入り込み、そこに生きた人達と、同じ人間として対話することのできる態度を教材や指導方法をさらに工夫、改善して、今後も養っていく必要がある。

２　研究主題に迫るための手だてにおける成果と課題

指導計画を立てる際に、「古典に親しむ態度を育てるために必要な力」を具体的にしたことで、教師も生徒も、単元及び一単位時間の授業の中で伸ばす力について、明確に意識することができた。授業の最初と最後に、それぞれ「古典に親しむ態度を育てるために必要な力」について確認することを重ねる中で、身に付けた力を生徒自身が具体的に実感することにもつながった。

また、「古典に親しむ態度を育てるために必要な力」を具体的にしたことで、教師は指導のねらいを明確にもち、教材研究や資料の選定を行うことができた。

さらに、単元を二部構成とし、Ⅱ部において創造的な意見の出る課題を設定したことで、生徒は主体的に古典作品に向き合い、親しむことができた。その課題への取り組ませ方についても、個人で考え、グループで話し合い、出た意見を全体で共有し、最後に個人で考えをまとめるという展開にすることで、古典に対して苦手意識がある生徒も自分の考えをもち、考えを深めることができた。Ⅱ部で示す資料に関しては、現代語訳を活用することや視聴覚教材を用いることで、生徒は意欲的に作者や作品の歴史的な背景を理解したり、作品の中の情景や場面を想像したりすることができた。

本委員会では、「古典に親しむ態度を育てるために必要な力」を大きく四つに分類し、それぞれについて、具体的に親しんでいる態度を例として示したが、この分類や例については、さらに加除修正できる余地もある。古典に親しむ態度を生徒に身に付けさせていく上で、生徒にとっても、教師にとっても、より分かりやすい「古典に親しむ態度を育てるために必要な力」の分類や、その親しんでいる態度の示し方について、教師自身が模索して指導にあたっていくことが大切である。

また、伝統的な言語文化に関する指導を、「話すこと・聞くこと」又は「書くこと」の領域を通して行う際、「古典に親しむ態度を育てるために必要な力」を踏まえた上で「話すこと・聞くこと」又は「書くこと」の各事項に関する指導事項を指導する必要がある。その際、「話すこと・聞くこと」又は「書くこと」の各事項に関する指導と「古典に親しむ態度を育てるために必要な力」に対する指導の位置付けが曖昧にならないように、両者のバランスをよく考えて指導計画を立てる必要がある。

平成 26 年度　研究開発委員会　委員名簿

＜中学校国語研究開発委員会＞

	学　校　名	職名	氏　名
委員長	練馬区立開進第一中学校	校　　長	古山　真樹
委員	港区立御成門中学校	主任教諭	美馬　千秋
委員	新宿区立西新宿中学校	主幹教諭	津田　　淳
委員	立川市立立川第九中学校	主幹教諭	堤　　浩子

〔担当〕東京都教職員研修センター研修部教育開発課　統括指導主事　海老江直子

〈中学校社会研究開発委員会〉

研究主題・副主題

「自分の考えを明確にして表現する指導の在り方」

－「受信」→「思考」→「発信」の学習活動を通して－

研究の概要

知識基盤型社会やグローバル化が進む中、社会科では、世界や日本に関する基礎的教養を培い、国際社会に主体的に生き、公共的な事柄に自ら参画していく資質や能力を育成することが求められている。しかしながら主権者としての政治参加の在り方を考える場合、若者の投票が伸び悩む報道がみられるなど、公民的資質を身に付けた国際人の育成が喫緊の課題となっている。

現行学習指導要領の完全実施が３年目を迎え、思考力・判断力・表現力等を育成する指導法の工夫改善は進んでいるものの、生徒が既習事項等を生かして自らの考えをもち、交流活動や協働的な学習によって考えを広め、深める指導法については、更に工夫が必要であると考えた。

そこで、研究テーマを、「自分の考えを明確にして表現する指導の在り方」とし、「受信」「思考」「発信」の流れをスパイラルで取り入れることで、思考力・判断力・表現力等を効果的に育成できると考えた。さらに、思考・判断する際の視点として、「比べる」・「関連づける」、「抽象化する」・「具体化する」、「分類する」・「整理し再構成する」を取り入れることを試みた。

また、「指導と評価の一体化」を図るため、評価規準を明らかにし、学習評価方法の工夫改善を検討した。

１　生徒の実態

現在、各校では習得、活用、探究の活動の充実を図るために、授業改善が進められている。その成果として、知識・理解の定着を図るとともにグループ活動の指導方法の工夫が改善され、思考力・判断力・表現力の育成が図られてきた。一方、平成 25 年度「児童生徒の学力向上を図るための調査」における社会科の読み解く力の中で、「複数の資料から情報を取り出し、比較・関連して読み解く力」に課題があることが分かった。

このため、思考力・判断力・表現力を身に付けさせるためには、生徒に既習事項を想起させ、「必要な情報を取り出す力」や、意見交換等を通して「比較関連付けて読み取る力」・「意図や背景、理由を理解・解釈・推論して解決する力」等を身に付けていく必要があると考えた。

こうした活動を段階的に行うことにより、生徒が自分の考えをもち、広げ、深め、さらに社会に参画する力を身に付けることができると考えた。

これらを基に、本研究委員会では、育てるべき生徒像を次のように設定した。

＊様々な資料から情報を取り出し、比較・関連付けることができる生徒
＊既習事項を通して、自分の考えをもつことができる生徒
＊意見交換を通して、自分の考えを広め、深めることができる生徒
＊自分の考えを、社会参画につなげることができる生徒

2　主題設定の理由

平成 20 年度の学習指導要領改訂において、社会科では、基礎的・基本的な知識、概念や技能の習得、思考力・判断力・表現力等を確実に育むための言語活動の充実、社会参画に関する学習の重視が求められている。中でも思考力・判断力・表現力の育成は喫緊の課題である。

そのために、思考・判断・表現する場面を意図的に設定することが重要であると考える。授業の中では、社会的事象の意義や特色、相互の関連を思考する場面を対象とし、生徒が社会的事象から課題を見出すことにより、多面的・多角的に考察し、社会の変化を公正に判断して、その過程や結果を適切に表現する力を身に付けることが重要になる。

本委員会では、思考力・判断力・表現力に焦点を当て、それを向上させるためには単元を通した「受信」→「思考」→「発信」の学習活動が有効であると考えた。また、「思考」を深めさせるためには 1 単位時間の中で、「受信」・「思考」・「発信」の学習活動を行わせることも重要である。そのため、生徒の学習形態として「個→集団→個」の活動を取り入れることで、「思考」が更に深まると考えた。

本委員会が考える「受信」・「思考」・「発信」とは、以下のとおりである。

＜単元の学習活動＞「受信」→「思考」→「発信」の活動
受信：基礎的・基本的事項を徹底して習得する活動
　　様々な資料を読み取り、必要な情報を取り出す活動
思考：既習事項を根拠にして、自分の考えを深め広げる活動
発信：思考したことを活用して、自分の考えを表現し、自ら社会に参画する資質や能力を養う活動

＜「思考」を深めさせる 1 単位時間の学習活動＞「個→集団→個」の活動
「個」の活動　　：「思考」＝自分の考えをもつ
「集団」の活動　：「発信」＝自分の考えを発表する
　　「受信」＝他者の意見を取り入れる
　　「思考」＝取り入れた他者の意見をもとに、自分の考えを深める
「個」の活動　　：「発信」自分の考えを様々な方法で発表する
　　（レポートや意見文を書く、発表する等）

こうした活動を意図的に設定して、スパイラルに行うことで、生徒が自分の考えを明確にして表現する力を身に付けることができた。

3　研究の仮説

研究主題を踏まえて、研究の仮説を次のように設定した。

生徒が思考・判断する場面を、教師が意図的に設定するとともに交流活動を取り入れることで、生徒は自分の考えを明確にして、表現する力を伸ばすことができるであろう。

Ⅱ　研究の構想図

【研究の背景】
＊知識基盤社会
＊グローバル化
＊国際化の一層の推進

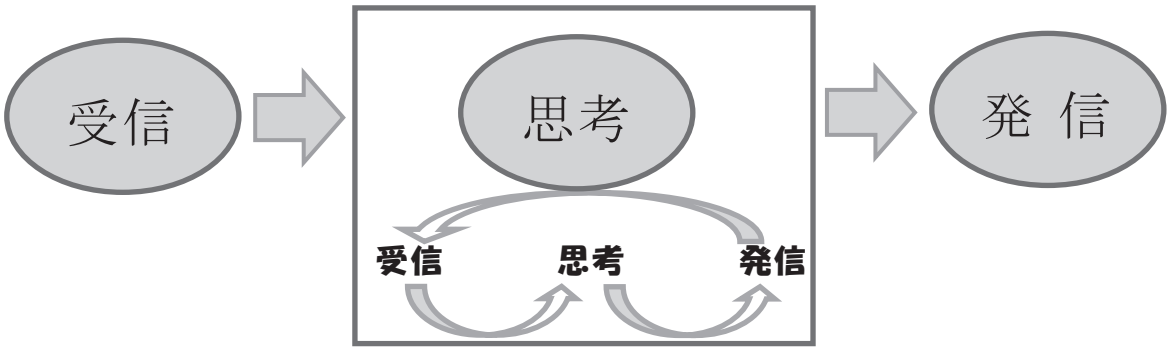
【生徒の実態】
＊平成 25 年度東京都「学力向上を図る調査」結果から、「読み解く力」の中で、特に、「複数の資料から情報を取り出し、比較・関連付けて読み解く」力に課題がある。

【育てたい生徒像】
＊様々な資料から情報を取り出し、比較・関連付けることができる生徒
＊既習事項を通して、自分の考えをもつことできる生徒
＊意見交換を通して、自分の考えを広め、深めることができる生徒
＊意見交換を通して深めた自分の考えを、社会参画につなげることができる生徒

【研究テーマ】
自分の考えを明確にして表現する指導の在り方
―「受信」→「思考」→「発信」の学習活動を通して―

【研究の仮説】
生徒が思考・判断する場を教師が意図的に設定するとともに、交流活動を取り入れることで、生徒は自分の考えを明確にして、表現する力を伸ばすことができるであろう。

【研究の内容】
◆「受信」→「思考」→「発信」を意識した学習活動を工夫する。



＊受信：基礎的・基本的事項を徹底して習得する活動
　　様々な資料を読み取り、必要な情報を取り出す活動
＊思考：既習事項を根拠にして考える活動
　①「個→集団→個」の活動の中で、小さな「受信」・「思考」・「発信」を取り入れる
　②思考の視点として、「比べる」・「関連付ける」、「抽象化する」・「具体化する」、「分類する」・「整理する」
＊発信：思考したことを活用して、自分の考えを表現し、自ら社会に参画する資質や能力を養う活動
◆「指導と評価の一体化」を図るため、「受信」・「思考」・「発信」に焦点を当て、評価規準を明らかにし、学習評価方法の工夫改善をする。

Ⅲ　研究の方法

１　指導事例の視点

本研究では、以下の視点で三つの単元において指導計画を開発し、指導事例１、２において、検証授業を行った。

指導事例１　公民的分野「人権の尊重と日本国憲法の基本的原則」

①　単元を通して、「受信」→「思考」→「発信」をスパイラルに行い、自分の考えを深めさせる。

②　指導計画に具体的な事例を取り上げ、他者の意見を「比べる」・「関連付ける」という視点で、「思考」を行い、合意形成を行わせる。

③　既習事項や他者の意見等を「受信」し、「思考」することを通して、社会参画へ結び付けさせる。

指導事例２　公民的分野「私たちが生きる現代社会と文化」

①　立場を変えて考えるという「比べる」・「関連付ける」学習活動を通して、思考力・判断力を身に付けさせる。

②　身近な伝統工芸品から、文化を受け継ぎ、創り出す意義に気付かせる。「具体化」から「抽象化」という視点で、「思考」を行わせる。

③　他者の意見を「受信」することを通して「思考」させ、社会参画「発信」へ結び付けさせる。

指導事例３　歴史的分野「近世成立期の日本」

①　文化の特色を、その時代の社会背景（政治、社会・経済、対外関係など）とのつながりから捉えさせる。

②　既習事項をふまえ、情報を的確に取り出す「受信」を通して、情報を「分類」「整理」し、文化の特色と社会背景とのつながりを「思考」へ結び付ける。

③　意見交換という「発信」を通して、他者の意見を「受信」し、多面的・多角的に「思考」することを通して、レポートを作成させ「発信」へ結び付けさせる。

２　評価規準の具体化について

各指導事例において、「学習活動に即した具体的な評価規準」を明らかにし、学習評価方法の工夫を行った。

Ⅳ　指導事例

1　指導事例１

身近な生活との関わりから、自分の立場を明らかにして考えを深めさせる。

(1)　単元名　人間の尊重と日本国憲法

(2)　単元の目標

・人間の尊重についての考え方を、基本的人権を中心に深め、法の意義を理解する。

・基本的人権が日本国憲法の基本原則であり、その理念が社会生活を具体化する有効な指針であることを理解する。

(3)　単元の評価規準

	ア 社会的事象への関心･意欲･態度	イ 社会的な思考･判断･表現	ウ 資料活用の技能	エ 社会的事象についての知識･理解
単元の評価規準	・個人の尊重の考えと法に対する関心を高め、意欲的に民主的な社会生活について考えようとする。 ・人権に関する課題について関心をもち、意欲的に追究しようとする。	・具体的な事例から課題を発見して様々な視点から考察し、その過程や結果を適切に表現している。 ・人権思想について、多面的・多角的に考察し適切に表現している。	・人間の尊重についての考え方や法に関する様々な資料を収集し、情報を適切に読み取り、図表などにまとめている。	・個人の尊重や社会生活における法の意義や憲法の基本原理天皇の地位と国事に関する行為について理解し、その知識を身に付けている。
学習活動に即した具体的な評価規準	①基本的人権に関する身近な課題を、憲法との関わりについて、意欲的に調べようとする。 ②全ての人々が尊重され、共生社会を実現するために考え、意欲的に話合いに参加しようとする。 ③基本的人権と社会生活とのつながりに関心をもち、具体的な事例を意欲的に探したり、調べたりする。 ④人権を巡る近年の動向について関心を高め、人権上の課題について関心をもとうとする。 ⑤変わりゆく社会において時事問題に興味・関心をもとうとする。	①憲法の基本原理に関わる諸課題の解決するため多面的・多角的に考察し表現している。 ②話合いの中で、自分の考えを根拠を挙げて分かりやすく表現している。 ③資料から様々な課題の内容について調べ、話し合いなどを通じて多面的・多角的に考え、自らの考えまとめている。 ④人権上の新しい課題について、対立と合意等の見方や考え方を活用して、意見を交換したり文章にまとめたりしている。 ⑤現代の人権上の課題について話し合い、相手の主張を理解し、的確な討論をしている。	①人権保障の考え方に関する様々な情報を収集し、適切に読み取ったり、図表などにまとめたりしている。 ②新聞記事等から基本的人権に関する課題について読み取り、それを文章にまとめている。 ③社会の変化により人権上の課題が生じたことについて、資料から読み取り、図表などにまとめている。 ④現代社会における人権上の課題について、教科書や資料集の図表などから論題に関連するものを選び、必要な情報を読み取っている。	①人権が法によって保障さていることや日本国憲法の基本原理と現代社会における意義、天皇の地位と国事行為についての知識を身に付けている。 ②基本的人権について、具体的な生活との関わりから理解し、自由・権利と責任・義務の関係を社会生活の基本として広い視野から正しく理解している。 ③具体的な事例を通して、人権の考え方が変化することに気付くとともに、新しい人権が主張されるようになってきたことを理解している。

(4)　単元の指導計画と評価計画（15 時間扱い）

	学習内容・学習活動	受信・思考・発信	学習活動に即した具体的な評価規準（評価方法）
第１時	「ちがいのちがい」：12 枚の事例を元に、あってもよい違い、あってはいけない違いについて学習する。	受信・思考	ア⑤ イ② （観察、発言）
第２時	「人権の歴史」：人権という考えが歴史的にどのように発展してきたのかを学習する。	受信	ア①⑤ ア② （発言、プリント）
第３時	「日本国憲法の基本原理」：日本国憲法の位置付けと基本原理について学習する。	受信	ア⑤ イ①　ウ① エ①（プリント）
第４時	「日本の平和主義」：日本国憲法における平和主義について学習する。	受信・思考・発信	ア⑤　イ①　（プリント エ①（発言）
第５時	「基本的人権と個人の尊重」：基本的人権の尊重とはどのような意味なのかを学習する。	受信	ア①⑤ ウ① （発言、プリント）
第６時	「平等権と共生社会１」：差別を解消するためにどのような努力が必要なのか平等権について学習する。	受信	ア②③⑤ イ③ （発言、プリント）
第７時 身近な事例 1	「平等権と共生社会２」:ワークシート「考えてみよう　外国人の入浴お断り」※事例から対立する立場の主張を読み取り、グループ討議を通して､問題点を明らかにする。	受信・思考・発信	ア⑤ イ③⑤（観察） ウ②（発言） （プリント）
第８時	「自由権１」：日本国憲法が定める自由権の内容について学習する。	受信	ア②③⑤（発言） イ③（プリント）
第９時 身近な事例 2	「自由権２」：ワークシート「考えてみよう　区画整理」※対立する意見からグループ討議を通して合意形成できる点について考える。	受信・思考・発信	ア⑤ イ③⑤（観察） ウ②（発言） （プリント）
第 10 時	「社会権１」：日本国憲法が定める社会権について学習する。	受信	ア②③⑤（発言） ウ①（プリント）
第 11 時 身近な事例 3	「社会権２」：ワークシート「考えてみよう　ゲームセンターで遊ぶ」※対立する三者の意見及び既習事項を活用しながら、グループ討議を通して、合意形成をする。	受信・思考・発信	ア⑤ イ⑤（観察） ウ②（発言） ワークシート

第 12 校時	「人権保障を確かなものに」：日本国憲法で保障される基本的人権を守るための権利について学習する。	受信	ア②③⑤（発言） エ①②（プリント）
第 13 校時	「社会の変化と『新しい人権』１」：新しい人権について学習する。	受信	ア③⑤（発言） イ④（プリント）
第 14 校時	「グローバル社会と人権」：グローバル化や科学技術の発展によって、人権の考え方がどのように変わったかを学習する。	受信	エ③（発言） ア④（プリント）
第 15 校時 （本時） 身近な事例 4	「人権の考え方を使って社会を見てみよう」：ワークシート「防犯カメラ」 ※対立する意見からグループ討議を通し、自分の考えを深め、解決策を考える。	受信・思考・発信	ア⑤ イ③④⑤（観察） ウ③（発言） （プリント）

(5)　本時（全 15 時間中 15 時間目）

①本時の目標

・具体的事例を基に自分の考えを明確にし、自分なりの考えをまとめ発表することにより、表現する力を伸ばす。

・他人の意見を知ることにより、理解を深め、考察力を高められるようにする。

②本時の展開

時間	●学習活動	○指導上の留意点 ●配慮事項等	学習活動に即した具体的な評価規準 （評価方法）
導　入 ５分	●最近のニュースについて		アー⑤ （発言）
	主発問：意見が対立した場合、どのように合意していけば良いのかを考えよう。		
展　開 42分	●本時の目標や活動について確認する。	○本時の目標はプリントに明記しておく	
		○個人で考え、４人１組のグループで話合い、その話し合いを基に自分の考えをもてることを目標にする。	
	●資料「防犯カメラについて」から撮影された映像を想起させる。	○防犯カメラを映像で確認する	ア⑤ （受信）
	●「考えてみよう１」映像の公開について考える。	○映像で公開するという視点で自分の考えをワークシートにまとめさせる	ウ③ （プリント） （思考）

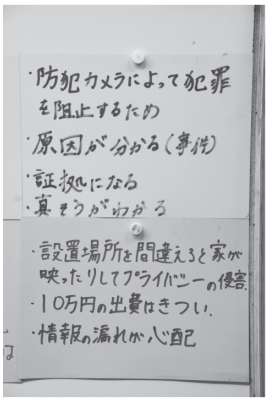
	●「考えてみよう２」防犯カメラの設置に賛成・慎重な理由を考える。 ●「考えてみよう３」防犯カメラ設置について賛成意見・慎重な意見をグループで話し合い、発表する。 ４人１組のグループで話し合う。 ●「考えてみよう４」どのような解決方法があるかを考える。 ●防犯カメラ設置の解決案を発表する。 各班で色画用紙に賛成意見・反対意見き、ホワイトボードに提示して発表する。	○ワークシートに自分の考えをまとめさせる ○防犯カメラの設置について賛成意見・慎重な意見の理由を話し合い、他の人の意見を知ることができるようにする。 ○自分なりの解決方法を考えさせる。	ウ③ （プリント） （思考） イ⑤ （観察、発言） 思考・発信・受信 イ③ （プリント） 思考・発信・受信 イ④ （プリント、発表発言） 思考・発信・受信
まとめ ３分	●他人の意見を知り、自分の考えをまとめ発表する。	●「確認しよう」に記入させ、本日の授業の振り返りをさせる。	

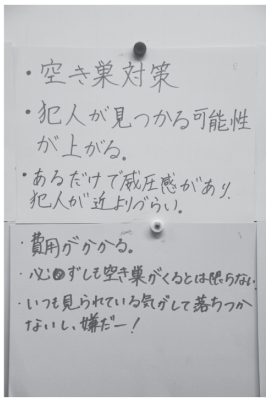
③本時の評価規準（プリント「考えてみよう４」の評価）

賛成・反対を明らかにし、異なる意見を取り入れ、自分なりの解決策を考えている。

【4人一組のグループでの話し合い】

【グループごとに、賛成意見と反対意見をホワイトボードに掲示】





(6)　授業の結果と考察

本単元では、単元計画の中に、具体的な事例を意図的に設定した。（第７、９、11、16 時）。の結果、生徒は次第に「比べる」・「関連付ける」といった視点を生かして、次第に考えをまとめられるようになった。そして、単元のまとめである本時においては、対立する争点を自ら考え、双方の立場で追求することにとり、解決策を考えることができるようになった。

＜生徒が考えた解決策の例＞

設置台数をとりあえず２台ぐらいにして、負担を減らす。そして、やはりもっと必要だということになったら後から付ける。台数を減らすかわりにパトロールをみんなでやったり、窓の鍵を壊されても入りにくいような器具をつけたりするなど、お金があまりかからない別の対策を考える。

防犯カメラをそのマンションの住民と一緒に購入する。お金の負担が大事か、命が大事かをよく考え、住民と設置場所を考え、プライバシーの侵害にならないよう家の中が映らないようにする。

また、定期考査において、本単元で育てた思考力を生かした応用問題を出題したところ、本単元で考えた意見に比べ、既習事項を生かし具体的な問題点を複数あげた解決策を書く生徒が増えた。

＜ある生徒の解答例＞

＜授業プリントより＞ 犯人見付け出すには映像の公開はいいが、いくつかの罪にふれてしまうならやめた方が良い。 ＜定期考査の解答より＞ プライバシー権を無視するのは問題がある。犯人にも自由権が保障されるべきである。

２　指導事例２

身近な地域を題材に、「私たちの生きる現代社会と文化」について考えさせる。

(1)　単元名　　私たちと現代社会

(2)　単元の目標

・　現代社会では、いろいろな場面において伝統や文化の影響を受けていることを理解する。

・　我が国の伝統と文化に関心をもち、文化を受け継ぎ、創り出していくことの意義に気付く。

(3)　単元の評価規準

	ア 社会的事象への関心･意欲･態度	イ 社会的な思考･判断･表現	ウ 資料活用の技能	エ 社会的事象についての知識･理解
単元の評価規準	・現代日本の社会や我が国の伝統と文化に対する関心を高め、それらを意欲的に追究しようとする。	・現代日本の特色や現代社会における文化の意義や影響、文化の継承と創造の意義について多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。	・現代日本の社会や我が国の伝統と文化に関する様々な資料を収集し、有用な情報を適切に選択して、読み取ったり図表などにまとめたりしている。	・現代社会の特色や現代社会における文化の意義や影響を理解し、その知識を身に付けている。
学習活動に即した具体的な評価規準	①情報が人々の行動に大きな影響を与え、情報そのものが価値をもつことに気付こうとする。 ②身近な地域の伝統や文化への関心を通して、身近な地域に対する愛着を深めようとする。	①多くの情報の中から、自分にとって必要な情報を選択している。 ②価値観や立場、利害関係などを理解し尊重している。 ③伝統や文化を受け継ぐ人の思いに気付いている。	①様々な資料から情報を読み解きながらロールプレイに取り組んでいる。	①身近な地域の伝統や文化（伝統的工芸品）の意義を理解し、その知識を身に付けている。

(4)　単元の指導計画と評価計画（２時間扱い）

時	学習内容・学習活動	受信・思考・発信	学習活動に即した具体的な評価規準（評価方法）
第１時	科学技術の発達と私たちの生活を知る。	受信・思考	ア①　イ①　エ① （発言・プリント）
第２時 （本時）	文化の意義と継承、文化の創造の意義を理解する。	受信・思考・発信	ア②　イ②③　ウ① （発言・プリント）

(5)　本時

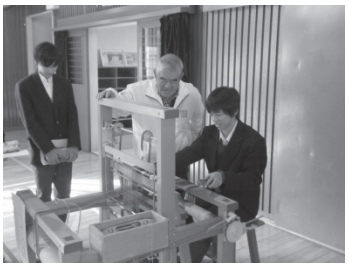
①本時の目標

・身近な地域の伝統や文化を通して、伝統や文化が我が国の歴史や産業の発展と関わりがあることを理解する。

・価値観や立場、利害関係の違いなどを尊重しながら、身近な地域の伝統や文化の在り方を考える。

・身近な地域と我が国の伝統や文化の共通性を考える。

村山大島紬：東京都武蔵村山市周辺で伝統的に生産される紬の絹布や、それを仕立てた和服で、玉繭から紡いだ絹糸を板締め染色し、絣織によって文様を出す独特の技法で織られる。



【村山大島紬】

②本時の展開

時間	●学習活動	○指導上の留意点　●配慮事項	学習活動に即した具体的な評価基準(評価方法)
導入 10分	●前時のアンケートの確認 ●ロールプレイの準備をする。	○伝統や文化を大切に受け継ぐために、どのような取り組みをしていたか振り返る。 ○身近な地域の伝統や文化の保存のために、具体的に何をしているか考える。 ○ロールプレイの登場人物に合わせた意見を考える。〔個〕	・伝統や文化について、自分の考えをもつことができる。（受信①）
展開 1 15分	【展開１】 ４人組になり、①、②の役割を２対２で交代しながら担当し、意見交換をする。 ロールプレイ（１） ・あなたが地域の住民だったら、伝統や文化を①残す活動をするか、②残す活動をしないか。 ロールプレイ（２） ・あなたが市長だったら、伝統や文化を①残す活動をするか、②残す活動をしないか。 ロールプレイ（３） ・あなたが伝統や文化を継承している跡取りだったら、家業を①受け継ぐか、②受け継がないか。	○価値観、立場、利害関係が違えば、考え方も違うことに気付かせていく。 ●ロールプレイは、１つの立場で２分ごとに交代する。 ●ロールプレイ中に自分の意見や考え方の違う意見をメモする。 ○伝統や文化を継承している跡取りについては、生活が成り立つか、成り立たないかも考慮して考えさせる。 	・立場によって考え方が異なることを、ロールプレイを通して気付く。（思考①）（発信①）
展開 2 15分	【展開２】 ●身近な地域の伝統や文化を振り返る。 ●身近な地域の伝統や文化と、日本の歴史や産業の発展との関連に気付く。 ●身近な地域で、伝統や文化を受け継ぐ人の思いを聞く。（インタビューしたビデオを見る。） ●伝統や文化を受け継ぐ人の思いを聞いて、伝統や文化の価値について、自分の考えを書く。 ●自分が身近な地域の伝統や文化についてどのように考えていたか、地域の一員としてどのように考えていくべきか、自分の考えをまとめる。	●身近な地域にも伝統や文化が受け継がれていることに気付かせる。 ○実際に伝統や文化を受け継ぐ人のインタビューを聞いて、ロールプレイで考えた意見に実感をもたせ、考えを深めさせる。 ●伝統や文化に対して、自分の考えが変わったり深まったりしたことを書かせる。	・インタビューを聞いて、伝統や文化が自分の身近にも受け継がれていることに気付く。（受信②） ・インタビューを聞いて、自分の考えを深める。（思考②）
まとめ 10分	●なぜ、伝統や文化を受け継がなければならないといわれるのか、根拠を示して自分の考えを書く。 ・根拠を箇条書きする。 ・自分の考えを書く。	○先人たちの歴史や思いを受け継ぐ伝統や文化を簡単になくしてはならないことに気付く。 ●根拠を基に文章を書くことができるように、先にキーワードを箇条書きし、根拠となる考えをまとめさせる。	・伝統や文化を受け継ぐ自分の思いを書く。（発信②）

		〔根拠の例〕 ・歴史や先人の思いに馳せる ・途絶えればなくなる	

③本時の評価規準

第１時のアンケートとの結果を比較し、その変容を見る。

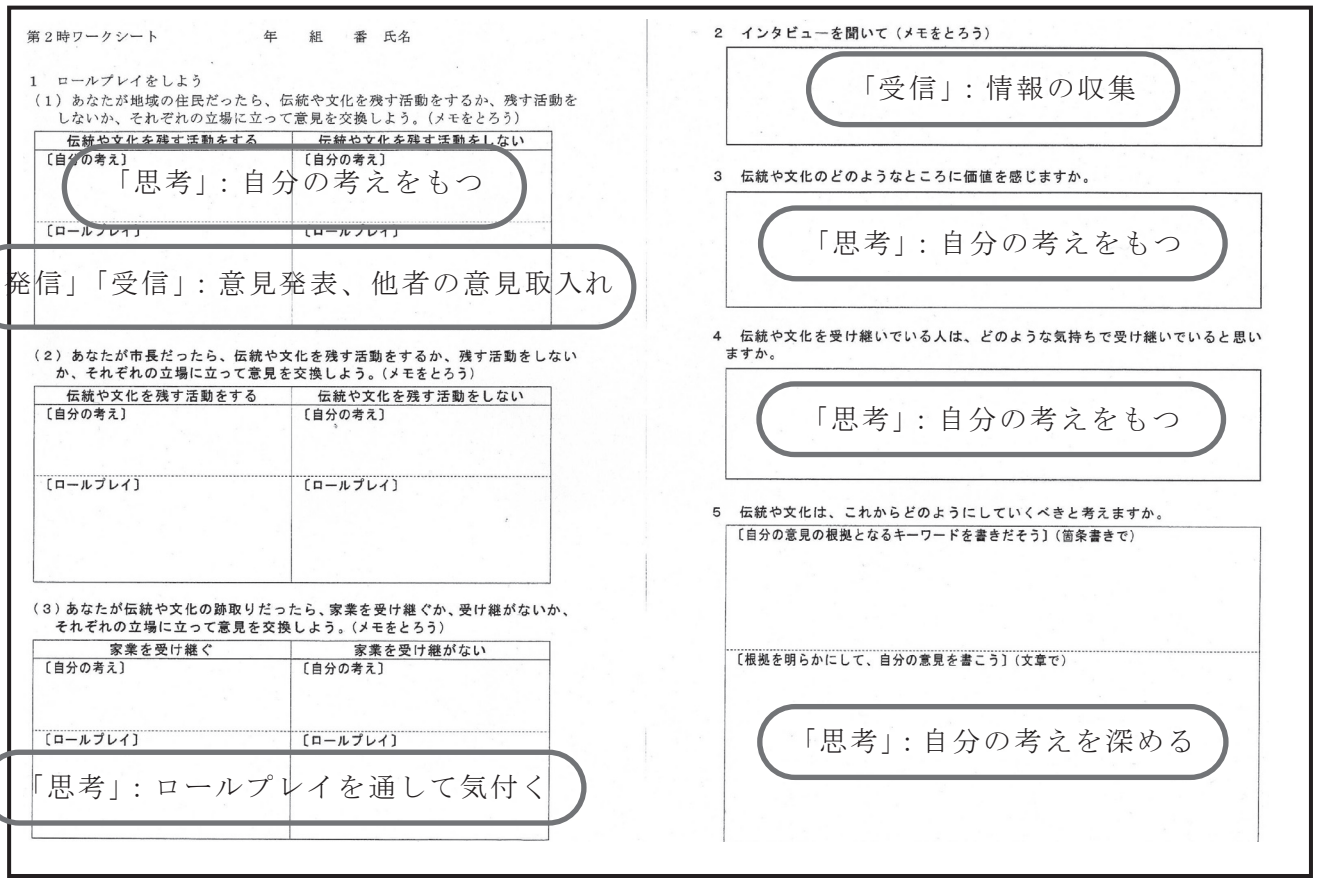
（第１時の項目５～７と第２時の項目３～５は、同じ設問）

伝統や文化の価値や受け継ぐ人の気持ちを考えながら、自分の意見を書いている。

【資料】

第１時のアンケート

１　修学旅行で伝統や文化を感じることはできましたか。
　YES　NO
２　「１」で「YES」と回答した場合、どのようなところに伝統や文化を感じましたか。
３　あなたの日常生活に、伝統や文化を感じることはありますか。
　YES　NO
４　YES の人は答えてください。
　その伝統や文化は、日常生活にどのように生かされていますか。具体的に書きましょう。
５　伝統や文化のどのようなところに価値を感じますか。
６　伝統や文化を受け継いでいる人は、どのような気持ちで受け継いでいると思いますか。
７　伝統や文化は、これからどのようにしていくべきと考えますか。


第２時ワークシート　　年　組　番　氏名

１　ロールプレイをしよう

（１）あなたが地域の住民だったら、伝統や文化を残す活動をするか、残す活動をしないか、それぞれの立場に立って意見を交換しよう。（メモをとろう）

伝統や文化を残す活動をする	伝統や文化を残す活動をしない
〔自分の考え〕	〔自分の考え〕
〔ロールプレイ〕	〔ロールプレイ〕

「思考」：自分の考えをもつ

「発信」「受信」：意見発表、他者の意見取入れ

（２）あなたが市長だったら、伝統や文化を残す活動をするか、残す活動をしないか、それぞれの立場に立って意見を交換しよう。（メモをとろう）

伝統や文化を残す活動をする	伝統や文化を残す活動をしない
〔自分の考え〕	〔自分の考え〕
〔ロールプレイ〕	〔ロールプレイ〕

（３）あなたが伝統や文化の跡取りだったら、家業を受け継ぐか、受け継がないか、それぞれの立場に立って意見を交換しよう。（メモをとろう）

家業を受け継ぐ	家業を受け継がない
〔自分の考え〕	〔自分の考え〕
〔ロールプレイ〕	〔ロールプレイ〕

「思考」：ロールプレイを通して気付く

２　インタビューを聞いて（メモをとろう）

「受信」：情報の収集

３　伝統や文化のどのようなところに価値を感じますか。

「思考」：自分の考えをもつ

４　伝統や文化を受け継いでいる人は、どのような気持ちで受け継いでいると思いますか。

「思考」：自分の考えをもつ

５　伝統や文化は、これからどのようにしていくべきと考えますか。

〔自分の意見の根拠となるキーワードを書きだそう〕（箇条書きで）

〔根拠を明らかにして、自分の意見を書こう〕（文章で）

「思考」：自分の考えを深める

(6)　「伝統や文化はこれからどのようにしていくべきと考えますか」について生徒の意見

伝統や文化は残すことが必要だと思いました。なぜなら、伝統や文化を受け継いでいる人がどんな思いでここまでやってきたのか、ここで終わらせたら今までやってきたことがそこで終わってしまうなどを考えてみると、伝統や文化は残す必要があると思いました。

古き文化は大切だと思うと同時に、新しい文化も大切だと思います。

(7)　授業の結果と考察

○　第１時のアンケートでは、「伝統や文化のどのようなところに価値を感じますか。」について自分の身近にある伝統や文化について述べた生徒はいなかった。また、「伝統や文化を受け継いでいる人は、どのような気持ちで受け継いでいると思いますか。」について、「これからも受け継いでいってほしいと思っている」と記述していたが、伝統や文化を受け継ぐことの大変さについて記述していなかった。さらに、「伝統や文化は、これからどのようにしていくべきと考えますか。」について、文化や伝統は大切でも、受け継ぐために自分がどのような努力をするべきか記述した生徒はいなかった。これらのことから、生徒は身近にある伝統や文化に価値は見出しにくく、伝統や文化は大切でも、受け継いでいくために具体的に考えたことがある生徒はほとんどいないことが分かった。

○　第２時のロールプレイでは、役割を交代して意見交換をするため、３項目全ておいて双方の意見を記入できた生徒は、約半数であった。しかし、実際のロールプレイの場面では、相手の意見を参考に自分の考えを深めることができることを分かった後は、意見交換が円滑に行われるようになった。

○　伝統や文化を受け継ぐ思いについて「村山織物協同組合」の理事長にインタビューを行ったビデオを生徒に見せたところ、今まで自分たちが考えていたことと同じであることが分かり、生徒たちの思考が具体的にまとまった。

○　第２時のまとめでは、多くの生徒が思考を深めていた。ロールプレイによって異なる立場の意見を受け入れ、自分なりに解釈して自分の意見新たに考えたためであると考えられる。

以下は、生徒の変容の例である。

＊「伝統や文化を受け継いでいる人は、どのような気持ちで受け継いでいると思いますか。」

＜第１時＞この文化をもっと広めてほしい。	＜第２時＞受け継ぐのは大変でも、やりがいのある価値のあるものなので受け継いでいきたいという気持ち

＊「伝統や文化は、これからどのようにしていくべきと考えますか。」

＜第１時＞これからも受け継いで、古き心を忘れないようにする。	＜第２時＞伝統というものは素晴らしいものだし、市の活性化などにもなるから。また、もっといろいろな人に知ってもらうために、もっと伝統的工芸品などの展示会をした方がいいと思う。（「市長だったら」の立場で考えたことを深めて記述している）

３　指導事例３

文化の特色を、その時代の社会背景（政治、社会・経済、対外関係など）とのつながりから捉えさせる。

(1)　単元名　「近世成立期の日本」

(2)　単元の目標

戦国の動乱、ヨーロッパ人の来航の背景とその影響、織田・豊臣による統一事業とその当時の対外関係、武将や豪商などの生活文化の展開などを通して、近世社会の基礎がつくられていったことを理解する。

(3)　単元の評価規準

	ア 社会的事象への関心・意欲・態度	イ 社会的な思考・判断・表現	ウ 資料活用の技能	エ 社会的事象についての知識・理解
単元の評価規準	近世成立期の歴史的事象に対する関心を高め、意欲追究し、近世成立期の特色を捉えようとするとともに、その文化遺産を尊重しようとする。	戦国の動乱、ヨーロッパ人の来航の背景とその影響、織田・豊臣による統一事業と当時の対外関係、武将や豪商などの生活文化の展開などについて多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。	戦国の動乱、ヨーロッパ人の来航の背景とその影響、織田・豊臣による統一事業とその当時の対外関係、武将や豪商などの生活文化の展開などに関する様々な資料を収集し、情報を適切に選択し、読み取り、図表にまとめている。	近世社会の基礎がつくられていったことを理解し、その知識を身につけている。
学習活動に即した具体的な評価規準	①近世成立期の政治、社会・経済、対外関係について関心をもち意欲的に課題を追究しようとする。 ②近世成立期の社会と文化の関連や現在に残る文化財について関心をもち、意欲的に課題を追究しようとする。	①近世成立期の政治、社会・経済、対外関係に関する資料に基づいて自分の考えをまとめ、表現している。 ②近世成立期の社会と文化との関連に関する資料や既習事項に基づいて自分の考えをまとめ、表現している。	①近世成立期の政治、社会・経済、対外関係の理解に必要な資料を選択し、読み取っている。 ②近世成立期の社会と文化との関連に関する資料や既習事項から必要な情報を選択し、読み取っている。	①近世成立期の政治、社会・経済、対外関係に関する知識を身に付けている。 ②近世成立期の社会と文化との関連を理解している。

(4)　指導観

ア　単元観

本単元は近世の学習の始めにあたる部分である。この時代は日本社会が東アジアだけでなく、ヨーロッパとも結び付き、一体化する世界の中に日本が位置付けられることになった時代である。また、太閤検地や刀狩りなどによって下剋上や一揆が押さえられ、さらに道路の整備や関所の廃止、貿易などによって商業をはじめとする諸産業が発達するなど、近世社会の基礎が形成された時代でもあり、これらを背景として豪華で雄大な文化が生み出された時代である。

このような社会の様子を学習することを通して、いかにして統制され安定した近世社会が形成されたのかを理解させる単元である。

イ　生徒観

小学校では、ザビエル、織田信長、豊臣秀吉を取り上げ、キリスト教の伝来、織田･豊臣の天下統一について学習している。この分野の学習について、生徒はどのような認識をもっている。確認のために事前のアンケート調査を行った結果は、以下の通りであった。（設問は全て選択問題　対象生徒は 78 人）

人物と歴史的事象との関係では、「ザビエル」に対して「キリスト教の伝来」を選択した生徒の割合は 91%（71 名）、「織田信長」と「楽市・楽座」は 37%（29 名）、「豊臣秀吉」と「検地」、「刀狩り」、「朝鮮侵略」は 32%（25 名）であった。また、歴史的事象の内容を問う設問では、「楽市・楽座」、「検地」、「刀狩り」、「朝鮮出兵」について４つ知識が正しく定着している生徒は 82%（64 名）であった。（ただし、語句と選択肢は一対一対応であり、内容は語句から類推しやすいので、記述式にすると定着率は減少すると考えられる。また、「刀狩り」と「朝鮮出兵」は正しく認識し、「楽市・楽座」と「検地」を逆に答えた生徒が７名いた。３つ以上正しく認識していない生徒は５名であった。）

さらに、「キリスト教保護」、「関所をなくす」、「安土城」、「関白になる」、「天下統一」、「大阪城」の語句をすべて織田信長と豊臣秀吉に適切に当てはめられた生徒はそれぞれ 35%（27 名）、秀吉が 37%（29 名）であった。（「織田信長」の欄に「天下統一」を選んだ生徒は２４％（19 名）いた。）

以上のことから、本単元においては知識・理解が定着していないことが推測される。特に織田信長の印象が強く残っており、授業においては、織田信長と豊臣秀吉の実績の区別、「楽市・楽座」、「検地」、「刀狩り」の内容について既習知識の確認などを行いながら進めてく必要があると考えられる。

ウ　教材観

本単元では、検地や刀狩り、貿易や流通の発達などにより、大名や商人が経済力をもった背景を文化の特色と結び付けて生徒に理解させていく。そのため、文化の特色については特色がなぜ生じたかを、既習の政治や経済、対外関係の授業を振り返りながら追究するような流れをワークシートで考えさせる。このことに、よって文化のもつ特質をより明確に認識することができるものと考えた。

(5)　単元の指導計画と評価計画（７時間扱い）

	●学習活動	受信・思考・発信	学習活動に即した具体的な評価規準
第１時	●イスラム世界と十字軍以降のヨーロッパの変化について知る。 ・イスラム世界の様子について調べる。 ・十字軍以降のヨーロッパの変化について調べる。	受信	ウ①　イスラム文化やルネサンス、宗教改革に関する資料を読み取っている。 エ①　イスラム文化や十字軍以降のヨーロッパの変化を理解している。
第２時	●ヨーロッパの世界進出について知る。 ・スペイン・ポルトガル、イギリス･オランダの世界進出の様子を調べる。	受信	ウ①　ヨーロッパの世界進出の様子を地図などから読み取っている。 エ①　ヨーロッパの世界進出の影響を理解している。
第３時	●ヨーロッパ人の来航と信長の事業を知る。 ・ヨーロッパ人の来航が与えた影響を調べる。 ・信長の事業について、~~を~~調べ、まとめる。	受信・思考	エ①　ヨーロッパ人の来航の影響を理解している。 イ①　信長の政策が社会に与えた影響を考えている。 エ①　信長の事業を理解している。
第４時	●秀吉の事業を知る。 ・秀吉の事業について調べ、まとめる。	受信・思考	イ①　太閤検地と刀狩が社会に与えた影響を考えている。 エ①　太閤検地と刀狩りについて理解している。
第５時	●秀吉の対外政策について知る。 ・南蛮貿易の様子を調べる。 ・秀吉の朝鮮侵略について調べる。	受信	エ①　南蛮貿易の日本への影響を理解している。 エ①　秀吉の朝鮮侵略の過程とその影響を理解している。
第６時（本時）	●安土桃山時代の文化の特色を知る。 ・安土桃山時代の文化の特色に関する資料を探し、関係が深い人々についてグループで調べる。 ・関係する人々がこの時代に経済力をもった理由をグループで調べる。	受信・思考・発信	ア②　課題を追求している。 イ②　歴史的事象と文化の関連を考えている。 ウ②　資料を探し出し、必要な情報を抜き出している。 エ②　安土桃山時代の文化の社会的背景を理解している。

第７時	●安土桃山時代の文化の背景となる社会的事象を知る。 ・論題に対して自分の考えをまとめる。 ・自分の考えを発表し、他者の考えを聞く。 ・レポートにまとめる。	受信・思考・発信	ア②　自分の考えを発表し、また他者の考えを参考にしようとしている。 イ②　自分の考えをレポートにまとめている。 ウ②　資料や既習事項、他者との意見交換などから必要な情報を選択している。 エ②　安土桃山時代の文化の社会的背景を理解している。

(6)　本時の学習

①本時の目標

・安土桃山時代の文化を生み出した社会的背景を理解する。

・安土桃山時代で学習した事項を活用して考察する。

②本時の展開

	●学習活動	○指導上の留意点●配慮事項	評価方法
導入 ５分	●安土桃山時代の文化の特色に関する教師の説明を聞く。 ●単元の学習課題を知る。	○安土桃山時代の文化の特色を示す。 ○単元の最後に書くレポートの論題を明示する。 「なぜ、そのような特色をもつ文化が生まれたのか。」	
展開 40分	●安土桃山時代の文化の特色に関する資料を探す。 ●探し出した資料に関係が深いのはどのような人々か調べる。 ●関係する人々がこの時代に経済力をもった理由を調べる。	○安土桃山時代の文化の特色に関係する資料を教科書や資料集などで調べさせる。 ○資料ごとに関係する人々を確認させる。 ○それらの人々が経済力をもった理由を班で調べさせる。その際、既習事項を振りかえらせる。 ○検地 ●武士の私有地は否定され、年貢は大名に入る。 ●武士は収入を大名に頼るので、下剋上ができなくなる。 ○刀狩り ●一揆を起こしにくくなる。	ア②　個人やグループで課題を追究し、意見交換している。（発信）（プリント） イ②　既習事項を活用し、信長や秀吉の事業、対外関係と文化との関係を考えている。（受信・思考）（プリント） ウ②　安土桃山時代の文化に関する資料を選択し、必

		●　兵農分離が進む。 ○道路の整備 ●輸送の便がよくなる。→商業の発達。 ○関所の廃止 ・輸送の便がよくなる。→商業の発達。 ●貿易 ・貿易に関係する商人の収入が増える。	要な情報を抜き出している。（受信）（プリント） エ②　安土桃山時代の文化の社会的背景を理解している。（思考）（プリント）
ま　とめ ５分	●本日の学習を振り返る。	○大名や商人が経済力を持った理由をまとめさせる。	

③本時の評価規準

ア　単元の評価（プリント、レポート、定期考査）

(ｱ)評価規準

戦国の動乱、ヨーロッパ人の来航の背景とその影響、織田・豊臣による統一事業とその当時の対外関係、武将や豪商などの生活文化の展開などを通して、近世社会の基礎がつくられていったことを理解している。

(ｲ)学習活動に即した具体的な評価規準

検地や刀狩りによって戦乱が押さえられ、関所の廃止や道路の整備などによって諸産業が発達したことを理解している。

イ　安土桃山時代の文化に関するレポートの評価

(ｱ)評価規準

安土桃山時代の文化の特色をその社会背景と関連させて理解し、その知識を身に付けている。

(ｲ)学習活動に即した具体的な評価規準

安土桃山時代の文化の特色を、検地や刀狩り、貿易や諸産業の発達などと関連させて記述している。

【資料】

①第３時のワークシート

織田信長の事業

１年　組　　番　氏名

1，信長の征服領域（資料集Ｐ７８－1）

（1）最終的に信長が支配した領域は、どのくらいだろうか。

・京都を中心に、全国の（　　／　　）くらい。

（2）信長はどのようにして領地を広げていったのだろうか。

・他の（　　）や一向一揆と戦う。

2，信長の政策

（1）征服した領域で検地を行う

征服した地域の領主などから領地の広さや収穫高などを申告させる。（指出検地）

↓

・（　　）の量や動員できる（　　）の数が把握できる。

（2）安土城下での楽市・楽座

・安土城下での商工業はどうなるだろうか。→（　　）

・商工業が盛んになると、戦いに必要な武器や食料の調達は、→（　便利・不便　）

（3）領内の関所の廃止

当時の関所は、荘園領主などが通行税を取ることを主な目的に設置したもの。
大阪から琵琶湖までの淀川には約３８０カ所の関所があったといわれる。

このような関所を廃止すると…

↓

・輸送業者や商人の活動はどうなるだろうか→（　　）

・関所から収入を得ていた荘園領主（貴族や寺社）は、どうなるだろうか。

→（　　）

（4）領内の道路の整備

領内の主な道路の幅を広げる。

↓

・輸送業者や商人の活動はどうなるだろうか→（　　）

・軍隊の移動や補給などはどうなるだろうか→（　　）

◎信長の政策は当時の社会にどのような変化をもたらしただろうか。

「受信」
知識の習得

「思考」
自分の考えをもつ

②第６時のワークシート（本時）

安土桃山時代の文化　①

１年　組　　番　氏名

1，　安土桃山時代の文化の特色をまとめよう。

①

②　　な文化

③　　な文化

④　　の文化

⑤　　文化の影響

「受信」
既習事項の想起

2，　課題「なぜこのような特色をもつ文化が生まれたのだろうか。」

3，　安土桃山時代の文化の特色に関係するものを教科書や資料集で調べよう。

特色	①豪華で雄大な文化	②簡素な文化	③民衆の文化	④外国文化の影響
その特色が見られるもの				
それらに関係する人々				

「受信」：資料の読み取り
「発信」「受信」：意見交流

4，　なぜこれらの人々は、経済力をもつことができたのだろうか。

関係する人々	経済力をもった理由

「発信」「受信」
意見交流
「思考」
社会背景の理解

③第７時のワークシート

安土桃山時代の文化　②

１年　組　　番　氏名

「なぜこのような特色をもつ文化が生まれたのだろうか。」

1，　自分の考えをまとめよう。（箇条書き的にできるだけたくさん挙げよう。）

「思考」
自分の考えをもつ、「個」の活動

2，　他の人の意見を参考にしよう。

「発信」「受信」
意見交流、「集団」の活動

3，　レポートにまとめよう。

安土桃山時代の文化の特色は、以下の４つにまとめられる。
①豪華で雄大な文化　②簡素な文化　③民衆の文化　④外国文化の影響
「なぜこのような特色を持つ文化が生まれたのだろうか。」以下にまとめなさい。

「思考」
自分の考えを深める、「個」の活動

Ⅵ　研究のまとめ

１　「受信」→「思考」→「発信」を意識した学習活動について

①　単元の学習において、「受信」・「思考」・「発信」をスパイラルに取り入れることは、生徒の思考を深めさせるのに有効であった。単元の最初の段階では、「発信」することに自信のない生徒も、単元の中で繰り返し活動することで、自信をもって自分の意見を発表することができた。

②　１単位時間の授業の中に「個」→「グループ」→「個」の活動を取り入れ、「受信」・「思考」・「発信」を繰り返すことは、有効であった。特に、立場を変えてグループ内で考えさせる場面においては、他者の意見を参考に自分の意見を深めることができた。

③　身近な事例や既習事項を想起させることを意図的に設定することは、有効であった。ニュースになっていることや、身近にあるものを使って考えることで、社会参画につながる考えを生むことができた。

④　学習活動を繰り返すことにより、「発信することに生徒は慣れてきたが、社会に参画する資質や能力を養うことについては、今後の課題である。

２　具体的な評価規準を明らかにすることについて

①　単元の「学習活動に即した具体的な評価規準」を三つの指導事例で示した。

②　適正な評価規準の設定、プリントやレポート以外の評価場面の設定については、今後の課題である。

平成 26 年度　研究開発委員会　委員名簿

＜中学校社会科研究開発委員会＞

	学　校　名	職名	氏　名
委員長	東大和市立第二中学校	校　　長	髙岡　麻美
委員	港区立赤坂中学校	主幹教諭	小林　強一
委員	足立区立竹の塚中学校	主任教諭	高田　孝雄
委員	武蔵村山市立第五中学校	指導教諭	市川　敦子

〔担当〕東京都教育庁指導部義務教育特別支援教育指導課　統括指導主事　和田　孝

〈中学校数学研究開発委員会〉

研究主題

「数学的活動を通して数学的な見方や考え方を育む指導法の開発」

研究の概要

数学においては、数学的な見方や考え方を育み、数学への関心を高める指導が重要である。そのためには、題材を数学的に考察する学習を取り入れ、生徒が自ら考え、まとめ、表現したり、他者の意見を聞き修正したりすることを取り入れた展開を行う必要がある。

そこで、本研究では、日常の事象を数学的に解決する学習を行い、生徒が自ら考え表現する場面を設定する指導の工夫について考察する。

1　研究を進める視点

本研究主題に迫るには、教材開発において、ア　数学的に解決する見通しをもちやすいこと、イ　解決の見通しが複数考えられること、個人差に応じる観点から、ウ　どの生徒も見通しをもてるための過程を設定すること、エ　他者と意見交換の過程を設定し、自らの考えを吟味し必要に応じて修正すること、などを取り入れることが必要であると考え、以下に示す単元における指導教材を開発した。

2　具体的な教材の概要

(1)第１学年　比例・反比例

「ウォーターサーバーはいつ交換されたかを予想しよう。」

ア　病院等に設置されているウォーターサーバーの水の減る様子の変化をとらえて日数と減った水の量との関係を比例とみなして考察できるようにする。

イ　日数に対応して、ウォーターサーバーに「残っている水の深さを測り変化を記録する。」「基準となる深さから、減った水の深さを測り変化を記録する。」以上の視点から、表ややグラフ等に表し、考えることができるようにする。

ウ　解決の見通しをもたせるために意見交換する。

エ　解決後にグループや全体での検討を行い他者の方法を評価する。

(2)第２学年　確率

「立方体を重ねてできる立体は何通りできるだろうか。」

ア　立方体を複数個組み合わせてできる立体について、平面図と立面図からイメージし、漏れのないように数え上げるようにする。

イ　数え上げるために数える規則と記録の仕方について工夫ができるようにする。

ウ　解決の見通しをもたせるために、立方体を全員に配布し、作業しながら考えられるようにする。

エ　基本となる課題について、解決方法を有化し、より良い考え方や記録の仕方を考察できるようにする。

(3)第２学年　一次関数

「立方体に輪ゴムをかけると何がどのように変化するだろうか。」

ア　立方体に輪ゴムをかけて、切り取られる部分について、伴って変わる数量の関係を見いだし考察できるようにする。

イ　伴って変わる数量について、自ら設定したり、他の場合を考えたりできるようにする。
ウ　導入時に、考える視点について、具体物を用いながら全体で確認し、どのような規則性があるか見通しがもてるようにする。
エ　変数の設定や解決の方法について意見交換できるようグループや全体検討を設定する。
(4) 第３学年　相似な図形の面積と体積
「折り紙が大きくなると、折ってできる相似な直方体の体積は何倍になるだろうか。」
ア　折り紙を折って実物を作成し、出来上がった立体を観察したり、折り紙を開いて長さを調べたりするなどして、考えを深めやすいやすいよう配慮をする。
イ　実物を見ながら、様々な見方ができるように設定する。
ウ　平面図形での解法を空間図形に適用するなどして考える場を設定する。
エ　解法について生徒が説明する場を設定する。
(5) 第３学年　三平方の定理
「400mトラックの中に、公式のサッカー場は作れるだろうか。」
ア　三平方の定理をどこにどのように適用すればよいかを、例から課題への変化が見えやすいように展開を工夫する。
イ　複数の直角三角形が見いだされるように設定する。
ウ　円に内接する長方形と、半円と長方形で作られる陸上トラックの形に内接する長方形との関連について、全体で検討する場を設定し、見通しをもちやすくする。
エ　検証の過程で、意見交換の場を設定する。

Ⅰ　研究の目的

平成 26 年度に東京都が実施した「児童・生徒の学力向上を図るための調査」では、数学的な見方や考え方をみる「台形の面積の求め方を表す図や説明から、求め方を表す式を考える。」問題の正答率は50.9％であり、「問題文から条件を読み取り、一次方程式の解の吟味の方法を考える。」問題の正答率は44.4％である。さらに、「問題文から２つの数量関係をグラフに表現する方法を考える。」問題の正答率は 6.3％であるなど、課題が指摘されている。

そして、それらの課題から、授業改善のポイントとして、「言語活動を通して数学的な見方や考え方を高めさせる。」「伴って変わる２量の関係を表やグラフなどで捉えさせる。」「日常生活の場面から関数を見いだす。」指導の充実が求められている。

こうした現状から、本研究では、学習指導要領に示す数学的活動を通して、生徒の数学への興味や関心を高めながら、思考力・判断力・表現力を育成するような教材を開発し、普及・啓発することを目的としている。

Ⅱ　研究の方法

本研究では、数学的活動について、生徒の活動や発表にとどまらず、数学的な知識や技能を活用して情報を的確に理解して判断する。そして、その判断について生徒自身が他者の考えなども含めて吟味することに重点を置き教材開発することを確認した。次に、各委員が授業者となって実践ができるよう、当該学年の教材について構想し、委員会で協議を重ね、検証授業を

通して改善を図り、改善指導案にまとめることを繰り返した。また、習熟度別少人数指導等にも活用できるよう、コース別の指導案についても同時に検討した。

１　方法

(1) 教材開発の視点

本研究主題に迫るには、教材開発において、「ア　数学的に解決する見通しをもちやすいこと、「イ　解決の見通しが複数考えられること」、などの視点をもち、指導に当たっては、個人差に応じる観点から、「ウ　どの生徒も見通しをもてるための過程を設定すること」、「エ　他者と意見交換の過程を設定し、自らの考えを吟味し必要に応じて修正すること」などを取り入れることが必要であると考え、これらの視点を踏まえて教材開発を行った。

(2) 指導上の工夫・留意点

数学的な見方や考え方を育むには、思考・判断・表現する場面を授業に設定することが必要である。本研究では、生徒の身近な事象や日常の事象を取り上げ、数学的に解決を図ることに取り組んだ。

事象を数学的に考察するに当たっては、事象の中から情報を取捨選択したり、理想化を図ったりするなどの過程が大切であり、生徒は、これまでの学習でそれらの過程を十分に経験しているとは限らない。したがって、知識や技能の定着を図るための一人一人に応じたきめ細かな指導とは違った、解決過程において「どのような情報が必要か」「既習の内容でこれまでと類似したものはないか」「既習の内容と何が同じでどこが違うのか」、などの視点から十分な配慮をする必要があると考えた。そこで、問題を把握し、解決するための見通しをもたせるために、個人での予想や計画の立案、グループ等での意見交換等を活用した、解決計画の修正などを取り入れることとした。

現在一次関数の指導では、「一次関数とみなす。」という学習を扱っている。その素地として、比例・反比例の学習の中で、日ごとのウォーターサーバーの水の減り方を取り上げ、「データを作ること」「変化を比例とみなすこと」などを経験できるようにした。他の課題においても、同様の視点から工夫をした。

(3) 数学的活動との関連

第２、３学年における数学的活動は、「ア　既習の数学を基にして、数や図形の性質などを見いだし、発展させる活動」、「イ　日常生活や社会で、数学を利用する活動」、「ウ　数学的な表現を用いて、根拠を明らかにし筋道立てて説明し伝え合う活動」とある。本研究においては、イ、ウで示された数学的活動を基にして教材開発を行った。

２　研究の進め方

本研究では、４月、５月には数学的活動についての理解を深めるとともに、思考・判断・表現する力を育むための授業の展開や教材のアイディアについて協議を重ねた。９月までに指導案の検討を行い、10月からは検証授業を実施するとともに授業後に改善を図った。

Ⅲ　研究の内容

1　第１学年　比例・反比例　「ウォーターサーバーはいつ交換されたかを予想しよう。」

(1)　本時の目標

ア　伴って変わる二つの数量を見いだし､その関係を式に表すことができる｡(数学的な技能)

イ　比例の関係を根拠に推測した内容を説明できる。　(数学的な見方や考え方)

(2)　本時の展開

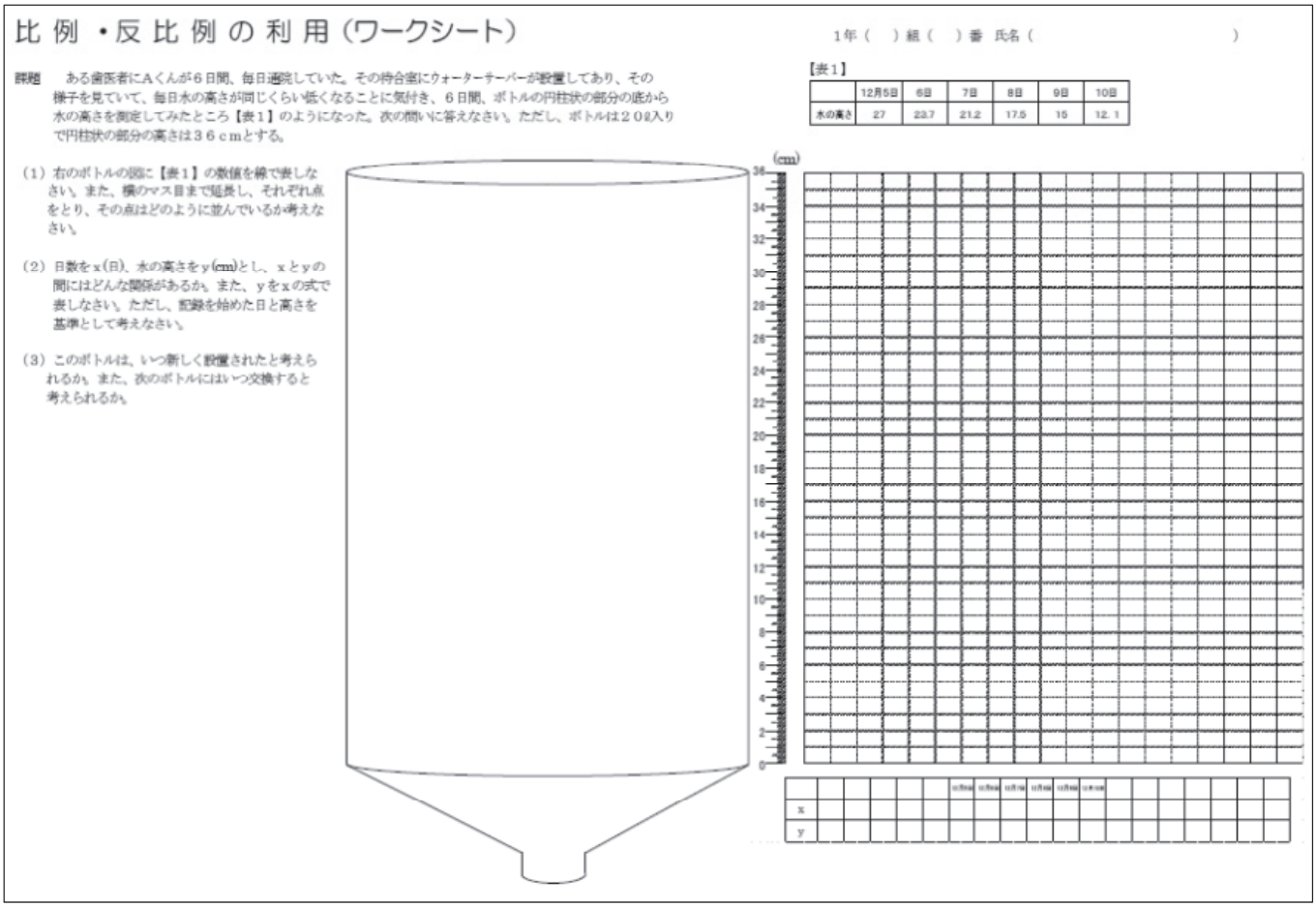
	学習活動・学習内容	●指導上の留意点　◎評価
導入	○ウォーターサーバーについて説明し、興味を喚起する。 Ｔ：ウォーターサーバーについて、変化する量は何でしょうか。 Ｓ：水の量、水の高さ、押す回数等	●映像でウォーターサーバーを提示し理解させる。 ●変化する量をできるだけ多く出させ、全体で共有する。
展開	【課題】ある歯医者にＡ君が６日間、毎日通院していた。その待合室には、ウォーターサーバーが設置してあり、Ａさんは、毎日水の高さが少しずつ低くなっていることに気付いた。そこで、Ａ君は、６日間、ボトルの円柱状の部分の底からの水の位置を測定したところ【表１】のようになった。次の問いに答えなさい。ただし、ボトルは、20ℓ入で円柱の部分の高さは 36 ㎝である。 【表１】	

	12 月５日	６日	７日	８日	９日	10 日
水の位置	27 ㎝	23.7 ㎝	21.2 ㎝	17.5 ㎝	15 ㎝	12.3 ㎝

○表の見方を確認し、ボトルの水の減る様子を想起する。 Ｔ：表からどのようなことが分かりますか。 Ｓ：毎日、水の量が減っている。	●日にちと水の高さが伴って変わっていることに着目させる。
(1)ワークシートのボトルの図に【表 1】の数値の位置に点をとり、右のマス目まで延長し、それぞれ点をとりなさい。また、その点はどのように並んでいるか考えなさい。	
○ワークシートのボトルの目盛のところに点をとり、座標上の位置に取り直して、変化の様子を考察する。 Ｔ：マス目の点の並び方で気が付くことはありませんか。 Ｓ：右下がりになっている。直線に近い形になっている。	●ワークシートへの記入の方法を例示し、説明する。 ◎点を適切にとり、比例と関連付けて考えているか。
(2)日数をχ(日)、水の位置を　y(㎝)として、χとｙの間にはどのような関係があるかを、記録を始めた日とそのときの位置を基準として考え、ｙをχの式で表しなさい。	
Ｔ：基準となる線を軸と考えると、χとｙの間にはどのような関係があると考えられますか。 Ｓ：比例の関係がある。	●増加する量と減少する量とに着目させ、基準を 12 月５日の位置に設定させる。
(3)このボトルは、いつ設置されたと考えられるか。また次のボトルへはいつ交換すると予想されるかを根拠を示し説明しなさい。	
○比例の式を基にして、χの値とｙ＝36 になる時のχの値とｙ＝０になる時のχの値から推測し説明する。	◎比例関係を基に考察し、説明できる。(見方や考え方)

まとめ	(4)このような考え方は、日常生活のどのような場面に生かされているか考えなさい。	
	○日常生活で比例定数がほぼ一定の場面を想起し、発表する。 Ｔ：日常生活で、同じように比例定数がほぼ一定と考えられるような例はありませんか。 Ｓ：時計の電池の残量、自分の貯金、お小遣いの残り等	●発表の際は、比例定数が正になる場合と負になる場合に分けて整理する。 ●既習事項と関連付けてまとめる。 ●日常の事象を想起させ、数学の有用性を実感させる。

【ワークシート】



比例・反比例の利用（ワークシート）

1年（　）組（　）番　氏名（　　）

問題　ある歯医者にＡくんが６日間、毎日通院していた。その待合室にウォーターサーバーが設置してあり、その様子を見ていて、毎日水の高さが同じくらい低くなることに気付き、６日間、ボトルの円柱状の部分の底から水の高さを測定してみたところ【表１】のようになった。次の問いに答えなさい。ただし、ボトルは２０ℓ入りで円柱状の部分の高さは３６ｃｍとする。

【表１】

	12月5日	6日	7日	8日	9日	10日
水の高さ	27	23.7	21.2	17.5	15	12.1

（１）右のボトルの図に【表１】の数値を線で表しなさい。また、横のマス目まで延長し、それぞれ点をとり、その点はどのように並んでいるか考えなさい。

（２）日数をｘ(日)、水の高さをｙ(cm)とし、ｘとｙの間にはどんな関係があるか。また、ｙをｘの式で表しなさい。ただし、記録を始めた日と高さを基準として考えなさい。

（３）このボトルは、いつ新しく設置されたと考えられるか。また、次のボトルにはいつ交換すると考えられるか。

(cm)

x																	
y																	

2　第２学年　確率　「立方体を重ねてできる立体は何通りできるだろうか。」

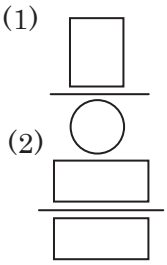
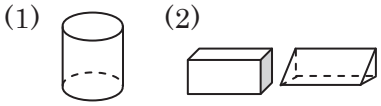
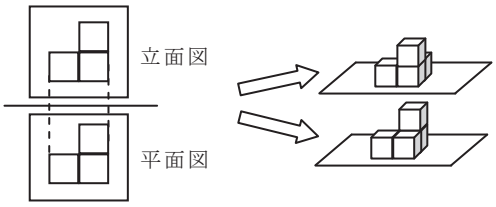
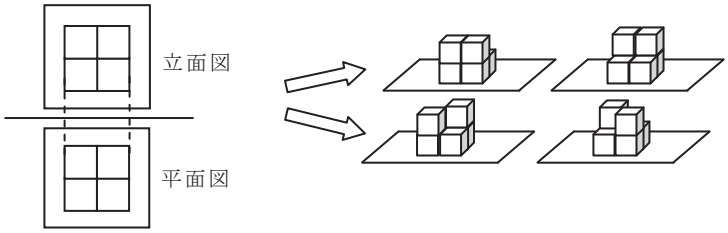
(1)本時の目標

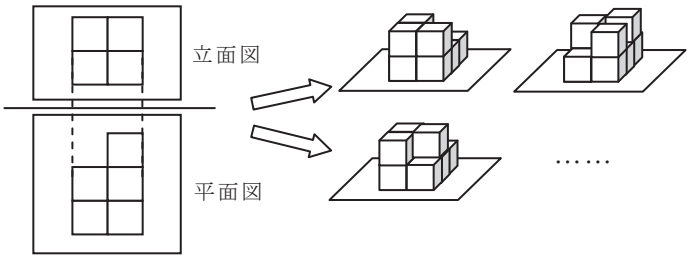
ア　投影図の条件を満たす立体を数える方法を工夫することができる。

（数学的な見方や考え方）

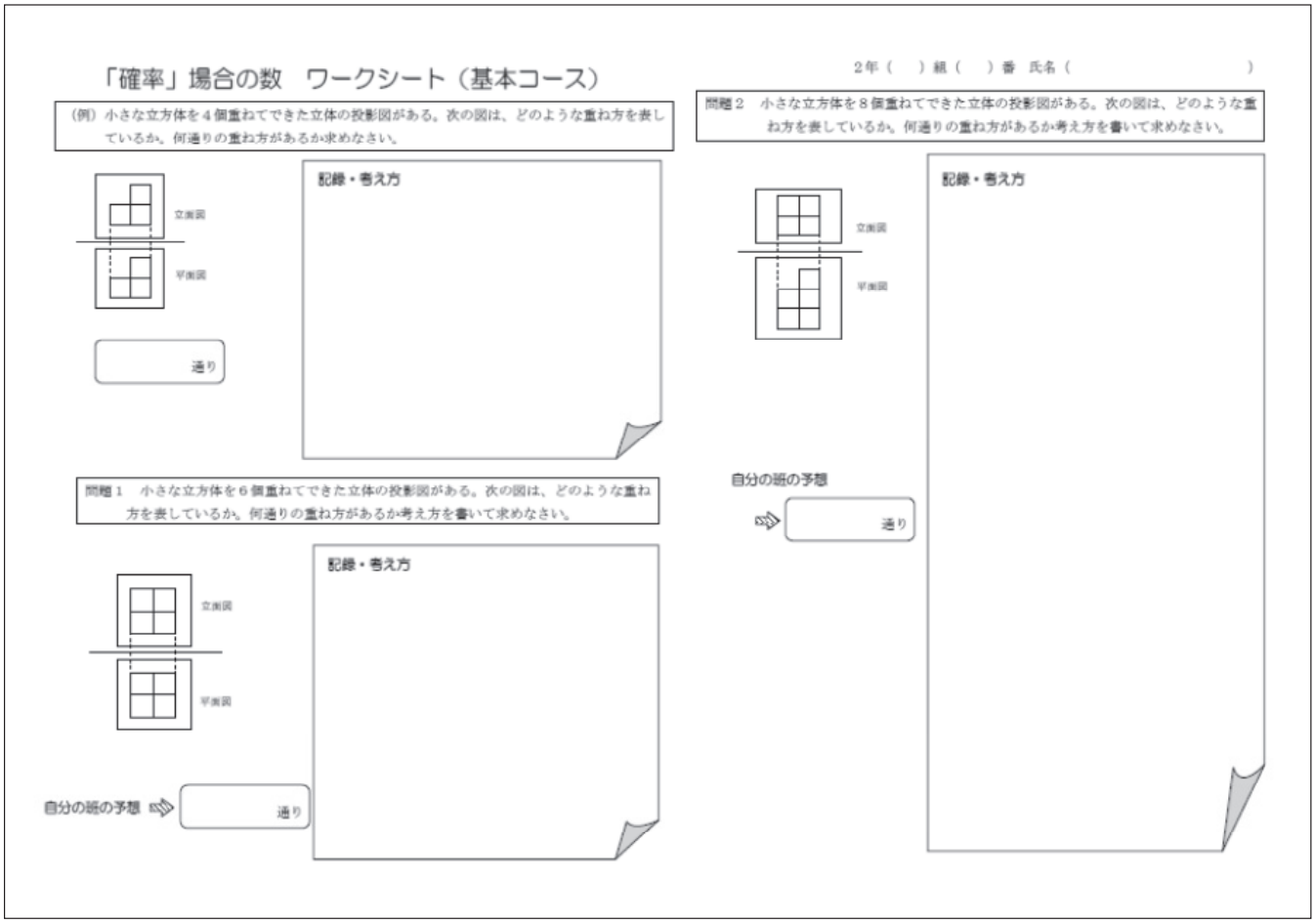
イ　条件を満たす立体について、正しく数えることができる。　（数学的な技能）

(2)本時の展開（基本コース）

	学習活動・学習内容	●指導上の留意点　◎評価
導入	・様々な立体の投影図をいくつか提示する。 Ｔ：これは、ある立体の投影図です。 どのような立体でしょうか。 Ｓ：(1) 円柱　(2) 直方体 Ｔ：(2) は直方体意外に考えられませんか。 ○条件を満たす図形を正しく数え上げることが本時の目標であることを理解する。(本時の目標の提示) 	●投影図を思い出させ、考えられる立体が１つでない例も挙げる。 
展開	（例）小さな立方体を４個重ねてできた立体の投影図がある。立面図と平面図からもとの立体はどのような形だったか考えなさい。	
	Ｔ：どのように置いたらよいか、立方体を使って考えてみましょう。 Ｔ：記録の取り方なども工夫してみましょう。 	●大きな模型や実物投影機を利用して、重ね方を全体で確認する。 ●答えが複数あることを注意しておく。
	【課題１】　小さな立方体を６個重ねてできた立体の投影図がある。この投影図から考えられる立体は、何通りの重ね方があるか考え方を書いて求めなさい。	
	○立方体を組み立てながら、個人で考えを進める。 ○他の班への説明などを個人で考えるとともに、班で検討する。 Ｔ：数え方や記録の方法を工夫して、漏れなく数えてみましょう。 Ｓ：見取図をかく、表を利用する。 	●個人で考え、班で発表し合い意見を共有する ◎数え上げの方法を考え、表現することができる。（技能、見方や考え方）
	○各班の考え方を聞き、様々な数え上げ方があることを知り、より良い方法を考え、次の課題につなげる。 Ｔ：様々な記録の方法がありましたね。他の班の方法を参考にして、次の課題に取り組んでみましょう。	●各班で考えた、解答例や数え上げ方の例を実物投影機等でいくつか挙げて、意見を共有する。

	【課題２】小さな立方体を８個重ねてできた立体の投影図がある。この投影図から考えられる立体は、何通りの重ね方があるか考え方を書いて求めなさい。	
	○前問の方法を参考にしながら、各班で考えてまとめる。  	●各班で出た解答例を実物投影機等で紹介し意見を全体で共有する。 ◎数え上げの方法を考え、表現することができる（技能、見方や考え方）
まとめ	○本時のまとめをする。 Ｔ：数え上げる方法を工夫して、より良い方法を見つけると、数え漏れがないようにできますね。	●既習事項の場合の数は、工夫の仕方により数え漏れを無くすことができることを理解させる。

【ワークシート】



「確率」場合の数　ワークシート（基本コース）

（例）小さな立方体を４個重ねてできた立体の投影図がある。次の図は、どのような重ね方を表しているか。何通りの重ね方があるか求めなさい。

立面図

平面図

通り

記録・考え方

問題１　小さな立方体を６個重ねてできた立体の投影図がある。次の図は、どのような重ね方を表しているか。何通りの重ね方があるか考え方を書いて求めなさい。

立面図

平面図

自分の班の予想

通り

記録・考え方

２年（　）組（　）番　氏名（　　）

問題２　小さな立方体を８個重ねてできた立体の投影図がある。次の図は、どのような重ね方を表しているか。何通りの重ね方があるか考え方を書いて求めなさい。

立面図

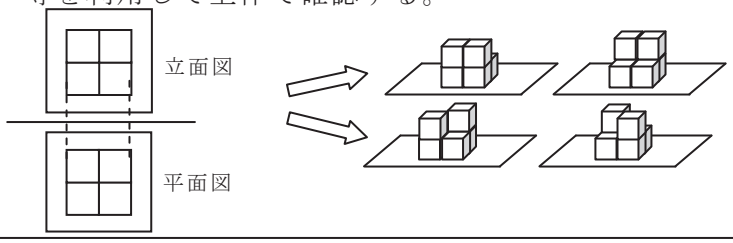
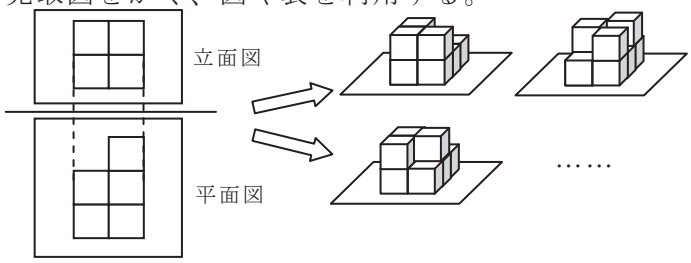
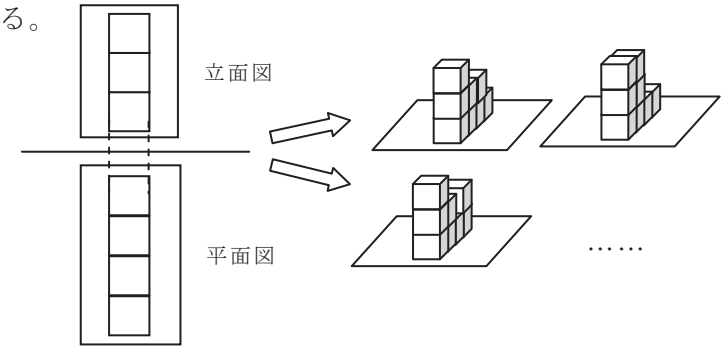
平面図

自分の班の予想

通り

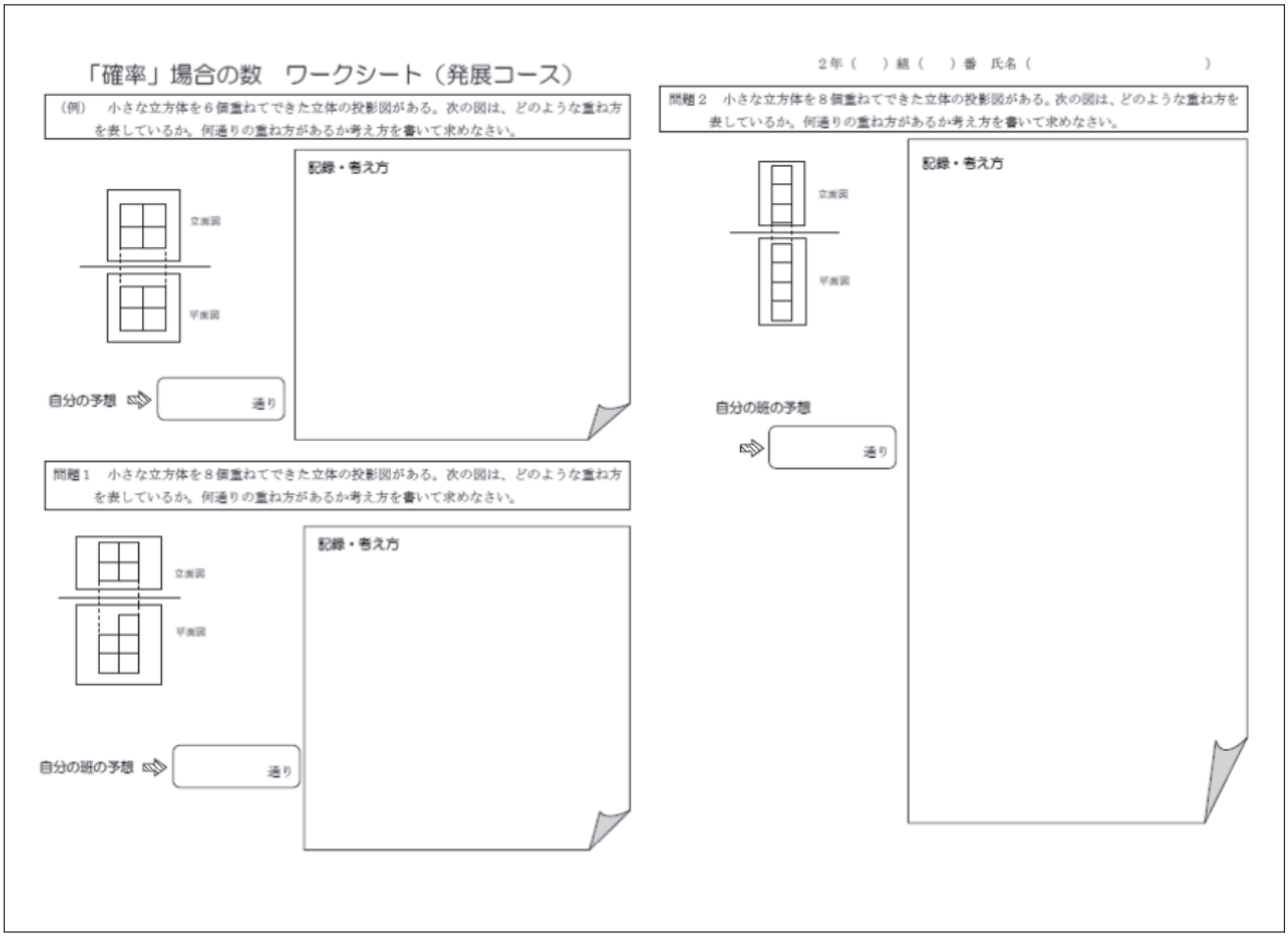
記録・考え方

(3)本時の展開（発展コース）※導入は、基本コースと同様である。

	学習活動・学習内容	●指導上の留意点　◎評価
展開	（例）小さな立方体を６個重ねてできた立体の投影図がある。この投影図から考えられる立体は、何通りの重ね方があるか書いて求めなさい。	
	○どのように置いたらよいか、考えさせ、実物投影機等を利用して全体で確認する。  	●大きな模型を利用したり、実物投影機を利用したりして、重ね方を全体で確認する。 ●答えが１つに限定されない場合があることを注意しておく。
	【課題１】小さな立方体を６個重ねてできた立体の投影図がある。この投影図から考えられる立体は、何通りの重ね方があるか書いて求めなさい。	
	○班ごとに、立方体を組み立てたりしながら考える。 ○どのように他に伝えたらよいか個人で考え、班でまとめる。 Ｔ：数え方や記録の方法を工夫して、漏れなく数えてみましょう。 Ｓ：見取図をかく、図や表を利用する。  ○各班の考え方を聞き、様々な数え上げ方があることを知り、より良い方法を考え、次の課題につなげる。 Ｔ：他の班の方法を参考にして、次の課題に取り組んでみましょう。	●個人で考え、班で発表し合い意見を共有する。 ◎数え上げの方法を考え、表現することができる。 （技能、見方や考え方） ●各班で考えた、解答例や数え上げ方の例を実物投影機等で示
	【課題２】小さな立方体を８個重ねてできた立体の投影図がある。この投影図から考えられる立体は、何通りの重ね方があるか書いて求めなさい。	
	○前問の方法を参考にしながら、各班で考えてまとめる。  	●各班で出た解答例を実物投影機等で紹介し意見を全体で共有する。 ◎数え上げの方法を考え、工夫して表現することができる。 （技能、見方や考え方）

まとめ	○本時のまとめをする。 Ｔ：数え上げる方法を工夫して、より良い方法を見つけると数え漏れがないようにできますね。	●既習事項の場合の数は、工夫の仕方により数え漏れを無くすことができることを考えさせる。

【ワークシート】



「確率」場合の数　ワークシート（発展コース）

（例）　小さな立方体を６個重ねてできた立体の投影図がある。次の図は、どのような重ね方を表しているか。何通りの重ね方があるか考え方を書いて求めなさい。

立面図

平面図

記録・考え方

自分の予想　通り

問題１　小さな立方体を８個重ねてできた立体の投影図がある。次の図は、どのような重ね方を表しているか。何通りの重ね方があるか考え方を書いて求めなさい。

立面図

平面図

記録・考え方

自分の班の予想　通り

２年（　）組（　）番　氏名（　　）

問題２　小さな立方体を８個重ねてできた立体の投影図がある。次の図は、どのような重ね方を表しているか。何通りの重ね方があるか考え方を書いて求めなさい。

立面図

平面図

記録・考え方

自分の班の予想

通り

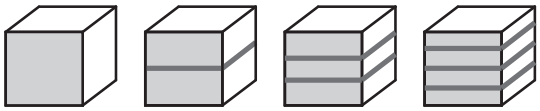
３　第２学年　一次関数　「立方体に輪ゴムをかけると何がどのように変化するだろうか。」

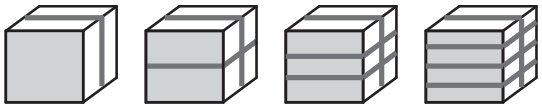
(1)本時の目標

ア　伴って変わる二つの数量を見いだし、その関係を文字を用いて式に表すことができる。

（数学的な技能）

(2)本時の展開

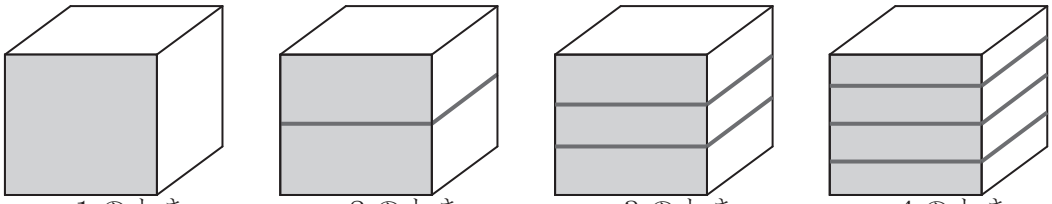
	学習活動・学習内容	●指導上の留意点　◎評価
導入	Ｔ：課題の説明をする。 ・立方体に輪ゴムをかける様子を電子黒板に写す。 ・立方体の正面の面に注目させて、輪ゴムをかける様子を確認する。 「正面の面の数は、輪ゴムをかけることで、１つ、２つ、３つのように分割され変化していきます。」 Ｔ：「正面の面の数とともに、他の面の数はどのように変化していますか？」 Ｓ：「右の面の数は、同じように変化している。」 Ｔ：他の面についても考えることを伝え、課題に移る。	●電子黒板を利用し、課題を提示する。 ●大きい立方体の模型で示す。 ●輪ゴムを辺とみなすことを伝える。
	【課題１】 輪ゴムを、図のように横にかけていきます。 輪ゴムによって正面の面が分割されたとみて、正面の面の数が x 面あるときを考えます。このとき、次の（１）～（４）のそれぞれについて、y を x の式で表しなさい。 （１）上の面の数を y 面とする。 （２）右側の面の数を y 面とする。 （３）立方体の表面にできた、すべての面の数の合計を y 面とする。 （４）右側の面の１つの面の面積を y ｃｍ^2 とする。 	
展開	Ｔ：課題１は一問ずつ生徒に確認しながら進めていく。 （１）の上の面はどのように変化していますか。 Ｓ：変化していない。すべて１になります。 Ｔ：式で表すと、どのような式になりますか。 Ｓ：$y=1$ です。 Ｔ（２）の右の面はどのように変化していますか。 Ｓ：正面の面の数と同じように変化しています。 Ｔ：式で表すと、どのような式になりますか。 Ｓ：$y=x$ です。 Ｔ：この式は何を表していますか。 Ｓ：比例です。	●電子黒板を利用し、課題を提示する。 ●立方体の模型を提示する。 ●輪ゴムを辺とみなすことを伝える。 ●面の数を具体的に尋ねる。 ●表を使って考えさせる。 ●教科書で学習したことを確認する。 ●比例の表や式を確認する。

展開	T：（３）立方体の表面にできた、すべての面の数の合計はどのように変化していきますか。 T：式で表すと、どのような式になりますか。 S：$y=4x+2$ になります。 T：この式は何を表していますか。 S：１次関数です。 T：（４）右側の面の１つの面の面積を y ｃｍ^2 とする。 T：式で表すと、どのような式になりますか。 S：$y=\dfrac{100}{x}$ です。 T：この式は何を表していますか。 S：反比例です。	●数えることが苦手な生徒には輪ゴムを巻いた模型を渡して支援する。 ●１辺が１０ｃｍであることを確認する。 ●式化について生徒に説明させる。 ●反比例の式等を確認する。
展開２	【課題２】 輪ゴムを、図のようにあらかじめ縦に１本かけた後、横にかけていきます。 輪ゴムによって正面の面が分割されたとみて、正面の面の数が x 面あるときを考えます。このとき、次の（１）～（４）のそれぞれについて、y を x の式で表しなさい。  （１）上の面の数を y 面とする。 （２）右側の面の数を y 面とする。 （３）立方体の表面にできた、すべての面の数の合計を y 面とする。 （４）右側の面の１つの面の面積を y ｃｍ^2 とする。	
	T：課題１との違いは何でしょうか。 S：あらかじめ縦に１本輪ゴムがかかっている。 （１）～（４）の問題に表が書かれていない。 T：課題１と同じように問題に取り組んでいきます。今回は、グループで協力しながら問題を解いていきましょう。 【課題２】 （１）$y=2$　　（２）$y=2x$ （３）$y=6x+4$　　（４）$y=\dfrac{50}{x}$ $\boxed{3}$　$y=x^2$	●課題２では生徒が自身で表を作成できるように必要に応じて支援する。 ●できたグループには黒板に表、式を書くように伝える。 ●課題２が終わったら課題３に取り組むように指示する。 ◎２つの数量関係から既習事項をもとに式に表すことができる。（技能）
まとめ	T：２つの数量関係から、規則性を見いだし、その関係を文字を用いて式に表すことができることの面白さを伝える。	●学習状況により、発展として課題３について、上の面の数、全ての面の数の合計について取り組む。

関数に関係のあるものを見つけよう

１辺が１０ｃｍの立方体があります。この立方体に輪ゴムをかけていきます。

1　輪ゴムを、図のように横にかけていきます。
輪ゴムによって正面の面が分割されたとみて、正面の面の数が x 面あるときを考えます。
このとき、次の（１）～（４）のそれぞれについて、y を x の式で表しなさい。



$x=1$ のとき　$x=2$ のとき　$x=3$ のとき　$x=4$ のとき

（１）上の面の数を y とする。

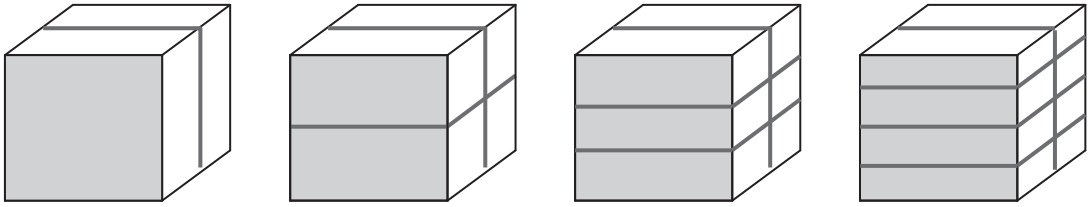
式：＿＿＿＿＿＿＿＿

x	1	2	3	4	5	6	…
y							…

（２）右側の面の数を y とする。
（３）立方体の表面のすべての面の数の合計を y とする。
（４）右側の面の１つの面の面積を y ｃｍ^2 とする。

（２）～（４）についても同様に表を示し、式を求めさせる。

2　輪ゴムを、図のようにあらかじめ縦に１本かけた後、横にかけていきます。
輪ゴムによって正面の面が分割されたとみて、正面の面の数が x 面あるときを考えます。
このとき、次の（１）～（４）のそれぞれについて、y を x の式で表しなさい。

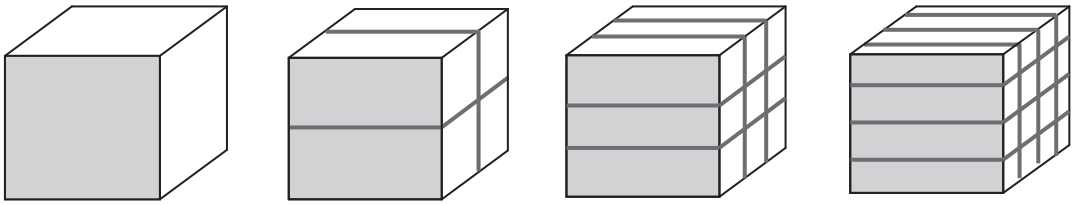


$x=1$ のとき　$x=2$ のとき　$x=3$ のとき　$x=4$ のとき

（１）上の面の数を y 面とする。
（２）右側の面の数を y 面とする。
（３）立方体の表面にできた、すべての面の数の合計を y 面とする。
（４）右側の面の１つの面の面積を y ｃｍ^2 とする。

2 については、必要に応じ、表を生徒自身が作成するようにする。

3　輪ゴムを、図のように縦と横に同じ本数ずつかけていきます。
輪ゴムによって正面の面が分割されたとみて、正面の面の数が x 面あるときを考えます。
右側の面の数を y 面とするとき、y を x の式で表しなさい。



$x=1$ のとき　$x=2$ のとき　$x=3$ のとき　$x=4$ のとき

４　第３学年　相似な図形の面積と体積

「折り紙が大きくなると、折ってできる相似な直方体の体積は何倍になるだろうか。」

(1) 本時の目標

ア　相似比と面積比や体積比の関係を利用して、相似な立体の表面積、体積を求めることができる。（数学的な技能）

イ　相似比と面積比、体積比の関係を公式などから説明することができる。（数学的な見方や考え方）

(2)本時の展開

前時までに１辺が 10 ㎝の正方形を用いた箱作りを授業時間内で実施する。

使用目的を伏せたまま、箱の用途などを話題にして容量（体積）へ着目を導きつつ、回収しておく。

ア　　基礎・標準コース

	学習内容・学習活動	●指導上の留意点　◎評価
導入	○前時までに作成した箱を返却し、操作に活用する。 ○ア：１辺１０㎝の正方形 　イ：１辺２０㎝の正方形　　を提示。 ○黒板に並べて掲示して次の発問をする。 Ｔ：発問① 『イの折り紙は、アの折り紙の大きさの何倍ですか？』 ○何をもって何倍とするかについて考えさせる。 　（例）辺、面積	●既習事項を想起させ、本時へのつながりを意識させる。 ●箱の容量に注目させる。 ●折る前の折り紙を観察する。 ●相似比と面積比が混乱しないように整理する。 ●生徒の反応に応じ、面積が２乗倍であることもまとめる。
展開1	○　ア：小さな箱（１辺１０センチの正方形） Ｔ：発問② 　イの折り紙で箱を作ったら、 　その箱の大きさは 　アの箱の大きさの　何倍か？ Ｔ：どのような大きさを比較するか？ Ｓ：辺の長さ？　体積？　容積？ 　⇒箱の大きさは　「体積の比」 　⇒予想　体積は　２倍　４倍 ○《課題提示》 折り紙の１辺の長さを２倍にすると、箱の体積は何倍になるか？	●大小２つの箱が相似であることを、提示する。 ●容積＝体積として扱うことを確認してから展開を進める。 ●直感的に「２倍」「4倍」となる予想を取上げる。 ●既習の平面図形の相似の考えを立体に持ち込めないか、意識させて工夫を考えさせる。

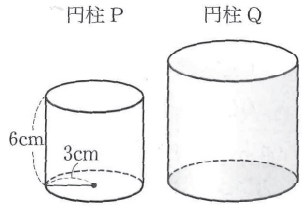
	Ｓ：≪考察１≫ 図形を手元に置かず、大きな箱を想像しながら考える。 直感を裏付ける考え方を探す。 ・計算式を作る。 ・見取り図を描いて考える。 ・投影図を書いて考える。 ○イ：大きな箱（１辺２０センチの正方形）を提示する。 Ｓ：≪考察２≫ 教員の提示しているイの箱を自席から眺めて考える。	●最初は計算式でもよいが、途中の考え方についても記述を残すよう指示する。
展開２	○イ：大きな箱　を２人に１つ配布する。 Ｓ：≪考察３≫ 手元の箱を操作し、相談して考察を深めさせる。 直感と実際の差異を埋めるよう「説明」の方法を考察する。 ③（中心的活動） Ｓ：面積比の既習事項の応用を模索する。 （式） ・折り紙を開いて底面の展開図で アとイの１辺の長さから必要な長さを考えて計算する。 ・計算式の作成まで至らないまでも、底面積や高さの関係から式で表現して比較しようとする。 ・計算式を作成する。	●操作によって「８倍」を得てから、その論理的な説明をいかに進めるか徐々に論点を拡張する。 ●平面図形の面積比において、式による表現を学習したことを確認する。 ●実際の値で計算する場合はは、平方根や三平方の定理を利用する必要があるため、補助をする。 ◎ノートの記述内容から考え方について把握する。 （見方や考え方）
展開３	④ 代表的な考え方を説明させる。 Ｓ：ア：小さい箱の体積 底面積[正方形]×高さ ＝１辺^2×高さ Ｓ：イ：大きい箱の体積 底面積[正方形]×高さ ＝（２×１辺）^{2}×（２×高さ） ＝２^2×１辺^2　×２×高さ ＝２^3×１辺^2×高さ ＝２^3×ア 底面積が２^{2}倍×高さが２倍 だから　体積は２^{3}倍（８倍）	●「重ねて比較する」「式に表現して比較する」などの２つ考えを言葉を用いた式表現を利用し関連付ける。 ●「相似な図形の面積比」との関連を意識付けながら進める。 ◎発言内容から考え方を把握する。　（見方や考え方）

	⑤ 相似な空間図形の体積比を考える。 ○ウ：もっと大きな箱 　　１辺３０センチの正方形で作成した箱を提示する。 ○《課題提示》 折り紙の１辺の長さを３倍にすると、箱の大きさは何倍になるか。 （反応例）　体積は９倍、１２倍、２７倍	●発展的な展開を生徒が意識できるように、学習内容の関連性に重点をおく。 ●これまでの学習内容を活用して思考を整理し、論理的な展開のよさを感じられるように指導する。
	Ｓ：≪考察４≫ ・底面積が3^2倍　×　高さが３倍だから 　体積は3^3倍（２７倍） ○《まとめ》 ・相似比を２倍、３倍にすると、体積の比は2^3倍、3^3倍になる 　相似比が　１：ｎ　ならば 　体積比は　１：n^3 ・イとウを比較して、 　相似比が　２：３　ならば　体積比は　2^3：3^3 　相似比が　ａ：ｂ　ならば 　体積比は　a^3：b^3	◎ノートの記述内容から定着状況を把握する。　（技能）
まとめ	○⑥ 学習内容のまとめ Ｔ:《定着課題》相似な円柱Ｐと円柱Ｑの、相似比は３：４です。体積の比はいくつになりますか？	●底面積Ｓ、高さｈ、体積Ｖなどの文字を用いた表現は次時に扱う。

イ　　標準・発展コース

	学習内容・学習活動	●指導上の留意点　◎評価
導入	○ア、イの箱を提示し、二つの箱を折り紙で作る。 各自１つずつ、ア、イの正方形で箱を折る。 　ア：小さな箱　１辺１０㎝の正方形 　イ：大きな箱　１辺２０㎝の正方形 Ｓ：操作（箱を重ねたり並べたりする）によって、２つの立体の比較を行う。 Ｓ：立体の相似の特徴を探る。 　⇒対応する角の大きさが等しい 　　対応する辺の長さの比が等しい 　　対応する面が相似	●相似な平面図形の面積比を学習せずに空間図形の体積比を提示する。 ●体積比を論理的に考察する過程で面積比を考察する。 ●相似な立体の特徴についてまとめる。

展開1	Ｔ：イの箱の大きさはアの箱の大きさの何倍ですか？ ・どのような大きさを比較するのか？ （例）辺の長さ、体積、容積 ⇒箱の大きさは　「体積の比」 ⇒予想　体積は　２倍　４倍　８倍 ・比較にあたり、論点を整理する	●体積が８倍になる理由について考察するように導く。 ●生徒から問題点をあげさせ、考察の視点について整理する。
	Ｔ：イの折り紙の大きさはアの折り紙の大きさの何倍ですか？ Ｔ：どのような大きさを比較するのか？ （例）辺の長さ、面積 【課題】 折り紙の１辺の長さを２倍にすると、箱の体積は何倍になりますか？ イ：大きな箱　を２人に１つ配布する。 ○箱を操作し、グループで相談して考察を深めさせる。 Ｓ：予想を検証する方法について考察する。 Ｓ：③（中心的活動） （操作）・横に並べ比較する。 ・対応する面を比較する。 ・折り紙を開いて底面の展開図でアとイの１辺の長さや面積を比較する。 ・アとイの箱を重ねて、操作によって体積を比較する。 （式）　・基準となる長さを定め文字でおく。 ・比を用いて、式に表わす。	●容積＝体積として扱うことを確認し展開を進める。 ●操作によって「８倍」を得てから、論理的な説明へと論点を発展させる。 ●操作によって、「８倍」を得た生徒には、机間指導により、式による表現を促す。 ●実際の値で計算をしようとする生徒には、平方根や三平方の定理を利用する必要があるため、補助をする。 ◎ノートの記述内容からどのように考えているかを把握する。（見方や考え方）

展開2	Ｓ：④代表的な考え方を説明させる体積の比較に必要な量を考える。 Ｓ：⑤相似な空間図形の底面の面積比を考える。 Ｓ：底面積の比から、相似な平面図形の面積比の考えを深める。 《まとめ》 相似な平面の面積の比は相似比の２乗倍になる。 ア：小さい箱の体積　V_1＝底面積Ｓ×高さｈ＝Ｓｈ イ：大きい箱の体積　$V_2 = 2^2 S \times 2h = 2^3 Sh = 2^3 V_1$	●相似な空間図形は、対応する各面が相似であることを利用する。 ●体積比を考察する過程として、三角形の面積比から四角形の面積比を考え、まとめる。 ◎発言内容からどのように考えたかを把握する。 （見方や考え方） ●１辺や高さを数値で求めてもよいが、文字式に置き換えられるよう導く。
	Ｓ：⑥ 相似な空間図形の体積比を考える。 ○代表的な考え方を発言させる ○《まとめ》 折り紙の１辺の長さを２倍にすると、箱の体積は2^3＝８倍になる。 ⇒　体積の比は相似比の３乗倍になる。	●上記文字式を用いた説明を主とする。 ●操作の説明も取り上げ、文字式の表現との関連を確認しながら進める。
展開3	○⑦演習問題に取り組む ウ：もっと大きな箱（１辺30cmの正方形で作成した箱）を提示 Ｓ：文字式を用いて表現する $3^2 S \times 3h = 3^3 Sh = 3^3 V$ Ｓ：底面積が3^2倍　×　高さが３倍 だから　体積は3^3倍(27倍)	●検証の課題として活用する。
	《課題》　右図の相似な円柱Ｐと円柱Ｑの、相似比は３：４です。体積の比はいくつになりますか？	
まとめ	学習内容のまとめ 発展課題の提示	◎ノートの記述内容から定着状況を把握する。（技能）

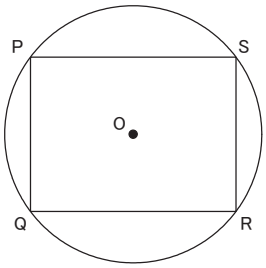
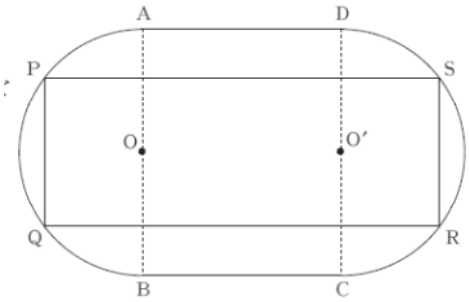
5　第３学年　三平方の定理　「400ｍトラックの中に、公式のサッカー場は作れるだろうか。」

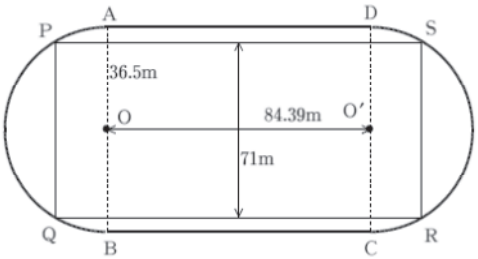
(1)本時の目標

ア　具体的な場面で、直角三角形を見いだし、三平方の定理を利用して考察することできる。

(数学的な見方や考え方)

(2)本時の展開

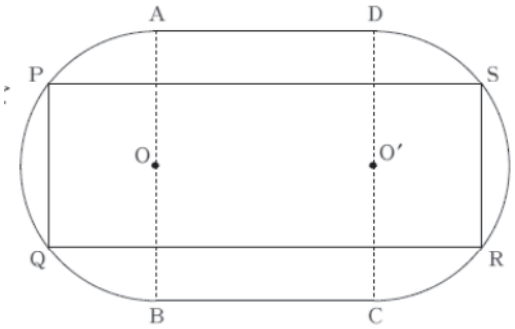
	学習内容・学習活動	●指導上の留意点　◎評価
導入	【課題１】 直径 10cm（半径 5cm）の円 O をかき、この円に、長さが 6cm の弦 PQ をかきます。弦 PQ を一辺として、円 O に接するように長方形 PQRS をつくります。 長方形 PQRS の面積は、何 cm^2 になりますか。  Ｔ：実際に図をかいて考えてみましょう。 Ｓ：実寸でかいて、QR を測ろうとする。 Ｓ：対角線 PR を引き、直角三角形 PQR で三平方の定理を利用する。 Ｓ：中心と弦の距離の関係を考え、PQ の中点 M をとり、直角三角形 POM で三平方の定理を利用する。 ⇒QR＝8cm だから、長方形 PQRS の面積は、 6×8=48 ㎠と分かる。	●△POM を考えた場合、厳密には、∠POM＝90°を示す必要があるが、深入りしない。
展開１	この問題を少し変化させて、考えさせる 【課題２】 直径 10cm(半径 5cm)の２つの半円 O、O´をかき、それぞれの直径を AB、CD とします。 A と D、B と C とを線分で結び、その間に長方形 ABCD をつくります。半円 O に、直径 AB と平行になるように、長さが 6cm の弦 PQ をかきます。 弦 PQ を一辺として、この図形の内側で接するように長方形 PQRS をつくります。 O から O´までの距離が 12 cmのとき、長方形　QRS の面積は何　になりますか。  Ｔ：【課題１】と何が変わりましたか。 Ｓ：円が半円になりました。 Ｓ：円の中に長方形 ABCD が入りました。 Ｓ：間が広がった分だけ、PS と QR が伸びました。	●問題の条件を変える。 ●問題の条件を変えたことにより、何が変わり、何が変わらないか着目させる。 ◎図形の特徴を捉え、面積を求める方法を考えることができたか。(見方・考え方)

展開1	T：変わっていないものは何ですか。 S：長方形 PQRS の面積を求めることです。 S：(半) 円の半径や弦 PQ の長さです。 S：半円内部の長方形は、さっきの円の内部の長方形と面積は変わっていません。 T：長方形 PQRS の面積は、どのようにして求められますか。 S:【課題１】の図から PS だけが 12cm 伸びただけだから、6×(8+12)＝120 ㎠で求められます。	●単に長辺の長さを求めて面積を計算するだけでなく、問題の本質に気付かせる。
展開2	T：ところで、皆さんの周りで、このような図形を見たことはありませんか。 S：陸上のトラック T：国立競技場に触れ、陸上の 400m トラックの国際規格について紹介する。 ○【課題２】の図を 400m トラックの規格に合わせて条件を変え、トラックの内部にある芝生(長方形 PQRS)を考えてみましょう。 S：OA＝36.5m、AB＝2×36.5＝73m です。 S：OO´（＝AD）＝84.39m です。 S：PQ の長さは、これでは分かりません。 ○短辺が 71m であることを伝える。	●内接する長方形が競技場の芝生が敷かれている場所であることを確認する。 ●国立競技場等のホームページを提示し、数値を確認させる。 ●国立競技場のホームページから、データの一部を提示し、数値を確認させる。
	【課題３】 国際陸上競技連盟で定められた 400m トラックの規格と、国立競技場のホームページで確認した芝生の短辺の長さをもとにして、芝生の長辺の長さと面積を求めなさい。  	
	＜予想してみましょう＞ ○過去に国立競技場で行われたサッカーの試合の写真を見せ、サッカーの国際大会でのピッチの公式規格（68m×105m）について紹介する。 S：長辺は 105m よりも長いはずだ。 S：ゴールラインの後ろに 1～2m ゆとりがあるように見えるから長辺は 108m ぐらいではないか。 T：三平方の定理を利用して長辺を求めましょう。 S：$73^2-71^2=5329-5041=288$ S：$73^2-71^2=(73+71)(73-71)=144\times2=288$	●机間指導を行い、一人一人に応じた支援をする。 ◎解決に必要な直角三角形を見いだし、三平方の定理を適用して考えられたか。 （数学的な見方や考え方） ※問題１の図の△PQR で考え QR を求める。

展開2	S：$x=\sqrt{288}=16.9705\cdots$　（電卓利用） S：$12\sqrt{2}\div 2=6\sqrt{2}=8.4852\cdots$　（電卓利用） S：$8.4852\cdots\times 2+84.39=101.36$ S：$16.9705\cdots+84.39=101.36$ T：国立競技場でサッカーの試合をすることもあるが、105m必要なのに、101.36mではできないのではありませんか。これはどうしてですか。 S：計算すると105mより短くなるので、途中で計算を間違えたかもしれません。 S：最初の仮定が違っていませんか。 S：本当にサッカーのピッチは105mですか。 S：国立競技場では、サッカーのピッチが規格どおりに作られていないのではありませんか。	●求めた結果が、どのようなことを示しているかを問いかけ、計算結果と、実際の長さとの違いに疑問をもたせるような発問をする。
まとめ	三平方の定理を利用することで、国立競技場の芝生の大きさを求めることができた。 計算結果から、仮定を見直して、数学的に解決できた。	●仮定に疑問をもつ反応を機に、芝生の角が丸くなっている写真を示し、国立競技場の工夫を取り上げる。

(3)習熟度別少人数指導における基本コースの展開例

導入及び展開１は前述の指導案と同様に行い、展開２以降を次のようにする。

展開2	【課題３】 直径10cm（半径5cm）で２つの半円O, O′をかき、それぞれの直径をAB, CDとします。 AとD、BとCを線分で結び、長方形ABCDを作ります。 半円Oに、直径ABと平行になるように、長さが8cmの弦PQをかきます。 弦PQを一辺として、この図形の内側に接する長方形PQRSをつくります。 OからO′までの距離が12cmのとき、長方形PQRSの面積は何cm²になりますか。  	
	T：【課題１】と何が変わりましたか。 S：長方形PQRSが変わった。 S：弦PQの長さが変わった。 T：長方形PQRSの面積はどのようにして求められますか。	●生徒の状況に応じて、個人解決やグループでの話し合いなどについて助言する。

展開2	S：長方形 PQRS の形が変わったから、QR の長さを求める必要があるね。 S：一度円の状態に戻して、最初の問題でやったように考えればよいのではないかな。 ○生徒の考えを全体で共有した後、個人で問題解決を図らせる。 S：PQ＝8cm, QR＝6＋12＝18(cm)だから、 長方形 PQRS の面積は、8×18＝144(cm²)だ。	●導入の【課題１】から順に考えてきた過程を振り返るように助言する。 ●机間指導を行い、つまずいている生徒へ助言する。 ◎解決に必要な直角三角形を見出し、三平方の定理を適用して考えられたか。 （見方や考え方）
まとめ	T：ところで、2 つの半円と 2 つの線分でつくられたこの形は、何かに似ていると思いませんか。 S：陸上のトラック！ ○国立競技場について触れ、陸上の400mトラックの国際規格について紹介する。 国際規格に従って計算すると、国立競技場の HP 上で示されている大きさの芝生はトラック内に収まらないことを、教師が計算して示す。 ○生徒に話の結末を予想させ、結果に疑問を感じさせた後で、芝生の写真を見せる。 S：芝生の角が取れている。 S：そもそも長方形ではなかったのか。	●計算は全体指導の中で行い、結果に疑問をもたせるようにする。 ◎三平方の定理を用いて具体的な事象を捉えることに関心を持つことができたか。 （関心・意欲・態度）

Ⅳ　研究のまとめ

本研究では、数学的な見方や考え方を育むために、数学の知識や方法等を活用して問題解決を図る学習について指向してきた。

そのためには、生徒が見通しをもち、解決の計画を立て実行し、自らの解法を他者と比較検討する中でより良いものにしていく経験を積み重ねていくことが重要である。とりわけ日常生活の事象を扱う場合には、どのようにして数学の舞台に載せるかということがこれまでの学習に比べ、生徒にとって困難を伴うことが予想される。

そこで、指導に当たっては、①解決の見通しや計画の立案、②解決に必要な情報の選択、③既習の知識等との差異、④既習の知識等を適用できない場合の対処、⑤解の吟味　などについて生徒の実態に応じて留意する必要がある。

１　各教材について

(1) 第１学年　比例・反比例　「ウォーターサーバーはいつ交換されたかを予想しよう。」

ウォーターサーバーは、水を出し続けた時間に比例して水が減るものである。本教材では、

訪れた歯科医院でのウォーターサーバーの様子を捉えて、日ごとに減っている水の様子を記録するという設定をした。原点をどこにとって考えるか、グラフに表した点を結んだ時に直線にならないことから、どのように見たら比例とみなせるかについて話し合いができるように設定した。

(2) 第２学年　確率　「立方体を重ねてできる立体は何通りできるだろうか。」

本教材では、展開の中で生徒同士が意見交換をし、それぞれの考えを共有する場面がある。その中で数え上げるための方法についての協議では、樹形図などの考えにつながるような、立方体の位置に記号を付けて表にまとめるなどのアイディアが見受けられた。また、他の生徒との協議の中で他の生徒のアイディアを取り入れて工夫するなどして考えを深めている様子が見られた。

(3) 第２学年　一次関数　「立方体に輪ゴムをかけると、何がどのように変化するだろうか。」

本教材は、伴って変わる二つの数量を見いだし、変化の関係を読み取ることなどについては、小学校でも学習している。本授業では、独立変数と従属変数の関係をさまざまに設定でき、一次関数の範囲を超えないように問題を設定し、生徒が「自らが見出した変数について、その関係を求める、説明する」ということに重点を置いている。

１時間の授業としては、内容が豊富な面があり、授業を行うに当たっては、各学校の状況に応じて焦点化し実践することが必要と考えられるが、生徒が他の変数に着目して考えやすく、学習の広がりが期待できるものである。

(4) 第３学年　相似な図形の面積と体積

「折り紙が大きくなると、折ってできる相似な直方体の体積は何倍になるだろうか。」

空間把握については多くの指摘があり、相似な立体については、相似比と面積比、体積比の関係の理解にとどまっている。本教材は、折り紙を折ってできる直方体について、重ねてみながら相似比と体積比について実感を伴って理解できるとともに、その理解を背景に、何故そうなるかについて、数学的に考察することに学習が集中できる教材となっている。

(5)　第３学年　三平方の定理　「400ｍトラックの中に、公式のサッカー場は作れるだろうか。」

国立競技場で行われている競技を見ると、陸上のトラックとサッカーのピッチとが共存している状況にあって、サッカーの試合では、コーナーキックを行う付近がトラックのコーナーにかかっており、芝の部分が追加されていることが分かった。陸上トラックとサッカーのピッチの関係を数学的に解明する学習を取り入れた。円から陸上トラック型に伸ばしていく中で、内接する長方形も形が変わるが、生徒にとって取り組みやすく活用が実感できるものと考える。

２　指導について

上記１に示した、各教材における指導の視点などを参考にして、各学校の実態を背景に、生徒一人一人に応じた学習を展開し、数学的な見方や考え方の育成を図っていただきたい。また、思考・判断・表現という一連の学習活動において、根拠をもって説明できる力、他者の意見を聞き、検討し判断する力などを育てる一助となっていただければと考える。

平成 26 年度　研究開発委員会　委員名簿

＜中学校数学研究開発委員会＞

	学　校　名	職名	氏　名
委員長	練馬区立上石神井中学校	校　　長	田代　　雅規
委員	中野区立第五中学校	主幹教諭	下斗米　八穂
委員	荒川区立第一中学校	主任教諭	内山　　治之
委員	荒川区立尾久八幡中学校	主任教諭	蓮沼　　喜春
委員	葛飾区立新小岩中学校	主幹教諭	角南　　忠義

〔担当〕東京都教育庁指導部指導企画課　統括指導主事　山本　周一

〈中学校理科研究開発委員会〉

研究主題

「外部人材や教材を効果的に活用することで、科学に関する基礎的素養の大切さを実感し、実生活における有用感と関心・意欲の向上を図る指導法の開発」

研究の概要

平成20年１月の中央教育審議会の答申において、「科学への関心を高める観点から、実社会・実生活との関連を重視する内容を充実する方向で改善を図る。」ことが示された。平成20年に改訂された学習指導要領においては、博物館や科学学習センターなどとの連携・協力、科学技術の日常生活への有用性、理科の学習内容と職業との関係などが示された。

具体的には、博物館、科学教育センター、企業などと積極的に連携、協力を図り、専門家や指導者を学校に招くこと、標本や資料を借り受けたり、生徒を引率して見学や体験をさせたりすることなどが考えられる。しかし、実際にはこのような授業はあまり広まっているとはいえない。そこで、企業や研究機関等からの外部人材（以後「ゲストティーチャー」という。）や教材を利用した指導法を開発し、検証授業を行った。その結果、多くの生徒が「科学への関心が高まり、学習した内容が社会や自己の将来に役立つことを実感できた。」と回答した。

本研究により開発した指導法は、ゲストティーチャーや教材を効果的に活用することができ、科学に関する興味・関心を高め、学習した内容が実社会や自己の将来に活用できることを実感するために有効であることが分かった。

Ⅰ　研究の目的

知識基盤社会の時代といわれる現在、生徒には生涯にわたり科学リテラシーを向上させていくことが求められている。しかし、国際的なＰＩＳＡ調査及びＴＩＭＳＳ調査の学力調査の結果において、生徒たちは、理科の学力を高めるための重要な要素である科学を学ぶ意義や有用性を実感できておらず、科学への興味・関心が低いことが明らかとなった。

平成20年１月の中央教育審議会の答申には、改善の基本方針の中で「理科を学ぶことの意義や有用性を実感させ、科学への関心を高める観点から、実社会・実生活との関連を重視する内容を充実する方向で改善を図る。」と示されており、学習指導要領には、新たに、「博物館や科学学習センターなどと積極的に連携、協力をはかるよう配慮すること。」及び「科学技術が日常生活や社会を豊かにしていることや安全性の向上に役立っていることに触れること。また、理科で学習することが様々な職業などと関係していることにも触れること。」が明記された。

平成 24 年度に実施された全国学力・学習状況調査においても、生徒の科学への興味・関心が低いことが現れており、理科の勉強は好きと回答している生徒の割合（約 62 %）は、国語（約 58 %）・数学（約 53 %）と比べるとやや高くなっているが、理科の勉強は大切だと思う生徒の割合（約 69 %）は、国語（約 90 %）・数学（約 82 %）と比べ低くなってい

る。また、理科の授業で学習したことは、将来、役に立つと思う生徒の割合（約 53 %）は、国語（約 83 %）・数学（約 71 %）と比べ低くなっている。さらに、将来、理科や科学技術に関連する職業に就きたいと思う生徒の割合は約 24 %となっている。

博物館、科学学習センター、企業等と協力し、研究者や専門家の方から直接話を聞いたり、普段学校では用意できない標本や機材を使い体験的に学習したりすることで、理科が実生活と結び付いていることに気付き有用性を実感するとともに、興味・関心を高め、学習意欲を引き出すことができる。

一方、現在、社会貢献の観点から、学校教育に貢献しようとしている企業や研究施設も少なくない。しかし、理科の授業内で外部の人材・資源を利用した授業が多くの学校で行われているとは言いがたい。さらに、企業や研究施設などで開発された出前授業などのプログラムは、小学生や高校生を対象としたものが多く、中学生を対象としたプログラムが乏しい。加えて、指導計画の中に取り込みやすく１単位時間で行えるものが少ないという意見もある。

そこで、本研究では、外部の機関・企業と協力し、中学校の学習内容に即した効果的な学習ができるよう、１単位時間の指導法を開発した。

Ⅱ　研究の方法

１　通常の理科室の設備では、観察・実験の難しい事物・現象を扱う単元を洗い出し、生徒の科学への興味・関心を高めるゲストティーチャーや教材の活用について検討する。

２　ゲストティーチャーや教材の活用をどのように行えるかを課題とし、出前授業などのプログラムを改善したり、外部団体と新たなプログラムを開発したりして、効果的、かつ他の学校でも利用できる授業例及びゲストティーチャーの活用法の開発について研究を行い、検証授業を行う。

３　授業後の生徒アンケート調査を行い、検証を行う。

Ⅲ　研究の内容

１　ゲストティーチャーや教材の活用が有効な単元

観察・実験を行うことが難しい事物・現象を扱う学習等において、ゲストティーチャーや教材の活用が有効なものとして次のことが考えられる。

・教師の説明や教材を補充して生徒がイメージしやすくするための貴重な試料・標本
・企業等が扱っている最先端技術を使用した機材などを活用した実験など、学校でできない観察・実験
・多様性、共通性を見出すために多数のサンプルを提示する必要がある教材

※有効と考えられる単元

学　年	単　　元
１学年	身近な物理現象（音、圧力）、大地の成り立ちと変化（地震）
２学年	動物の世界（動物の体のつくり）、気象とその変化（天気予報）
３学年	科学技術の進歩と生活（新素材、先端技術）、地球と宇宙（宇宙開発・観測）、自然と人間（環境・災害）

３　指導事例①　第１学年「水圧を感じる」

(1) 本事例におけるゲストティーチャーや教材の効果的な活用

独立行政法人　海洋研究開発機構(JAMSTEC)より、水深約 1000ｍ(約 100 気圧 100000hPa)までの水圧を再現できる圧力実験装置を借り、高水圧の状態で発泡ポリスチレン容器や、数種類の木片の変化を観察することを通し、圧力や粒子概念への理解を深める。また、最先端の深海探査をされている研究者の方から直接話を聞くことにより、学習した内容が実社会に活用されていることを実感し、科学への興味・関心を高める。

(2) 事例の概要

本単元は、身近な物理現象についての観察・実験を通して、光や音の規則性、力の性質について理解させるとともに、これらの事物・現象を日常生活や社会と関連付けて科学的な見方や考え方を養うことがねらいである。

本事例においては､独立行政法人　海洋研究開発機構(JAMSTEC)から借りた圧力実験装置を用い、高水圧中の発泡ポリスチレン容器がそのままの形で小さくなることにより、水圧が面に対して垂直にかかることを理解する。また、水圧をかける前後の電子顕微鏡写真や、水圧を上げるごとに気泡が出てくることなどから、発泡ポリスチレン内の気泡が圧縮されていることを気付かせる。さらに、数種類の木片の変化の様子を予想し、観察することを通して、圧力や粒子概念への理解を深め、理科の学習への興味・関心を高める。また、深海での探査についての講話を聞くことにより、学習した内容が社会で役立っていることを実感し、理科の有用感を高める目的もある。

(3) 指導計画の位置付け

身近な物理現象

イ　力と圧力（12 時間）

(ｱ)　力の働き（５時間）

(ｲ)　圧力（各１時間・全７時間）

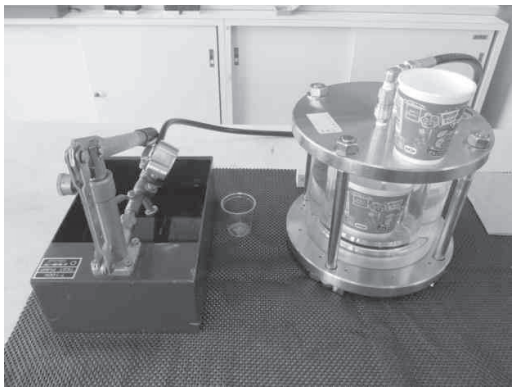
・圧力とは何か
・圧力とその単位
・水中ではたらく圧力
・深海の高圧の世界（本時）
・浮力の大きさを決めるもの
・浮力はなぜ生じるか
・大気による圧力

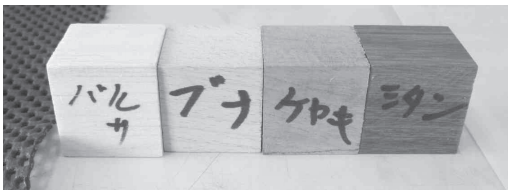
(4) 目標

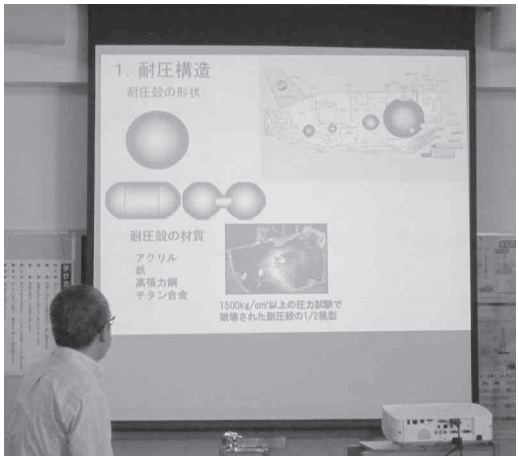
○　高水圧中の物質の変化を観察し、考察することによって、圧力や粒子概念についての理解を深める。　【科学的な思考・表現、自然事象についての知識・理解】

○　ゲストティーチャーによる深海探査についての話を聞くことにより、学習した内容についての有用感・関心を高める。　【自然事象への関心・意欲・態度】

(5) 学習活動の展開

	○主な学習内容・利用教材	□指導上の留意点・配慮事項 Ｓ：生徒の反応　◆評価［方法］
導入・5分	①前時の復習と本時の学習のねらいを把握する。ゲストティーチャーの方の紹介を聞く。 【復習】 ・水圧はその場所の上にある水の重さによる。 ・水圧は水深が深くなるほど大きくなる。 【ねらい】 ・圧力実験装置を利用し、深海の高圧の世界を考える。 ・研究者の講話を聞き、最先端の研究開発を知る。 【協力団体】 海洋研究開発機構（ＪＡＭＳＴＥＣ）	□ゲストティーチャーの方と事前に打合せし、今回の授業のねらい、進め方、学習内容に関係する生徒の既習事項、使用する学術用語などを打ち合わせておく。
展開・40分	②発泡ポリスチレン製のカップ麺の容器に、高い水圧をかけたとき、どのように変化するか観察し、その理由を考える。 【教材】水深 1000mの水圧を発生させられる圧力実験装置、発泡ポリスチレン製のカップ麺の容器  【発問】高い水圧をかけるとカップ麺の容器はどのように変化するだろうか。	□カップ麺の容器は発泡ポリスチレンでできていることを説明する。 □圧力に対する気体と液体の容積の変化について復習する。 □圧力実験が安全に行うことが出来る理由について確認する。（液体は圧力による容積変化がほとんど無いので容器内に少しの液体を入れることで加圧できる。） Ｓ：形や模様は一緒で、縮小したようだった。 Ｓ：小さくなった、表面はぼこぼこしていた。 Ｓ：表面のぼこぼこは、中の空気が抜けたのではないか。

	 【教材】加圧前後の発泡ポリスチレンの構造が分かる電子顕微鏡写真	S：中に空気があった部屋がつぶれていた。
	③密度の異なる数種類の木片に、高い水圧をかけたとき、どのように変化するか予想し、発表する。そして、その変化を観察し、解説を聞く。 【教材】シタン、ブナ、ケヤキ、バルサでできた１辺約３cmの立方体の木片  【発問】数種類の木片はどのように変化をするだろう？ 	□小学校で学習した「空気は圧力を加えると体積が小さくなるが、水は変わらない」こと、中学校１年で学習した「物質の３態を粒子のモデルで考える」ヒントカードを用意しておく。 S：バルサは小さくなる。密度が小さく、空気がいっぱい入っていると思うから。シタン・ケヤキ・ブナは変わらない。バルサと違って密度が大きいから。 S：年輪の繊維方向に縮む。 S：密度が小さいほど小さく縮む。 ◆木片の変化の様子を、根拠をもって予想できているか。【科学的な思考・表現、自然事象についての知識・理解】 ワークシート・発言
	④最先端の深海調査をしている研究者の方からお話をしていただく。 【教材】深海の生物の映像、しんかい6500の映像と浮力剤	□中学生が理解できるように、事前に講話内容、使用する学術用語、内容に関係する既習事項等を打ち合わせておく。

	 ⑤疑問に思ったことを質問する。	S：深海の魚はなぜつぶれないのですか？ S：深海の生物はどこからきたのですか？
まとめ・5分	⑥本時の学習で印象に残ったこと、分かったこと、知りたくなったことを書く。 ⑦協力施設の方に感謝する。	S：深海に多い生物は、網ですくい上げるとゼリーのような体なので、バラバラになってしまうことが印象的だった。 S：深海の圧力に耐えるために丸い形をしていることが分かった。 ◆外部講師による深海探査についての話を聞き、学習した内容についての有用感・関心を高められたか。【自然事象への関心・意欲・態度】ワークシート・発言

(6) 授業の様子

圧力の内容は実感を伴った理解がしにくく、生徒が理解しやすく、興味・関心をもってできる観察・実験も少ない。しかし、今回の授業では、実験の結果を見ようと我先にと圧力装置のまわりに集まり、圧力をかけるたびに歓声が上がり、自分の予想が正しかったことや、どの部分が違っていたかを話し合う姿が見られるなど、興味・関心をもって取り組めていた。また、ゲストティーチャーの講話の後には積極的に質問をする生徒が見られ、この点でも生徒の科学的な興味・関心を引き出せたと言える。

４ 指導事例②　第２学年「細胞の観察」

(1) 本事例におけるゲストティーチャーや教材の効果的な活用

独立行政法人　科学技術振興機構（JST）科学コミュニケーションセンターからスマートフォン用の顕微鏡（以後「スマホ顕微鏡」という。）とタブレット端末を借用し、ＪＳＴコミュニケーションセンター　フェローの開発者、永山國昭先生、タブレット端末を用いた顕微鏡観察授業を研究されているお茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター特任講師の竹下陽子先生の協力をいただき、授業案の作成を行った。実際の授業に当たっては､竹下先生をゲストティーチャーとしてお招きし､授業を実施した。

スマホ顕微鏡は、タブレット端末やスマートフォンのインカメラに装着する事により顕微鏡として使うことができる器具である。タブレット端末の画面で試料を観察できるため、従来の顕微鏡では難しかった班の中での観察物の共有ができる。また、プロジェクターと班のタブレット端末をリンクさせることで、各班の観察物をクラス全体で共有することも可能である。今回は観察した結果を写真で記録させ、発表用のノートアプリを利用し発表資料をつくらせ、班ごとに発表させることでクラス全体での観察結果の共有を図った。

さらに、ゲストティーチャーに様々な試料を準備していただき、解説を聞きながら観察することで、生物の多様性に気付き、生物が細胞からできている事やそのつくりの共通性と生物による違いを理解させる。

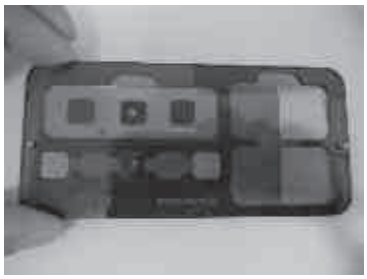


図１　スマホ顕微鏡のセット eye のセット

図２ スマートフォンでの利用

(2) 事例の概要

本単元「動物の世界と生物の変遷」では、生物の体は細胞からできていることを観察を通して理解させる。また動物などについての観察・実験を通して、動物の体のつくりと働きを理解させ、動物の生活と種類について認識を深めるとともに、生物の変遷について理解させることを目的とした単元である。

本事例では単元の導入として、様々な動植物の細胞を観察した。その際、スマホ顕微鏡を用いることで、個々の気付きや発見を班・クラス単位で共有し、深めた。またゲストティーチャーに準備していただいた複数の試料について、解説をいただきながら観察を行わせることで、生物には多くの種類があること、また動物と植物の細胞には共通の部分と違う部分あるなどに気付くことができた。また、ゲストティーチャーに、観察した動植物の解説及び御自身の研究体験などをお話いただいた。この授業を通して生徒が、生物の体のつくりへの理解を深め、興味・関心を高めることで、今後の学習する動物の

世界についての導入とした。

(3) 指導計画の位置付け

動物の世界と生物の変遷

ア　生物と細胞（５時間）

(ｱ) 生物と細胞（各１時間）

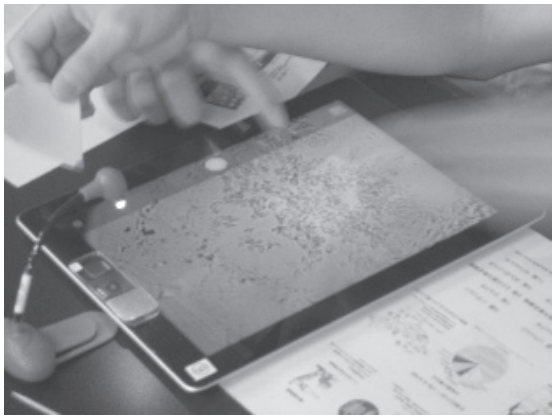
・生物の体のつくりと細胞

・細胞の観察（本時）

・細胞の観察からわかること

・単細胞生物と多細胞生物

・細胞のまとめ



(4) 目標

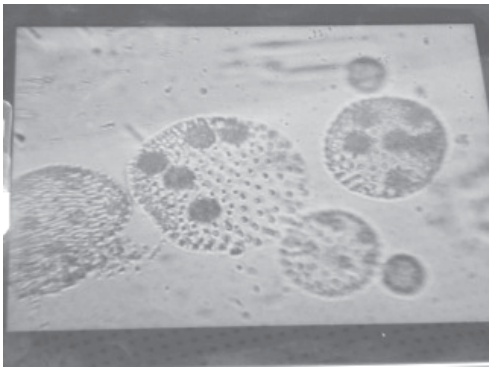
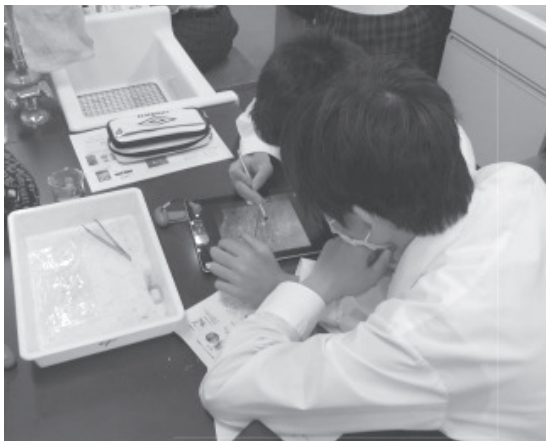
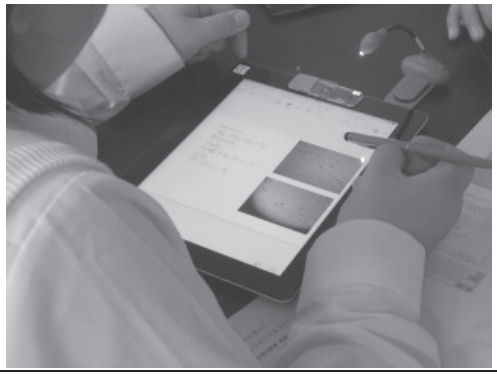
○　様々な生物の細胞を観察することで、動植物の細胞について理解を深める。

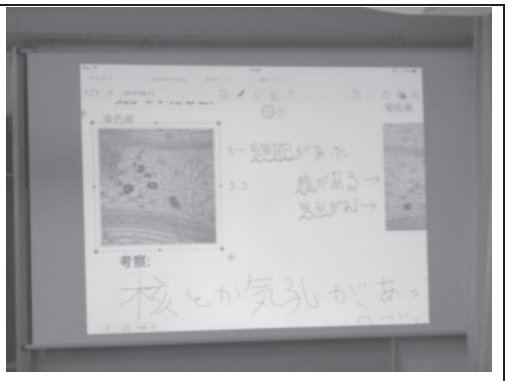
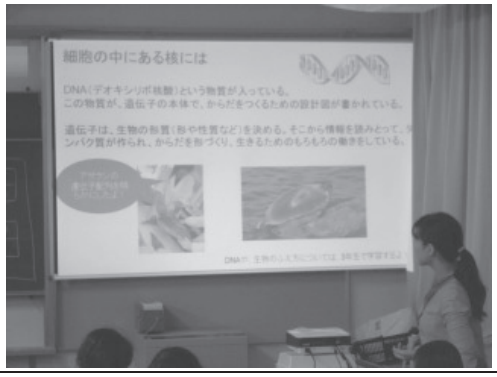
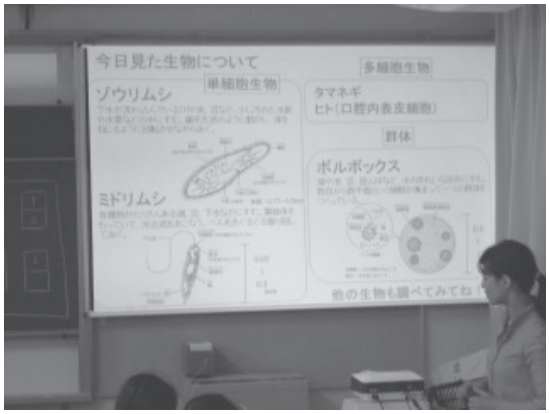
【自然事象についての知識・理解】

○　ゲストティーチャーの指導のもと様々な細胞を観察し、発表を行うことで学習に対しての関心・意欲を高める　【自然事象にへの関心・意欲・態度】

(5) 学習活動の展開

	○主な学習内容・利用教材	□指導上の留意点・配慮事項 Ｓ：生徒の反応　◆評価［方法］
導入・5分	①本時の学習のねらいを把握する。ゲストティーチャーの方の紹介を聞く。 【ねらい】 ・スマホ顕微鏡を使い、様々な生物の体のつくりを見てみよう 【協力団体】 科学技術振興機構(JST) ②スマホ顕微鏡の紹介と操作方法について説明を聞く。 	□ゲストティーチャーの方と事前に打合せし、今回の授業のねらい、進め方、学習内容に関係する生徒の既習事項、使用する学術用語などを打ち合わせておく。 □導入に当たっては生徒の活動を多く取れるよう事前に講師の先生と相談し、紹介・スマホ顕微鏡の説明などできるだけ短くなるように行った。 □試料の置き方、ピント合わせの方法、撮影の方法について説明をしていただく。
展開・	③操作方法を確認しながら観察を行う。 ［観察Ⅰ：全班共通］ ・タマネギ鱗片の表皮細胞（染色前・後）	□スマホ顕微鏡の使い方を理解させるためにも全班共通で行う。 □机間指導を行いスマホ顕微鏡の使用方法を

40分	④各班課題の試料の取扱い方の説明を聞き観察する。  ［観察Ⅱ：各班］ A、植物細胞 ・オオカナダモの細胞 ・ムラサキツユクサの細胞 ・ボルボックス B、動物細胞 ・ヒトの口腔内表皮細胞 ・ミドリムシ ・ゾウリムシ ⑤気付いたことなどメモをとる。	確認していく。 □観察した結果を写真として記録させる。必要に応じて動画撮影も可とする。 S：本当に顕微鏡みたいに写った。 S：（染色後）真ん中に色が付いた。 □教師が各班に試料を割り振る。 □操作方法など机間指導を行う。またゲストティーチャーに試料について、追加の説明をいただく。 S：動いている。速いなー。 S：細胞がいっぱい並んでる。 S：緑色の葉緑体がいっぱいある。 
	⑥撮影した写真を用いて、ノートアプリで発表の準備を行う。 	□発表用ノートの書式について確認 □撮影した写真を使用する。 □発見した事や分かったことについてコメントを記入する。 ◆積極的に観察や発表に取り組もうとしている。 【自然事象への関心・意欲・態度】行動観察・発言
まとめ・	⑦班ごとに発表を行う。 ［タブレットからディスプレイへ転送］	□時間によって発表する班数を調整する。 ◆観察から、生物の体は細胞からできている

5分	 ⑧ゲストティーチャーの話を聞く。 ・観察した動植物の解説 ・自身の研究についてのお話  	ことや細胞の特徴を理解し、発表を行うことができている。【自然事象に関する知識・理解】ワークシート、発表ノート □解説に当たっては、生徒の発表を受け、生物についての補足の説明や発展的な内容について説明していただく。  □今後の学習とのつながり・有用性 アザラシの遺伝子配列を特定する研究を行ったことをお話しいただく。

(6) 授業の様子

顕微鏡観察は試料の微細な構造を観察させることができるため、中学校の学習でよく使われる。しかし、観察や実験の技能に個人差があり、個別の観察になる場合も多く、その際は観察対象をうまく観察できなかったり、気付いたことを生徒間で共有したり教えあったりすることが難しい面がある。

今回の実践では科学技術振興機構（ＪＳＴ）科学コミュニケーションセンターに協力を得て、今後、学校現場への導入が期待されるタブレット端末とスマホ顕微鏡を用いて観察を行った。生徒のアンケートに「みんなと協力して観察できた。」とあったように、タブレット端末の画面に映し出された試料の映像を見て班員と共に話し合いながら、積極的に観察に取り組む姿が見られた。また、その結果について班ことに発表を行い、クラス全体で共有することで、よい発表を行おうと意欲的に取り組む姿がみられた。加えて今回、ゲストティーチャーに微生物の試料の提供と、それぞれの試料についての解説をいただきながら観察を行い、さらに、タブレット端末から大画面に映しながら発表することで多くの発見をクラス全体で共有することができた。

4　指導事例③　第２学年「目のつくりと働き」

(1) 本事例におけるゲストティーチャーや教材の効果的な活用

都立産業技術高等専門学校では、科学への興味やものづくりへの関心を高めるための多くの種類の出前授業を行っており、中学生が利用しやすいものもあるので、ぜひ利用したい。本時は、その中の「人間の不思議(視覚を中心として)」を活用した。

なお、時間設定が１コマ 50 分相当のプログラム（１コマまたは２コマ）なので、事前に削る部分や、あらかじめ中学校で教師が教えておく部分などの打合せが必要である。

本時のねらいは、通常では構造を理解して終了となってしまう「目」についての学習で、補色残像など目の機能について体験を通して学習することで、日常生活でも活用されていることに気付かせ、理科の学習と実社会との関連を意識させることである。

(2) 事例の概要

本単元は、細胞レベルでみた生物の共通点と相違点に気付かせるとともに、動物の体のつくりと働き、体の特徴について分類できることを理解する。また、様々な動物の比較分析を通して、生物が進化してきたことを理解し、生物を時間的なつながりで捉える見方を身に付ける。観察や実験を通して科学的な思考力を育成することがねらいである。

本事例では、ゲストティーチャーを活用した授業を行い、補色残像などを体験するとともに、それらの現象を社会で利用しているところに気付かせ、理科の学習への興味・関心や有用感を高めることが目的である。

(3) 指導計画の位置付け

動物の世界と生物の変遷

ア　動物の体のつくりと働き（９時間）

(ｱ) 刺激と反応

a　感覚器官

感覚器官（本時）

b　刺激と反応のメダカの実験（血液の観察も兼ねる。）

c　神経系

d　刺激と反応

e　反応時間を調べよう。（実験とまとめ）

f　反射

g　関節と筋肉

(4) 目標

○　補色残像など普段意識することがあまりないと思われる体験を通して、視覚を中心としたヒトの体についての理解を深める。　【自然事象についての知識・理解】

○　ゲストティーチャーの講話を聴くことにより、理科の有用性や関心・意欲を高める。　【自然事象への関心・意欲・態度】

(5) 学習活動の展開

	○主な学習内容・利用教材	□指導上の留意点・配慮事項 Ｓ：生徒の反応　　◆評価（方法）
導入・10分	①前時の授業で取り上げた４つの用語の復習をする。【復習】 ・目の構造（錘体・桿体、明順応、暗順応） ②ゲストティーチャーの方の紹介を聞く。 【協力団体】都立産業技術高等専門学校	□事前打合せで学習しておいてほしいと言われた錘体・桿体、明順応、暗順応については前時に触れている。 □ゲストティーチャーが使用する用語については事前に確認しておき、生徒が知らない用語が出て」きたら適宜説明を入れる。
展開・35分	③視覚は、ヒトが外部から取り入れる情報の中でも割合が大きいことや錯覚があることについて学ぶ。 ・補色残像などを体験する。 ・いくつかの動画を見て、「見ているようで見ていない」ことがあることを体験する。 ⑤ゲストティーチャーの方の話を聞く。 ・赤色は刺激が強いことから、手術着や手術室、道路標識や車のテールランプなどに補色の緑色が利用されていることなど具体例を聞く。	Ｓ：補色残像で白黒のものがカラーに見えることが「おもしろかった。」 Ｓ：バスケットボールのパス回数を意識していると画面の中にクマが出でてきているのにまったく気付かなかったことに 「とてもびっくりした。」 「見ているつもりでも見えていないこともあるんだ。」 □高い専門性をもつ研究者から、理科で学んだことが社会で役立っていることなどの話をしていただき、生徒の興味を引き出す。
まとめ・5分	⑥授業アンケートを実施する。	◆視覚について初めて知ったことに興味をもち、進んで取り組もうとしている。 【自然事象への関心・意欲・態度】ワークシート

(6) 授業の様子

生徒たちは、補色残像として、実際の色とは異なる色が見えてしまうことや見ているつもりでも見えていないことがあることを体験し、非常に興味をもって学習していた。また、それらの目の働きの特徴から、社会で様々な工夫がされていることを知り、理科の有用性についての認識が高まったと言える。

補色残像等の詳しい仕組みについては触れていないが、生徒が興味をもち、その仕組みを解明するために調べようとしたり、今後の学習内容としてイメージしたりするなど、理科を学ぶ楽しさを意識させることができたと考えている。

５　指導事例④　第２学年「からだが動くしくみ」

(1) 本時におけるゲストティーチャーや教材の効果的な活用

ＧＥヘルスケア・ジャパン株式会社の超音波検査の医療機器を利用し、筋肉の動く様子の観察等を行い理解を深めるとともに、最先端の機器に触れることで科学に関する興味・関心を高める。

なお、ＧＥヘルスケア・ジャパン株式会社では、現在、企業訪問は受け入れているが、出前授業は基本的に行っておらず、今後、検討していくとのことである。

(2) 事例の概要

本単元は、骨格と筋肉の働きによって運動が行われることを理解することが目的である。通常はニワトリの手羽先を観察したり、動物の骨格標本や人体模型を利用したりすることが考えられるが、いずれも実際に動いているものを観察できるものではない。

本事例では、ゲストティーチャーによる授業を行い、超音波の性質を学んだ後、実際の機器を利用し､映像､特に動画を見ることで動物の体が動くしくみに興味をもたせる。

また、理科で学習した内容が、実社会で利用していることに気付かせ、理科の学習への有用感を高めることが目的である。

さらに、機器の開発者に直接話を聞くことで、職業の一つとしての研究職・開発職への理解を深めることも期待した。

(3) 指導計画の位置付け

ア　動物の体のつくりと働き（９時間）

(ｱ) 刺激と反応

a　感覚器官

b　刺激と反応のメダカの実験（血液の観察も兼ねる。）

c　神経系

d　刺激と反応

e　反応時間を調べよう。（実験とまとめ）

f　反射

g　関節と筋肉

h　まとめ（本時）

(4) 目標

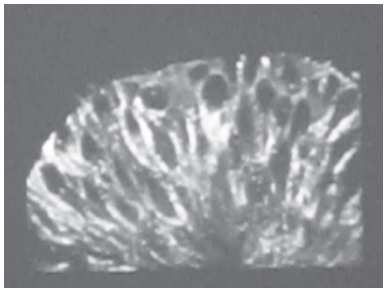
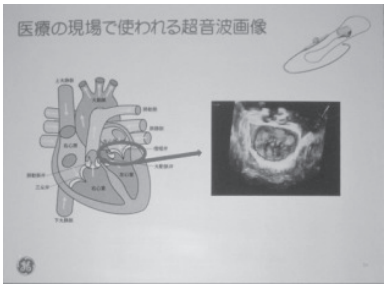
○　超音波検査の医療機器を利用して動物の体が動くしくみに興味をもたせる。

○　ゲストティーチャーの講話を聴くことにより､理科の有用感や関心･意欲を高める。

【自然事象への関心・意欲・態度】

(5) 学習活動の展開

	○主な学習内容・利用教材	□指導上の留意点・配慮事項 Ｓ：生徒の反応　◆評価（方法）
導入・5分	①音についての復習をする。 ②ゲストティーチャーの方の紹介を聞く。 【協力団体】ＧＥヘルスケア・ジャパン株式会社	□時間をかけずに簡単に復習する。

展開・35分	③超音波についての説明を聞く。 ④超音波診断装置のしくみについての説明を聞く。 ⑤果物入りゼリーを見てどのように見えるかを理解する。  【発問】(他のゼリー内の画像だけを見て) これは、何の果物でしょうか? ⑥手の筋肉の動きの画像を観察する。 ⑦臨床場面で使用されている診断画像についての説明を聞く。(どのような臨床場面でどのようなことができるか。) ・肝臓の断面　　・胎児の断面図と３Ｄ像 ・心臓の僧帽弁の動画  	□高い振動数では、解像度が上がること、低いと深いところまで見られることを確認する。 □この機器の利点・欠点に触れる。痛みがない、放射線被曝の危険がない、など。 □ゼリーの中に入っているみかんが画像で見られることで、ゼリー内部を見ることができることを捉えさせる。 S:「チェリー!」など盛り上がった。 □動きをリアルタイムで観察できることに着目させ、興味を引き出す。 S:腕の筋肉を見せて、指を曲げ伸ばししたときの動きを見られることに「おぉ〜」と歓声があがるほど驚いていた。
まとめ・	⑧講師による仕事への夢などメッセージを聞く。	S:学生時代にＣＴ画像を見て医療機器開発の進路を選んだこと、「医療に国境は無い」という話にうなずいている生徒もいた。

10分	⑨授業アンケートを実施する。	◆動物の体が動くしくみに興味をもって観察を行い、日常生活との関わりで見ようとしている。【自然事象への関心・意欲・態度】ワークシート

(6) 授業の様子

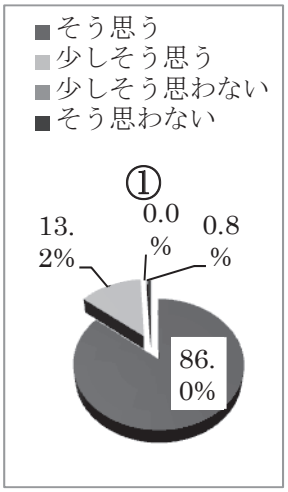
超音波診断装置を使用し、手の筋肉を曲げたり伸ばしたりしたときの様子を観察すると、動きに応じて生徒から歓声が上がり、大変高い興味・関心を示していた。また、ゲストティーチャーから先端技術が医療に役立っている話を聞き、将来の職業として夢をもったという感想や、最先端の機器に触れることで、理科で学んだことは社会で役に立つという感想が多数出され、生徒の関心・意欲を向上させるために、大変効果的であったと言える。

Ⅳ　研究のまとめ

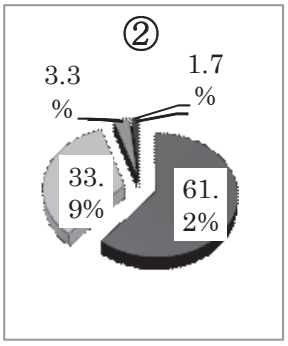
1　成果

ゲストティーチャーや教材を活用した授業を行った後のアンケート項目は以下のとおりである。

①今回の授業は、楽しかったですか。（授業への満足度）
②今回の授業を受けて、科学への関心がより高まりましたか。（科学への関心・意欲）
③今回の授業を受けて、以前より理科の学習は、社会で役立つと思いましたか。（実社会への有用感）
④今回の授業を受けて、以前より理科の学習は、将来自分に役立つと思いましたか。（自己の生活への有用感）



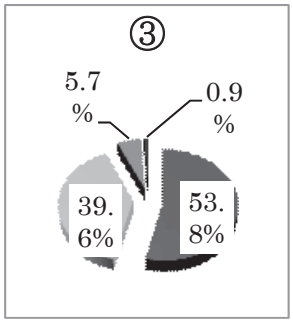
①～④全ての項目で、約９割以上の生徒が、「そう思う」「少しそう思う」と答えている。このことから、ゲストティーチャーや教材を活用した授業は、生徒の科学への関心・意欲を高め、実社会・自己の生活への有用感を高める効果が十分にあったと考えられる。

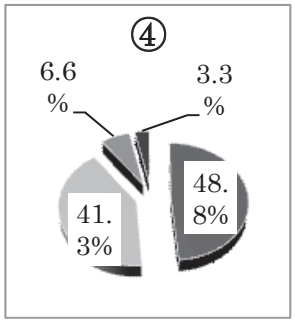


生徒の記述からは、「（今回の圧力ではあまり変化がなかった）シタンやケヤキはどのくらい水深（水圧）なら小さくなるのか知りたい。」（指導事例①）と新たな問題を見いだしたり、「深海のことがとてもよく分かったし、もっと知りたくなった。」（指導事例①）と興味・関心を高めたられた記述が多く見られた。

また、「密度が小さいものは、内部に空気を多く含み、バルサはその空気が小さくなることにより一番小さくなった。」（指導事例①）などと科学的根拠に基づいて記述できる生徒がより多くなった。

さらに、「タブレットを使えば多くの人が一度に見られることが分かった。多くの人と見ればよい情報が入る。」（指導事例②）、「自分たちの書いたものを大きく映して発表できたのがよかった。タブレットを使って意見を言い合い、他の班との交流が深まった。」（指導事例②）と貸し出しされた機器の有用性に気付いた記述や、「医者にならなくても病気の人を減らすことができるということがすごいと思った。もし理系の仕事に就くならこのような人を助ける仕事がしたい。」（指導事例④）と学習を自分の将来の職業選択に結びつけて考えられた記述も見られた。これらの結果から、ゲストティーチャーや教材を活用した授業は、生徒の科学への関心・意欲を高め、実社会・自己の生活への有用感も高められる指導法であり、さらに、科学的な理解を深められる指導法であるといえる。





2　まとめ

(1) 生徒の科学への関心・意欲を高められる

中学校では準備しにくい機材や生物教材、映像を利用することにより、生徒は、その実験結果を食い入るように観察していた。また、最先端の研究や、専門的な知識の豊富な講師の話を聞くことにより、科学に関する興味・関心を高めることができた。各種調査から、諸外国に比べ低い科学への関心・意欲を高めることに大変有効だと考えられる。また、科学への関心・意欲を高めることは、理科への学習意欲を高め、学力を向上させる源である。この意味からも、このような授業は有効であると言える。

(2) 実社会・自己の生活への有用感も高められる。

最先端の研究や、その技術を応用した製品を作っている企業の方の話を聞くことにより、学習した内容が実社会で役立っていることを実感できた。「今勉強していることは何の役に立っているのか」日々あまり意識せずに学習していた生徒も、実社会で活用されていることを実感を伴って理解できた。

3　実際に外部との連携を行う際の留意点

(1) 連携先を見付ける。

現在多くの企業や研究機関で学校教育向けの取組が行われており、国立科学博物館などの貸し出し用標本やプログラム、一般企業の社会的責任（ＣＳＲ）の一環として、「出前授業」などを行っているケースがある。これらは、各団体のホームページで、これまでに行われた事例について調べることができる。また、企業と学校の仲介を行っている団体を利用することも考えられる。その他、地域貢献として積極的に活動を行っている企業やＮＰＯ法人などでは新たに協力をしてもらえる可能性がある。

(2) 事前に行うこと

団体について事前に調べた後、実際に連絡をとる前に、授業の目的、こちらが期待する内容や利用方法などをある程度明確にしてからアポイントメントを取り、伝える。出前授

業の中にはそのプログラムが固定的で、授業の目的に即して変更することが難しいものもあるので、調整が重要である。

その際に、講師料や教材の輸送費などについても確認をする。(費用が必要になる場合は予算を管理職と事前に協議しておくことが必要になる。予算としては、特色ある学校づくり予算、ＰＴＡ予算、理科教材費（生徒負担）などが考えられる。)

授業を実施する前にゲストティーチャーの方と必ず事前の打合せを行う。その際に、中学校での授業形態や生徒の実態を伝え、適切な内容になるように、学習内容や教材の見せ方について調整する。このとき、事前準備が必要なもの、生徒の人数、ＩＣＴ環境などについても確認をしておく。話し合った内容については指導案を作成し共通理解を図る。

(3) 授業での配慮事項

ゲストティーチャーの方との打合せから、予備知識や実験操作を学習する必要がある場合は、事前の授業で生徒に予備学習を行っておく。

授業では、役割分担をはっきりさせ授業進行を行っていく。また授業内で中学生が分かりにくい専門用語などが使われることがあるので、事前にゲストティーチャーの方に補足を入れる事の許可を取った上で、教師が簡潔に噛み砕いて説明を入れる。

まとめに当たり、ゲストティーチャーの方の研究の苦労、実体験・夢、中学生の時に考えていた事や頑張っていたことなど、生徒に向けてのメッセージなどを話していただくのも、生徒が科学に興味をもつために効果的である。

４　課題

(1) 費用面での配慮

講師料や、教材の輸送費などがかかる場合が多い。この費用まで負担していただける企業や団体もあるが少ない。この費用を、計画的に準備しておく必要があるが、学校予算でまかなうことが難しいのが現状である。よって、今後の予算措置が望まれる。

(2) 専門用語

講師の授業内容と、中学生の理解力には大きな開きがあることも予想される。事前の打ち合わせで明らかになった高度な専門用語や内容について、講師の方には生徒の実態に合わせた用語や内容に変えていただいたり、生徒には事前に説明したり授業で補足説明を行う必要がある。

(3) 協力団体の開発

今回はだれでも活用できる指導法を目指し、あえて開発しなかったが、地域にある企業、大学、博物館等を活用できる可能性は高い。このような団体を開発することが必要である。

(4) カリキュラムのデータベース化

協力的な博物館などの施設、社会貢献活動に積極的な企業のもつ学習内容や教材などの情報を、一人一人の教諭で把握することは難しい。東京都全体で利用しやすいよう、データベース化することが望まれる。

平成 26 年度　研究開発委員会　委員名簿

＜中学校理科研究開発委員会＞

	学　校　名	職名	氏　名
委員長	江戸川区立松江第一中学校	校　　長	宇田川　功
委員	墨田区立両国中学校	教　　諭	黒田　俊一
委員	江東区立深川第三中学校	主任教諭	北田　　健
委員	江東区立亀戸中学校	主幹教諭	遠藤　博則

〔担当〕東京都教育庁指導部義務教育特別支援教育指導課　統括指導主事　和田栄治

〈中学校保健体育研究開発委員会〉

研究主題・副主題

保健体育授業における生徒の「思考・判断」を促す学習指導

～知識・技能と関連付けた学習活動～

Ⅰ　研究主題設定の理由

毎年、文部科学省が実施している「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」の結果によると、子供の体力は昭和60年頃をピークに低下傾向に歯止めがかからない状況であった。また、運動習慣のある子供とそうでない子供の二極化傾向がみられると指摘されてきた。それを受け、都道府県等行政機関における様々な施策や学校現場での実践的な取組がなされてきた。その結果、近年では一部下げ止まった状況になり、平成22年度の結果では平成10年頃に比べて緩やかな向上傾向にあることが示されたが、昭和60年頃に比べると依然低い傾向にある。平成26年度の結果は、前年度と比較して横ばいであった。

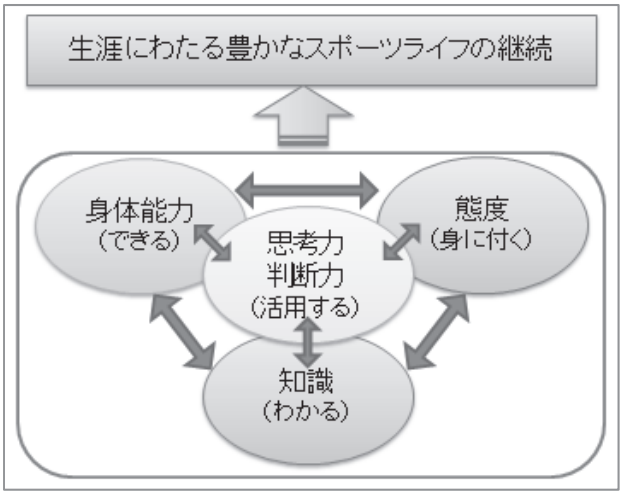
東京都教育委員会では、平成21年度に「子供の体力向上推進本部」を設置し、組織的・継続的に子供たちの体力向上に向けた取組を推進してきた。「平成26年度東京都児童・生徒体力、運動能力、生活・運動習慣等調査報告書」（以下、調査報告書）によると、東京都の子供の体力は全般的に向上傾向にはあるが、全国平均値と比較すると低い水準にあるとしている。子供の体力向上は、今後も引き続き大きな課題となるであろう。

調査報告書の中では、毎日運動する児童・生徒は中学校２年生まで学年とともに増加するが、その後は減少することから、今後の課題として「運動習慣を保持し、それを継続するためにはまず現状のライフスタイルの見直しが必要」と指摘している。文部科学省の調査結果からは、幼児期の遊びの体験と子供の体力・運動能力には相関があることが分かっている。

上記のような課題の背景には、外遊びや運動をする空間・時間・仲間の減少（三間の減少）、食事や睡眠といった生活習慣の悪化による体調不良などが挙げられる。また、仲間との関係がうまく築けない、運動意欲が低いなど、他者との関わりや心の問題も深刻である。したがって、すべての子供たちが等しく運動やスポーツに親しむ機会を与えられ、仲間と関わりながら健康・体力の保持増進について学ぶことができる保健体育授業の果たすべき役割は極めて大きい。

これまでの保健体育授業を振り返ってみると、技能向上や直接的な体力向上のための指導方法に関する実践や研究は多く行われてきた。それにより、ある程度は技能が高まったり一過性の体力向上がみられたりするという成果が挙がっている。しかし、上述した実態や背景を踏まえると、授業内に行う運動によって高まる体力だけではなく、それをきっかけとして日常生活においても主体的に運動を継続して行うことによって高まる永続的な体力向上を目指していくことが求められる。すなわち、これからの保健体育授業では、体力向上のための基本的な知識の習得とともに、主体的に運動に親しむ意欲や習慣、その実践力を育てる指導が必要になると考える。生涯にわたる体力の維持・増進を実現するためには、子供たちが運動やスポーツを楽しいと感じることが必要であり、教師は子供たちにその魅力を味わわせることが不可欠である。

こうした視点から改めて学習指導要領に示されている３つの指導内容「技能（運動）」、「態度」、「知識、思考・判断」を見てみると、その構造は「技能（運動）」、「態度」、「知識」をつなぐものとして「思考・判断」が位置付けられている。つまり、「身体能力（技能＋体力）＝できる」、「態度＝身に付く」、「知識＝分かる」ということを循環させるのに、「思考力・判断力＝活用する」ということを相互に関連させ、そのサイクルを回していくことで方向目標である「生涯にわたる豊かなスポーツライフの継続」につながるというモデルになっている（右上図）。このことから、豊かなスポーツライフの実現に向けた「技能」や体力の向上は、「知識」や「態度」とともに、「思考・判断」をバランスよく連動させながら学習することによって、より効果的に図れるものであると捉えることができる。



以上のことから、平成 26 年度本委員会では、「思考・判断」に注目をし、それを促す学習指導を意図的に計画的することで、生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現する実践力の育成、ひいてはその実践力の育成が運動意欲や運動習慣へ好循環をもたらし、子供たちの永続的な体力向上につながるものと考え、本研究主題を設定した。

折しも、平成 26 年 11 月に中央教育審議会は「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方」について諮問されたところである。今後、育成すべき資質･能力を踏まえた教科･科目等の在り方や教育内容について、特に体育・健康分野に関しては「子供の体力等の現状を踏まえつつ、2020 年のオリンピック・パラリンピック開催を契機に、子供たちの運動・スポーツに対する関心や意欲の向上を図るとともに、体育・健康に関する指導を充実させ、運動する習慣を身に付け、健康を増進し、豊かな生活を送るための基礎を培うためには」という視点で見直しが図られることになる。また、その学び方については、事柄を知っているのみならず、実社会や実生活の中で知識･技能を活用しながら、自ら課題を発見し、主体的･協働的に探究し、成果等を表現していけるよう、学びの質や深まりを重視する「アクティブ・ラーニング」の開発・普及が取り上げられている。このような国の動向からも、保健体育学習において習得した「技能」や「知識」をどう活用していくか、すなわち「思考力・判断力」をどう育成していくかを追及する必要があると言える。これは、本委員会が設定した研究主題にも合致するものである。

Ⅱ　研究の方法

研究を進めるに当たり、「思考・判断」の指導に関する課題を踏まえて、中学校学習指導要領解説（保健体育編）に示される指導内容について基礎研究を行った。次いで、第１学年「体つくり運動」、第１学年「武道（柔道）」、第２学年「球技・ゴール型（バスケットボール）」、第３学年「球技・ゴール型（サッカー）」を取り上げ、基礎研究に基づき各単元における「思考・判断」を促す学習活動を意図的・計画的に設定した。そして、その指導と評価の計画を

基に単元を進め、単位時間の検証授業を実施し、成果と課題について検討した。

また、学習内容をより確かに身に付けさせるためには、教師の効果的な働きかけ（教師と生徒との関係性）や生徒同士の関係性なども重要である。したがって、本研究で扱う各単元における発問、指導言語、学習カードやＩＣＴの活用、学習形態、学習評価、支援を要する生徒への手立てなどについても、本委員による授業観察及び省察により検証した。

1　研究開発構想図

＜保健体育科の目標＞
心と体を一体としてとらえ、運動や健康・安全についての理解と運動の合理的な実践を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てるとともに健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上を図り、明るく豊かな生活を営む態度を育てる。

＜東京都の中学生の体力の現状及び課題＞
○長期的に見て向上傾向にあるものの、依然として全国平均値を下回っている。
○運動・スポーツをする生徒としない生徒の二極化傾向
○運動習慣に関わるライフスタイルの見直しの必要性

＜研究主題＞
保健体育授業における生徒の「思考・判断」を促す学習指導
～知識・技能と関連付けた学習活動～

＜研究開発の基本的な考え方＞
○「思考・判断」の捉え方について検討・整理
○「思考・判断」を促す学習活動のポイントを提案

＜研究開発の仮説＞
「思考・判断」を促す学習活動を意図的に計画することで「思考力・判断力」を効果的に身に付けさせることができ、それは豊かなスポーツライフを実現する実践力の育成や永続的な体力向上につながるであろう。

＜研究開発の内容＞
○いくつかの領域について、「思考・判断」を促す学習活動に視点を当てた単元計画（指導と評価の計画）を作成する。
○単元計画と関連させ、具体的な「思考・判断」を促す学習活動の方法（場面）、及びその「思考・判断」の基となる知識や技能を習得させる学習活動の内容を提示する。
○授業等における実践と検証を行い、成果と今後の課題を明らかにする。

2　「思考・判断」についての整理

「思考・判断」とは、学習課題に応じて、これまでに学習した内容を学習場面に適応したり、応用したりすること。		
発達段階に応じて		具体的に
第１学年及び第２学年	基礎的な知識や技能を活用して、学習課題への取り組み方を工夫できる。	１．体の動かし方や運動の行い方に関する「思考・判断」 ２．体力や健康・安全に関する「思考判断」 ３．運動実践につながる態度に関する「思考・判断」 ４．生涯スポーツの設計に関する「思考・判断」
第３学年	これまで学習した知識や技能を活用して、自己の課題に応じた解決ができる。	

※中学校学習指導要領解説より作成

Ⅲ　研究の内容

1　球技（ゴール型：サッカー）の「思考・判断」を促す学習活動の提案

(1)　「思考・判断」の基となる知識及び技能・態度

発達の段階			中学１・２年	
領域			球技（ゴール型）	
技能	指導内容		ゴール型では、ボール操作と空間に走り込むなどの動きでゴール前での攻防を展開	第２学年で扱う中心的な技能及び知識（実態に合わせて）
	留意事項		○攻撃を重視する ○チームの人数、ピッチの広さ、用具、プレイ上の制限を工夫したゲーム ○ボール操作とボールを持たないときの動き	□ルールやピッチを工夫した簡易ゲーム □オフサイドなし □ハンドボールのゴールの使用等
	解説　例示	ボール操作	・ゴール方向に守備者がいない位置でシュートする。 ・マークされていない味方にパスをする。 ・得点しやすい空間にいる味方にパスをする。 ・パスやドリブルを使ってボールをとられないようにキープする。	□シュート □パス（インサイドキック、アウトサイドキック） □トラップ □ドリブル
		ボールを持たないときの動き	・パスを受けるために、ゴール前の空いている場所に動く。 ・ボールとゴールが同時に見える場所に立つ。 ・ボールを持っている相手をマークすること。	□パスアンドゴーラン（壁パス） □スペースへの飛び出し（広がる、背後をとる等） □サポート
態度	指導内容		積極的な取り組み、フェアプレイ、分担した役割を果たす、話合いへの参加、健康・安全に気を配る	扱う中心的な技術との関連（実態に合わせて）
	解説	愛好的	・運動に積極的に取り組む。	□フェアプレイ □仲間への助言 □役割分担の責任を果たす □話合いへの参加 □用具の扱い方
		公正	・ルールやマナーを守る、フェアプレイ ・検討を認め合う、尊重し合う	
		協力	・仲間の学習を援助する、助言する ・仲間との連帯感　など	
		責任	・準備、片付け、記録、審判等の分担された役割を果たす。 ・チーム内の役割を果たす。貢献する。	
		参画	・課題や作戦に関する話合いに参加する。 ・意見を聞き、述べる。考えを伝え合う。	
		健康・安全	○体調の管理、用具の扱い方、コートの状態 ○技の難易度、運動の程度	
知識、思考・判断	指導内容		運動の特性や成り立ち、技術の名称や行い方、関連して高まる体力、課題に応じた運動の取り組み方の工夫	知識、思考・判断の具体的な内容及び第２学年で扱う内容（■を中心に）
	解説（知識）	成り立ち 技術の名称 関連して高まる体力	○集団や個人による攻防 ○球技の型（ゴール型、ネット型、ベースボール型） ○競技の成り立ちや歴史、オリンピック競技 ○パスやシュート、キープの方法 ○空間への動き方 ○戦術の名称とそのポイント ○ルール、試合方法、審判 ○関連して高まる体力（巧緻性、敏捷性、スピード、全身持久力）	□球技の種類、サッカーの特性や歴史 ■インサイドキック、アウトサイドキック、トラップ、ドリブルの名称及び方法の説明 ■ポジションの名称と役割 ■簡単な戦術（壁パス、スルーパス等） ■ルールや審判、試合の方法 □関連して高まる体力
	解説（思考判断）	課題に応じた運動の取り組み方の工夫	○運動の行い方のポイントを見つける ○自己やチームの課題を見つける ○課題に応じた練習方法を選ぶ ○分担した役割に応じた協力の仕方を見つける。 ○安全上の留意点を練習や試合の場面に当てはめる。	■運動の行い方に関する思考・判断 □体力や健康・安全に関する思考・判断 □運動実践につながる態度に関する思考・判断 □生涯スポーツ設計に関する思考・判断

(2)　第２学年「サッカー」指導と評価の計画

時		1	2	3	4	5
ねらい		サッカーの授業についての理解	ボールを操作する基本的な技能を身に付けゲームを楽しもう			ボールを持っていないときの動きを工夫しゲームを楽しもう
		○サッカーの特性や歴史、健康・安全面での留意点、学習の進め方等について理解しよう。	○全員にパスがつながる楽しいゲームを目指そう。 ○ルールを守り、互いに認め合いながらフェアなゲームをしよう。	○ドリブルやパスでボールをキープし、ゴール前までボールを運ぼう。	○ドリブルやパスでボールをつないだり、キープしたりしてシュートにつなげよう。 **★ボール操作に関する自分の課題を見つけよう。**	○ボールを持っていない時に積極的に動き、パスをもらおう。
学習の流れ	0	**オリエンテーション** ・学習の進め方 ・特性や成り立ち ・関連して高まる体力 ・健康、安全面でのルール ・チーム分け ・役割分担	**前時の振り返り** **本時のねらい・内容の確認** **ウォーミングアップ**	**前時の振り返り** **本時のねらい・内容の確認** **ウォーミングアップ**	**前時の振り返り** **本時のねらい・内容の確認** **ウォーミングアップ**	**前時の振り返り** **本時のねらい・内容の確認** **ウォーミングアップ** ・ボール操作を中心にチームで内容を考える。
	20	**試しのゲーム** →オフィシャルに近いルールでのゲーム	**ゾーンゴールゲームⅠ** ・ゲームの進め方、留意点 ・チーム内で３対３で行う ・必ず全員がボールを触るまでゴールを狙うことができない **パスやトラップ** ・ゲームの振り返り ・パスやトラップのポイントを確認する。 ・パスやトラップの練習 **ゾーンゴールゲームⅠ**	**ゾーンゴールゲームⅡ** ・チーム対抗で行う ・ボールタッチ までにパスをする **ドリブル** ・ゲームの振り ・ドリブルの目的とポイントを確認する ・ドリブルの練習 **ゾーンゴールゲームⅢ** ・チーム対抗で行う ・パスやドリブルの制限はなし	**分析の仕方の説明** 狙ったところにパスを出せているか。 ドリブルなどでボールをキープできているか。 **ミニゴールサッカー** ・小さなゴールでゲーム ・チーム内で分担し、カードを用いた分析をする。 **課題把握** ・分析の確認 ・課題解決のための練習 **ミニゴールサッカー**	**ミニゴールサッカー** ・ボールを持っていない時にどのような動きをすればより楽しいゲームになるか。 パスを受けるための動き ・ゲームの振り返り パスを受けるための動き（スペースへの動き付き、サポートなど）の確認と練習。 **４ゴールサッカー** ・それぞれタッチライン上に２つずつゴールを設置したゲーム
	50	**学習の振り返り**	**学習の振り返り**	**学習の振り返り**	**学習の振り返り** ・自己評価	**学習の振り返り**
指導内容	技能		技①パスやドリブルなどでボールをキープすること。 技②マークされていない味方にパスを出すこと。			③パスを受けるためにスペースへ動くこと。
	態度	①健康・安全への留意	②フェアなプレイ			③積極的な取り組み
	知識	①特性、成り立ち、ルール、関連して高まる体力	②技術の名称や行い方			③技術の名称や行い方
	思考判断				思①自己課題把握 思②運動の行い方	
評価計画	関・意・態	①観察	②観察			③観察
	思・判				①②観察、学習カード	
	技能				①観察	
	知・理	①学習カード		②学習カード		

活動　活動　知識・技能　知識・技能　知識・技能　内容　評価

時		6	7	8	9	10
ねらい		ボールを持っていないときの動きを工夫しゲームを楽しもう		チームの課題に応じた練習を工夫しゲームを楽しもう		
		○広がったり、横に動いたり、守備の背後をついたりしながら、ボールを持っていない時に動きを工夫してゲームを楽しもう。	○チームで連携し、ゴール前のスペースへボールを運び、シュートにつなげよう。 **★攻撃面に関するチームの課題見付けよう。**	○スペースを有効に利用したり、ボールをキープしたりしながら攻撃を展開しよう。 ○分担した役割に責任をもち、練習やゲームを円滑に進めよう。 **★チームの課題に応じた練習補法を選択し、ゲームに生かそう。**		
学習の流	0	**前時の振り返り** **本時のねらい・内容の確認** **ウォーミングアップ** ・ボール操作を中心にチームで内容を考える	**前時の振り返り** **本時のねらい・内容の確認** **ウォーミングアップ** **分析の仕方の説明** ・ボールの動きの軌跡を追う ボールと人が動いているか ・シュートにつながっているか等	**前時の振り返り** **本時のねらい・内容の確認** **ウォーミングアップ** **役割分担とリーグ戦の行い方の確認**	**前時の振り返り** **本時のねらい・内容の確認** **ウォーミングアップ**	**前時の振り返り** **本時のねらい・内容の確認** **ウォーミングアップ** **役割分担とリーグ戦の行い方の確認**
	20	**4ゴールサッカー** ・ボールを持っていない時にどのような動きをすればより楽しいゲームになるか 動き方の工夫 ・ゲームの振り返り ・パスを受けるための動きの工夫（広がる、守備の背後をとる等）の確認と練習 **ハンドボールゴールゲーム** ・ハンドボールのゴールでゲームを行う	**ハンドボールゴールゲーム** チーム内で分担し、カードを用いて分析をする。 **課題把握** ・分析の確認 ・課題解決のための練習 **ハンドボールゴール**	**リーグ戦　前半** **チームの課題の確認** ・練習方法の選択の仕方 ・後半に向けて課題を確認を確認する **チーム練習** ・チームの課題に応じた練習方法を資料（副読本）から選択する。 **リーグ戦　前半**		
	50	**学習の振り返り**	**学習の振り返り** ・自己評価	**学習の振り返り** ・自己評価	**学習の振り返り** ・自己評価	**学習の振り返り** ・自己評価・テスト
指導内容	技能	③パスを受けるためにスペースへ動くこと。				
	態度			④役割分担（責任）・課題解決などの話し合いに参加すること		
	知識	③技術の名称や行い方		④ルールの確認・審判		
	思考判断		思②運動の行い方 思③チーム課題把握	④課題に応じた練習方法の選択		
評価計画	関・意・態				③観察	
	思・判		②③観察、学習カード			④観察、学習カード
	技能		③観察			①～③観察
	知・理	③学習カード		④観察		

知識・技能　学習してきたボール操作やボールを持っていないときの動き方

活動　活動　活動　活動　内容　内容　評価　評価　知識・技能

(3)　教師の効果的な働きかけによる「思考・判断」の学習活動

指導内容	時間	「思考・判断」を促す学習活動・発問	基となる技能・知識
思・判① 体の動かし方や運動に関する思考・判断	4 /10	パスやドリブルなどでボールをキープする技能を習得する（高める）ための自分自身の課題について、簡易ゲームを通して分析する。その際、その課題の内容を記入させ、「思考・判断」を促すことができるような分析カードを用いる。 ●発問 「ボールを扱う技術について、自分の課題を見付けよう！」 ボール操作に関わる技術を身に付けるためのポイントを、課題解決の練習の時間を通して見付ける。その際、それぞれの技術について、自分なりのポイントを記入させ、「思考・判断」を促すことができるような学習カードを用いる。 ●発問 「ボールを扱う技術のポイントを報告しよう！」	○技術の名称（トラップ、ドリブル、インサイドキックなど） ○技術の行い方（トラップ、ドリブル、インサイドキックなどの一般的なポイント） ○周囲を見ながらプレイすること。
思・判② 体の動かし方や運動に関する思考・判断	7 /10	より質の高いゲームを目指して簡易ゲームを分析してチームの課題を見付ける。その際、その課題の内容を記入させ、「思考・判断」を促すことができるような分析カードを用いる。 ●発問 「より楽しいゲームにするためのチームの課題を分析してみよう！」 ボールを持たないときの動き方を身に付けるためのポイントを見付ける。その際、自分なりのポイントを記入させ、「思考・判断」を促すことができるような学習カードを用いる。 ●発問 「パスを受けるためのボールを持たないときの動きを報告しよう！」	○人がいない場所（スペース）を見付けること。 ○縦に動く、横に動く、ディフェンスの背後に動く、もどる、広がるなどの動き方があること。 ○長いパスや短いパス、戻すパスなどがあること。 ※質の高いとは、人やボールがよく動き、シュートチャンスがたくさん作れる様相と捉える。
思・判③ 運動の行い方に関する思考・判断	8, 9, 10/ 10	ゲームを振り返り、チームの課題を把握し、その解決に向けた練習を選び、後半のゲームに生かす。前半の課題と練習内容のつながりが分かるような学習カードを用いる。 ●発問 「後半に向けて良いゲームができるように、チームの課題が解決できる練習方法を選んで取り組んでみよう！」	○これまで学習した、ボール操作に関わる技能やボールを持っていない時の動き方を参考に、チームの課題を分析すること。

○中学校学習指導要領に示されている例示（球技　第１学年及び第２学年）

・ボール操作やボールを持たないときの動きなどの技術を身に付けるための運動の行い方のポイントを見付けること
・自己やチームの課題を見付けること
・提供された練習方法から、自己やチームの課題に応じた練習方法を選ぶこと
・仲間と協力する場面で、分担した役割に応じた協力の仕方を見付けること
・学習した安全上の留意点を他の練習場面や試合場面に当てはめること

2　球技（ゴール型：バスケットボール）の「思考・判断」を促す学習活動の提案

(1)　「思考・判断」の基となる知識及び技能・態度

発達の段階			中学３年	
領域（内容）			球技（ゴール型）	
技能	指導内容		作戦に応じたボール操作で仲間と連携してゲームを展開すること。	中学３年生で扱う中心的な技術（実態に合わせて）
	留意事項		○ゴール前へ侵入する得失点の攻防を重視 ○自己のチームや相手チームの特徴を踏まえた作戦を立てゲーム ○安定したボール操作とボールを持たないときの動き	□ルールやコートを工夫した簡易ゲーム □オーバータイムやバックパスなし
	解説　例示	安定したボール操作	○守備者が守りにくいタイミングでシュートを打つ。 ○ゴールの枠内にシュートをコントロールする。 ○味方が操作しやすいパスを送る。 ○守備者とボールの間に自分の体を入れてボールをキープする。	□シュート（セットシュート、レイアップ） □パス（チェスト、バウンズ） □ドリブル □ピボット
		ボールを持たないときの動き	○ゴール前に空間を作りだすために、守備者を引きつけてゴールから離れる。 ○パスを出した後に次のパスを受ける動きをする。 ○ボール保持者が進行できる空間を作り出すために、進行方向から離れる。	□パス＆ラン □スペースへの飛び込み（広がる、守備者の前をとる、背後をとる等） □スクリーンプレイ
態度	指導内容		自主的な取組、フェアプレイ、自己の責任を果たす、話合いへの貢献、健康安全の確保	扱う中心的な技術との関連（実態に合わせて）
	解説	愛好的	○運動に自主的に取り組む。	□自主的な取り組み
		公正	○ルールやマナーを守る、フェアな行動を通して相手を尊重する。	□フェアプレイ
		協力	○お互いに助け合う、教え合う。 ○相互の信頼関係を深める。	□仲間への助言
		責任	○仲間と合意した役割に責任をもって自主的に取り組む。	□役割分担の責任を果たす
		参画	○課題や作戦に関する話合いに関わる。 ○意見を聞き、述べる。考えを伝え合う。	□話合いへの貢献
		健康安全	○仲間や相手の技能程度に応じた力の加減 ○体調の管理、用具の扱い方、場の安全確保 ○準備運動（けがの防止）、段階的な練習	□準備運動、力の加減、段階的な練習
知識、思考・判断	指導内容		技術の名称や行い方、体力の高め方、運動観察の方法 自己の課題に応じた取り組み方の工夫	知識、思考・判断の具体的な内容及び中学３年生で扱いたい内容（■を中心に）
	解説（知識）	成り立ち技術の名称関連して高まる体力	○技術、戦術、作戦の名称及びそれらをゲームにおいて発揮することの重要性 ○ボール操作とボールを持たない動きの大別 ○ゲームに必要な技術と体力の関連 ○自己観察や他者観察の方法 ○ルール、試合方法、審判や運営の仕方	■セットシュート、レイアップシュート、チェストパス、ドリブル等の名称及び方法 ■空間への動き方とその方法 ■速攻、スクリーンプレイ、ポストプレイ等 ■ルールや審判、試合の方法 □観察の方法とその目的 □関連する体力の種類
	解説（思考・判断）	課題に応じた運動の取り組み方の工夫	○自己のチームや相手チームの特徴を踏まえた作戦や戦術を選ぶこと ○技術的な課題や有効な練習方法の選択についての指摘 ○合意を形成するための適切な関わり方 ○体調に応じた適切な練習方法の選択 ○球技を継続して楽しむための自己に適した関わり方	■運動の行い方に関する思考・判断 ■体力や健康・安全に関する思考・判断 □運動実践につながる態度に関する思考・判断 ■生涯スポーツ設計に関する思考・判断

(2)　第３学年「バスケットボール」指導と評価の計画

時		1	2	3	4	5
ねらい		バスケットボール授業についての理解	自分のチームや相手チームの特徴に応じた作戦を工夫しゲームを楽しもう。			
		○健康、安全面でのルールや授業の進め方について理解し、今後の見通しを持とう。	○安定したボール操作を行うためのポイントを確認しよう。 ○ルールを守り、互いに認め合いながらフェアなゲームをしよう。	○スペースを作り出す動きを工夫しよう。 ○チームで連携して攻防を展開するための戦術について知ろう。	**★自分のチームの特徴や相手チームの特徴に応じた作戦や戦術を選び、ゲームを楽しもう。**	
学習の流れ	0 20 50	**オリエンテーション** ・学習の進め方 ・関連して高まる体力 ・健康、安全面でのルール ・チーム分け ・役割分担 キャプテン、コーチ、用具、マネージャーなど **試しのゲーム** →オフィシャルに近いルールでのゲーム **学習の振り返り** ・カード記入	**前時の振り返り** **本時のねらい・内容の確認** **ウォーミングアップ** **３on３のチーム内ゲーム** ・ゲームの進め方、留意点 ・ハーフコート３対３で行う **課題把握** ・ゲームの振り返り ・既習内容であるボール操作に関わる技術の名称とポイントを確認する ・課題解決のための練習を選んで行う。 **ゾーンゴールゲームⅠ** **学習の振り返り**	**前時の振り返り** **本時のねらい・内容の確認** **ウォーミングアップ** **ドリブル２回ＯＫゲーム** ・チーム対抗で行う。 ・ドリブル２回までＯＫ **戦術の紹介と練習** ・ゲームの振り返り ・パス＆ラン ・速攻 ・スクリーンプレイ ・ポストプレイ　など **ドリブル２回ＯＫゲーム** ・作戦を立てゲームに臨む **学習の振り返り**	**前時の振り返り** **本時のねらい・内容の確認** **ウォーミングアップ** **作戦についての話し合い** ・紹介している戦術を確認する。 ・自分のチームの特徴や本時の対戦相手の特徴を考え、作戦を立てる。（カード記入） **ゲーム（前半）** ・自己観察や他者観察のポイントについて説明する。 ・オフィシャルルールに近い形でのゲーム **作戦の振り返りと練習** ・作戦の振り返り ・課題解決のための練習 ・後半に向けての作戦の確認（カード記入） **ゲーム（後半）** **学習の振り返り** ・作戦の振り返り（カード記入）	
指導内容	技能		①シュート、パスに関する安定したボール操作	②スペースを作り出す動き、ゴール前の空いている場所をカバーすること		
	態度	①健康・安全への留意	②フェアなプレイ		③話し合いなどへの貢献	
	知識	①ルール、関連して高まる体力	②技術の名称や行い方・知③運動観察の方法			
	思考判断		~~思①チームの特徴に応じた作戦や戦術の選択~~		思①チームの特徴に応じた作戦や戦術の選択	
評価計画	関・意・態	①観察	②観察		③観察	
	思・判				①観察、学習カード	
	技能					
	知・理	①学習カード		②学習カード		③観察、学習カード

知識・技能　知識・技能　活動　活動　内容　評価

時	6	7	8	9	10
ねらい	バスケットボール大会を企画・運営しよう				
	○チームでアイディアを出し合い、バスケットボール大会の企画書を作成しよう。	○自分の責任を果たし、自主的にバスケットボール大会に取り組もう。 ○バスケットボール大会を楽しむために、自分に適したかかわり方を見付けよう。 ○これまでの学習（ボール操作、スペースを作り出す動き、作戦の工夫など）を生かしゲームを楽しもう。			
		知識・技能　基となる知識・技能はこれまでの学習内容			
学習の流れ 0	**オリエンテーション** ・趣旨、ねらいの説明 **運動やスポーツの学び方** １年次「体育理論」の簡単な復習 基本的なルールの確認 ・計画の立て方のポイント ・話し合いのポイント **企画書の作成** ・個人で企画書案を作成する。 ・個人で作成した案をもとにキャプテンを中心に話し合いを進め、チームで企画書を完成させる。 ・「全員が楽しめる」をコンセプトに考える。 ・作成した企画書をもとにチームごとに全体に簡単なプレゼンを行い、最も多く賛同を得られたチームの企画書を選ぶ。 **学習の振り返り**	活動　**ウォーミングアップタイム** ●健康や安全に関する留意事項を考え、自分たちで必要なことを行う。 活動　**チーム練習タイム** ●これまでの学習内容を活用し、チームで練習計画を立てて取り組む。 活動　**バスケットボール大会** ●前時に選ばれた企画書に則り実施する。 ●役割分担の確認 活動　**学習の振り返り** ●大会運営や自分のチームにおける役割とその実施状況を振り返る。 活動　**学習の振り返り** ・どんな関わり方をしてどう感じたか。			
20					
50					
指導内容 技能		①安定したボール操作 ②スペースを作り出す動き、ゴール前の空いている場所をカバーすること。			
態度		④健康・安全への留意	⑤自己の責任を果たすこと		
知識	①～③ （知：体育理論の内容）				
思考判断	思②合意を形成するための適切な関わり方		③自己に適したかかわり方		
評価計画 関・意・態		④観察・カード	⑤観察・カード		
思・判	③企画書・観察				③観察、学習カード
技能			①観察	②観察	
知・理	④企画書				

(3)　教師の効果的な働きかけによる「思考・判断」の学習活動

指導内容	時間	「思考・判断」を促す学習活動・発問	基となる技能・知識
思・判① 運動の行い方に関する思考・判断	4、5/10	チームの特徴に応じた作戦や戦術を選択する。その際、あらかじめいくつかの戦術を紹介しておき、その中から、作戦を成功させるための戦術を決定できるようにする。また、作戦の振り返り、修正等の確認ができるような学習カードを用いる。 ●発問 「自分のチームや相手チームの特徴に応じた作戦を選び、それを実行してみてみよう。」	○技術の名称（セットシュート、レイアップシュート、チェストパス、バウンドパス、サイドプッシュパス、ドリブルなど） ○戦術（パス＆ラン、速攻、スクリーンプレイ、ポストプレイなど） ○技術の行い方（技術や戦術のポイント）
思・判② 態度に関する思考・判断	6/10	既習内容である「体育理論」の内容やこれまでのバスケットボールの学習内容をもとに、自分たちでバスケットボール大会を企画する。「全員が楽しむことができる」ことを条件に、個人で作成した企画書（案）を基に、チームで話合い活動を行い、そこからチームで一つの企画書を提案する。その後、それぞれのチームがプレゼンテーションを行い、 最も賛同の多かった企画書に則り実施する。 ●発問 「ルールや試合形式、役割分担を工夫し、全員が楽しめるバスケットボール大会を企画しよう。」	○バスケットボールの基本的なルール、特性 ○１年次既習事項「体育理論」（運動やスポーツの多様なかかわり方、運動やスポーツの学び方） ・見る、行う、支えるなどかかわり方があること。 ・目標や計画を目的に合わせて立てること。 ・よい動き方を見付けること。 ・確かめる（振り返る）こと。 ・合意を形成すること。
思・判③ 生涯スポーツの設計に関する思考・判断	9,10/10	バスケットボール大会の運営や参加を通して、運営における役割とチーム内の役割分担にしたがった参加の仕方を振り返らせる。その際、今後継続して球技を楽しむための個に応じた関わり方を見付けることができるような学習カードを用いる。 ●発問 「バスケットボール大会の運営における役割とチームにおける役割を振り返り、大会を通して学んだことや今後に生かしたいことを報告しよう。」	○これまでの学習内容 ○与えられた責任を果たすこと。 ○積極的に取り組むこと。

○中学校学習指導要領に示されている例示（球技　第３学年）

・提供された作戦や戦術から自己のチームや相手チームの特徴を踏まえた作戦や戦術を選ぶこと
・仲間に対して、技術的な課題や有効な練習方法の選択について指摘すること
・作戦や話合いの場面で、合意を形成するための適切な関わり方を見付けること
・健康や安全を確保するために、体調に応じて適切な練習方法を選ぶこと
・球技を継続して楽しむための自己に適した関わり方を見付けること

３　体つくり運動の「思考・判断」を促す学習活動の提案

(1)　「思考・判断」の基となる知識

体つくり運動で扱う知識	①体の動かし方や運動の行い方に関する知識	②体力や健康・安全に関する知識	③運動実践につながる態度に関する知識	④生涯スポーツの設計に関する知識
・自他の心と体に向き合って心と体をほぐし、体を動かす楽しさや心地よさを味わい、進んで運動に取り組む気持ちを高めたり、体の柔らかさ、巧みな動き、力強い動き、動きを持続する能力を高めたりするといった意義があること。（体つくり運動の意義）	○			
・「体ほぐしの運動」においては、「心と体の関係に気付く」、「体の調子を整える」、「仲間と交流する」といったねらいに応じた行い方があること。 ・一つの行い方においても、複数のねらいが関連していること。（体ほぐしの運動の行い方）	○			
・体の柔らかさ・巧みな動き・力強い動き・動きを持続する能力などを、それぞれ安全で合理的に高めることのできる適切な運動の行い方があること。 ・ねらいや体力の程度に応じて、適切な強度、時間、反復回数、頻度などで組み合わせることが大切であること。（体力を高める運動の行い方）	○			
・自己の健康や体力の状態に応じて、体の柔らかさ、巧みな動き、力強い動き、動きを持続する能力をそれぞれ効率よく高めることができる組み合わせ方やこれらの能力をバランスよく高めることができる組み合わせ方があること。（運動の計画の立て方）	○			
・関節には可動範囲があること、同じ運動をしすぎると関節に負担がかかること、関節に大きな負荷がかからない姿勢があること、体温が上がると筋肉は伸展しやすくなること。（体の構造、３年）	○			
・どのようなねらいをもつ運動か、偏りがないか、自分に合っているか、どの程度の回数を反復するか、どの程度の期間にわたって継続するかなどの運動を計画して行う際の原則を理解すること。（運動の原則、３年）	○			
・体調不良時は無理をしないこと		○		
・用具の使い方のポイント		○		
・運動に応じて起きやすいけがの事例		○		
・用具の使用における修正や確認，運動開始時における体の状態の確認や調整，けがを防止するための留意点（健康・安全を確保する態度、３年）		○	○	
・分担した役割を果たすことは、 体つくり運動の授業を円滑に進めることにつながることや、さらには、 社会生活を過ごす上で必要な責任感を育てることにつながること。（責任）			○	
・仲間の学習を援助することは、 仲間との連帯感を高めて気持ちよく活動することにつながること。（協力）			○	
・各関節の可動範囲や筋力には個人差があること、仲間の体力に合わせて力の強さやタイミングの合わせ方を調整することなどが大切であること（体力の違いに配慮しようとする態度＝公正、３年）		○	○	
・自己の責任を果たすことは，活動時間の確保につながること，グループの人間関係がよくなることや自主的な学習が成立すること。（責任、３年）			○	
・互いに助け合い教え合うことは，安全を確保したり，課題の解決に役立つなど自主的な学習を行いやすくしたりすること。（協力、３年）			○	
・定期的・計画的に運動を続けることは、心や体の健康や体力の保持増進につながること。 ・豊かなスポーツライフの実現は、地域などとのコミュニケーションを広げたり、余暇を充実させたりするなど生活の質を高めることにもつながること。 （運動を継続する意義、３年）				○

(2)　第１学年「体つくり運動」指導と評価の計画

時		1	2	3	4
ねらい		いろいろな運動を試してみよう ○体つくり運動について理解しよう。 ○体ほぐしの運動に挑戦しよう。 ○健康・安全に気を付けて取り組もう。	○体ほぐし（仲間と動きを合わせたり、対応したりする運動）に挑戦しよう。 ○体力を高める運動（柔らかさを高める）に挑戦しよう。 ○積極的に取り組もう。	○体ほぐし（リズムに乗って心が弾む運動）に挑戦しよう ○体力（巧みさ）を高める運動に挑戦しよう。 ○役割分担をして活動しよう。	○体ほぐし（ｽﾄﾚｯﾁﾝｸﾞ、緊張を解いて脱力する運動）に挑戦しよう ○体力（力強さ）を高める運動に挑戦しよう。 **★仲間にアドバイスをしてみよう。**
学習の流れ	0	本時のねらい 内容確認 ・オリエンテーション ・体ほぐしの運動	前時の振り返り 本時のねらい 内容確認 ・体ほぐしの運動 ・体力を高める運動 ・態度（積極的に取り組むこと）	前時の振り返り 本時のねらい 内容確認 ・体ほぐしの運動 ・体力を高める運動 ・態度（役割分担）	前時の振り返り 本時のねらい 内容確認 ・体ほぐしの運動 ・体力を高める運動 **★思（合理的な運動方）**
	20	オリエンテーション ・体つくり運動ってどんな運動？（話合い） ・体つくり運動のねらいとは ・体つくり運動を通して学ぶことは（ほぐしでは…、高めるでは…、態度の内容、知識の内容） 体ほぐしの運動 ・ペアストレッチ ・ケンケン相撲 ・ものまねランニング ・運動の振り返り	体ほぐしの運動 （仲間と動きを合わせたり、対応したり） ・ペアで手をつなぎ立つ・座る ・ペアで背中合わせて立つ・座る ・運動の振り返り 体力を高める運動（柔らかさ） ・体力を高める運動とは（４要素） ・柔らかさを高める運動とは？（柔らかさとは、高まるとどうなるか、運動のポイント） ・高めたい部位（全身、背・腹、腕・肩、脚）を選び、運動例を選んで実施 ・運動の振り返り	体ほぐしの運動 （リズムに乗って心が弾むような） ・簡単なリズムダンス　or　ハイタッチランニング ・運動の振り返り 体力を高める運動（巧みさ） ・巧みな動きを高める運動とは（巧みさとは、高まるとどうなるか、運動のポイント） ・高めたい要素（ﾊﾞﾗﾝｽよく、ﾀｲﾐﾝｸﾞよく、力を調整して素早く、ﾘｽﾞﾐｶﾙに）を選び、運動例を選んで実施 ・運動の振り返り	体ほぐしの運動 （ｽﾄﾚｯﾁ、緊張を解いて脱力する） ・ペアストレッチ　or　ひと運び ・運動の振り返り 体力を高める運動（力強さ） ・力強い動きを高める運動とは（力強さとは、高まるとどうなるか、**運動のポイント**） ・高めたい部位（全身、背・腹、腕・肩、脚）を選び、運動例を選んで実施 **★筋力に合った運動例を選択できているかアドバイスし合う。（カード記入）**
	50	学習の振り返り ・自己評価 ・テスト（健康・安全、体つくり運動の意義）	学習の振り返り ・自己評価 ・テスト（積極的な取り組み、体つくり運動の行い方）	学習の振り返り ・自己評価 ・テスト（役割分担）	
指導内容	運動	体ほぐしの運動	体力を高める運動（柔らかさ）	体力を高める運動（巧みさ）	体力を高める運動（力強さ）
	態度	態①健康・安全への留意	態②積極的な取り組み	態③分担した役割（責任）	
	知識	知①体つくり運動の意義	知②体つくり運動の行い方、柔らかさを高める運動について	知②巧みな動きを高める運動について	知②力強い動きを高める運動について
	思考判断				**思①合理的な運動の行い方**
評価計画	関・意・態			①観察	②観察
	思・判				**カード**
	知・理	①テスト	②テスト		

知識　活動　内容　評価

時		5	6	7	第２学年へ
ねらい		いろいろな運動を試してみよう ○体ほぐし（いろいろな条件で行う運動）に挑戦しよう ○体力（動きの持続）を高める運動に挑戦しよう。 **★活動に応じて健康・安全に気を付けよう。**	いろいろな運動を組み合わせてみよう ○体ほぐし（用具を用いた運動）に挑戦しよう ○体力を高める運動（**運動を組み合わせる**運動計画）に挑戦しよう。	○体力を高める運動（**運動を組み合わせる**運動計画）に挑戦しよう。 ○単元の振り返りをしよう。	【第１学年の内容の振り返り】 ○体ほぐしの運動 ○体力を高める運動 【第２学年の内容】 ○体力を高める運動（効率のよい組合せ方のポイント・運動計画） ○体力を高める運動（運動計画の修整） ○態度（仲間の学習への援助） ○思考・判断（課題に応じた活動の選び方、役割に応じた活動の仕方）
学習の流れ	0 知識 活動 活動 50	前時の振り返り 本時のねらい 内容確認 ・体ほぐしの運動 ・体力を高める運動 **★思（健康・安全）** **・態度（健康・安全）振り返り** 体ほぐしの運動 （いろいろな条件で歩いたり、走ったり、跳んだり） **・長縄とび走り抜け・跳び or 二人三脚** ・運動の振り返り 体力を高める運動 （動きを持続する能力） ・持続する能力を高める運動とは（持続する能力とは、高まるとどうなるか、運動のポイント） **・自分の体力に合った運動例（ﾚﾍﾞﾙ）を選んで実施** ・運動の振り返り 学習の振り返り ・自己評価 **★テスト（健康・安全のﾎﾟｲﾝﾄ、**体力を高める運動のﾎﾟｲﾝﾄ） **★健康・安全の留意事項（カード記入）**	前時の振り返り 本時のねらい 内容確認 ・体ほぐしの運動 ・体力を高める運動 **★思（組み合わせ方）** 体ほぐしの運動 （用具を使って） ・リングくぐり or 長縄跳び走り抜け・８の字 ・運動の振り返り 体力を高める運動 （組み合わせ方） ・運動の組み合わせ方（効率のよい組み合わせ、バランスのよい組み合わせ、**バランスよい組み合せ方のﾎﾟｲﾝﾄ**） （ﾊﾞﾗﾝｽのよい組合せ方①） ・サンプルを１つ選び、自分に合った10分の**運動計画を立案する。** **（★カード記入）** ・計画した運動を実施 ・運動の振り返り 学習の振り返り ・自己評価 **★テスト（組み合わせ方**、計画の立て方）	前時の振り返り 本時のねらい 内容確認 ・体力を高める運動 **★思（組み合わせ方）** ・体つくり運動テスト 体力を高める運動 （組み合わせ方） ・運動の組み合わせ方（効率のよい組み合わせ、バランスのよい組み合わせ、**バランスよい組み合せ方のﾎﾟｲﾝﾄ**） **（ﾊﾞﾗﾝｽよい組合せ方①）** ・サンプルを１つ選び、自分に合った10分の**運動計画を立案する。** **（★カード記入）** ・計画した運動を実施 ・運動の振り返り 体つくり運動テスト ・体つくり運動の意義 ・体ほぐしの運動のねらい ・体力を高める運動のねらいと４要素 ・運動の組み合わせ方、計画の立て方 学習の振り返り ・自己評価 ・成果の確認	
指導内容	運動	体力を高める運動 （持続する能力）			
	態度				
	知識	②持続する能力を高める運動について	③組み合わせ方のﾎﾟｲﾝﾄ、計画の立て方	③組み合わせ方のﾎﾟｲﾝﾄ、計画の立て方	
	思判断	**②健康・安全への留意点**	**③運動の組み合わせ方**	**③運動の組み合わせ方**	
評価計画	関・意・態	③観察		①　③観察	
	思	**②テスト、カード**	**③カード、テスト**	**③カード、テスト**	
	知・理	②テスト	③テスト	①　③テスト	

(3)　教師の効果的な働きかけによる「思考・判断」の学習活動

指導内容	時間	「思考・判断」を促す学習活動、発問	基となる知識
思・判① 運動の行い方に関する思考・判断	4 / 7	【体力を高める運動（力強い動き）】 筋力に合った運動例を選択できているかペアでアドバイスし合う。その際、お互いのアドバイスの内容を記入させ、「思考・判断」を促すことができるような学習カードを用いる。 ●発問 「自分の筋力に合った運動例を選んでいるかアドバイスし合おう！」 ●声がけ例 「競争じゃないよ。重過ぎず、軽過ぎず。」 「それはどこの筋肉を使っているかな？」 「回数を変えたり、行い方を工夫したりしてみると、負荷が変わるよ。」	○軽いものから始めて、徐々に重たいものにしていくこと。 ○自分に合った重さや回数をみつけていくこと。 ○正しい行い方と部位の意識（ポイント） ○休息を入れながら行うこと。 ○仲間と競い合うものではないこと。
思・判② 体力や健康・安全に関する思考・判断	5 / 7	【体ほぐしの運動】 【体力を高める運動（持続する能力）】 それぞれの活動に応じてそれぞれに健康・安全に気を付ける。その際、活動メモとまとめを記入させ、「思考・判断」を促すことができるような学習カードを用いる。 ●発問 「それぞれの活動に合わせて、健康・安全面にどのように気を付けたか、報告せよ！」 ●声がけ例 「無理に運動してないかな？」 「周囲の安全は大丈夫そう？」 「ペアの健康・安全は確保されているかな？」	○健康・安全に心がけること。 ○自分の心や体の状態を確かめること。 ○無理をせず運動をすること。 ○体調が万全ではない時は、運動量を減らしたり、休憩を多くとるようにしたりすること。 ○用具などを正しく使うこと。 ○用具などを放置しないこと。 ○運動する仲間の安全にも気を配ること。
思・判③ 生涯スポーツの設計に関する「思考・判断」	6 , 7 / 7	【体力を高める運動（バランスのよい組み合わせ方）】 運動計画を立てる際に、バランスのよく運動を組み合わせる。その際、自分が組み合わせた運動が分かるよう、学習カード（資料３）に記入させ、「思考・判断」を促す。 ●発問 「バランスのよい運動の組み合わせ方で自分に合った運動プログラムを作成せよ。」 ●声がけ例 「バランスよい、って何のバランスが大事なんだっけ？」 「自分に合っているかも確認しながらね。」 「今までやったことのある運動を参考に組み合わせてみよう。」	○４つの高めたい運動（柔らかさ、巧みさ、力強さ、持続する能力）をバランスよく組み合わせること。 ○これまでの運動履歴を参考に、自分に合った量、回数、重さ、順番で組み合わせること。

○中学校学習指導要領に示されている例示（体つくり運動　第１学年及び第２学年）

・体ほぐしのねらいである「心と体の関係に気付く」、「体の調子を整える」、「仲間と交流する」ことを踏まえて、課題に応じた活動を選ぶこと
・関節や筋肉の働きに合った合理的な運動の行い方を選ぶこと
・ねらいや体力に応じて効率よく高める運動例やバランスよく高める運動例の組み合わせ方を見付けること
・仲間と協力する場面で、分担した役割に応じた活動の仕方を見付けること
・仲間と学習する場面で、学習した安全上の留意点を当てはめること

4　武道（柔道）の「思考・判断」を促す学習活動の提案

(1)　教師の効果的な働きかけによる「思考・判断」の学習活動

指導内容	評価時間	「思考・判断」を促す学習活動・発問	基となる技能・知識
思・判① 受け身に関する思考・判断	4/10	柔道を行う上で一番大切な、「安全に」取り組むことができるよう、基本的な動きとして受け身を身に付けさせる。その際、二人組や三人組で取り組ませ、受け身のポイントを確認させる。取り組んだ内容については、学習カードを用いて思考判断を促し、技能の定着を図る。 ●発問 「安全な受け身ができているか、互いに見合いながら確認しよう！」	○受け身の名称（後ろ受け身、横受け身、前回り受け身など） ○技術の行い方（視線の方向、畳を打つ腕の位置、畳を打つタイミングなど） ○安全に対する留意点（後頭部を打たないようにする、受け身動作の際、腰の位置を徐々に高くするなど）
思・判② 抑え込みに関する思考・判断	6/10	毎時間ウォーミングアップの際に「しぼり、えび、逆えび」を行い、固め技を行う際の動きが自然にできるよう動きに慣れさせておく。 抑え込みに入る際は、相手と密着し、脇を強く締めることを意識する。 ●発問 「抑え込みの条件を満たすように、相手を押さえ込んでみよう」 押さえ込まれた状態から逃げるときは、えびや逆えびを活用し、すき間を作り出し、体をよじったり相手を返したりする。 ●発問 「押さえ込まれた状態から、えびや逆えびを使って逃げてみよう」	○抑え込みの条件 ①相手がだいたいあお向けである ②自分は相手の上で概ね向かい合った形になっている ③相手から束縛を受けていない（脚、胴体を相手から制されていない） ○抑え込みのポイント ウォーミングアップで行う「しぼり」を意識し、脇をしっかりと締め相手と密着する。 ○抑え込みからの逃げ方 ウォーミングアップで行う「えび、逆えび」を活用し、押さえ込まれた状態からすき間をつくり逃げる。
思・判③ 崩しに関する思考・判断	8,10/10	崩しでは、右自然体から釣り手と引き手を用い、受けを技がかけやすい状態にするための体さばきの仕方を身に付ける。 同時に、これまでの学習を生かして技の応用を考える。 ●発問 「崩す方向は今まで学習した技はどれも同じ。どうやってそこに持って行くか考えよう！」	○これまでの学習内容を踏まえ、技の発展をさせる。 ○釣り手と引き手の役割の解説を行い、崩し方をイメージしやすくさせる。 ○引き手は命綱であることを再確認し、安全に学習に取り組ませる。

○中学校学習指導要領に示されている例示（武道　第１学年及び第２学年）

・技を身に付けるための運動の行い方のポイントを見付けること
・課題に応じた練習方法を選ぶこと
・仲間と協力する場面で、分担した役割に応じた協力の仕方を見付けること
・学習した安全上の留意点を他の練習場面に当てはめること

(2) 第１学年「柔道」指導と評価の計画

時		1	2	3	4
ねらい		柔道についての理解		基本を身に付ける	
学習の流れ	0	オリエンテーション 学習の進め方を知る ①特性や成り立ち ②柔道の授業におけるルール ③柔道衣の着方、帯の締め方 後ろ受け身 ・長座姿勢から蹲踞姿勢に 学習の振り返り	後ろ受け身 横受け身 しぼり、えび、逆えび けさ固め ３人組で取りと受けを決め、抑え込みの条件、抑え方・応じ方を学習する。 学習の振り返り	後ろ受け身 横受け身 しぼり、えび、逆えび けさ固め 横四方固め ３人組で確認 学習の振り返り	後ろ受け身 横受け身 しぼり、えび、逆えび 固め技による攻防 ・長座姿勢から右組の状態から相手を倒し、固め技による攻防を行う。 ３人組で実施し、１人は審判となり確認 学習の振り返り
	50				
指導内容	技能	①受け身 ・後ろ受け身	②固め技 ・けさ固め ①受け身 ・横受け身	②固め技 ・横四方固め	
		基本動作と受け身、正しい姿勢			
					固め技による攻防
	態度	①積極的な取り組み態②伝統的な行動の仕方③健康・安全への留意			
		学習の援助		分担した役割（責任）	
	知識	①特性、成り立ち、伝統的な考え方、関連して高まる体力	②抑え込みの条件	・抑え込みのポイント確認	①審判の役割
	思考判断	①安全な受け身の取り方	・課題に応じた練習方法 ①安全な受け身の取り方	・協力の仕方 ・返されない抑え込みの方法	②相手を抑えるために必要な動き方 抑え込みの返し方
評価計画	関・意・態		①観察		
	思・判				①カード・観察
	技能			①観察	
	知・理	①テスト			②観察

後ろ受け身では、蹲踞の姿勢から２人組で押し合いをして後ろに倒れ、受け身をとる練習を行う。

知識・技能

知識・技能

活動

活動

内容

内容

評価

時		5	6	7	8	9	10
ねらい		学習した内容を活用し、組み合わせていく					学習を振り返る
学習の流れ	0	後ろ受け身 横受け身 しぼり、えび、逆えび 固め技の対戦					
	20	立膝の受け身 ・組んだ状態から投げられて、受け身をとる練習を行う。 ・釣り手と引き手の役割の確認	支え釣り込み足 ・崩し方 ・崩され方 ・立った状態からの受け身 ・釣り手と引き手の使い方 ・足さばき	支え釣り込み足 ・立った状態からの受け身	膝車 支え系の技の練習 ・立った状態から ・動きのある中での技の出し方	体落とし ・後ろさばき	大腰 ・前回りさばき
	50	学習の振り返り	学習の振り返り	学習の振り返り	学習の振り返り	学習の振り返り	学習の振り返り
指導内容	技能	動きの中でかける技と受け身	③投げ技 ・支え釣り込み足	③投げ技 ・支え釣り込み足	投げ技 ・膝車	投げ技 ・体落とし	投げ技 ・大腰
		基本動作と受け身、正しい姿勢、体さばきと関連した技					
		固め技による攻防					
	態度	①積極的な取り組み態②伝統的な行動の仕方③健康・安全への留意					
		学習の援助	分担した役割（責任）				
	知識	③崩し方	③引き手、釣り手の使い方	③体さばき	④技の判定の仕方		
	思考判断				③支え系の技の応用		
評価計画	関・意・態	②観察		③観察			
	思・判		②カード・観察		③カード		②観察
	技能			②観察		③観察	
	知・理				③観察・カード		④テスト

活動　知識・技能　活動　内容　評価　評価

Ⅳ　研究のまとめ

1　研究の成果

（1）「思考・判断」に注目した指導と評価の計画

これまで「技能」習得に偏りがちであった授業づくりの視点を変え、「思考・判断」を促す学習活動を意図的・計画的に設定した。さらに、基礎的・基本的な「知識」や「技能」との関連性を明確にした指導と評価の計画を作成し、第１学年「体つくり運動」、第１学年「武道（柔道）」、第２学年「球技・ゴール型（バスケットボール）」、第３学年「球技・ゴール型（サッカー）」において単元を進めた。

その結果、それぞれの単元において学習成果の深まりが見られた。例えば、第１学年「柔道」では受け身動作を行う際のポイントを基にした練習時の確認作業（思考・判断）を通して、実際に組みながら受け身を取るという次段階の練習時に、その必要性を理解させやすくなった（理解の深まり）。また、理解が深まったことにより、例年に比べて受け身の上達度が上がった（技能の深まり）。また、第２学年「サッカー」では、ゲーム分析の中でボールを持たない時の動き方のポイントを基に、「なぜ、この時シュートにつながる攻撃ができたのか。」を振り返り（思考・判断）、チーム練習に反映させた。その後のゲームでは、状況に応じてディフェンスの背後をとったり、サイドに広がったり戻ったりする動きが多く見られた（技能習得）。これは、比較的運動が苦手な生徒に顕著に見られ、直感的に動いていた生徒もその意味を理解し（理解の深まり）明確な意図をもって動くことができるようになった。それにより、ゲーム展開がダイナミックとなり、ゲームパフォーマンスの向上が見られるようになった。（技能の深まり）。第３学年「バスケットボール」での「思考・判断」は、生涯スポーツの設計に関する内容を主とし、大会イベントを企画・運営する学習活動を設定した。その中で、既習内容を基に安全面に関して気を付ける点を指摘し合ったり、態度面に関して話し合いながらルールを柔軟に工夫したり、技能面に関してお互いにアドバイスし合ったりする様相が多く見られた。３年間のまとめとして行ったこのような学習活動においても、生涯スポーツの実践に向けて「思考・判断」が大きく貢献する可能性を感じることができた。

一方、「技能」を取り扱わない「体つくり運動」では、１時間毎の授業の効果を判断する手法で、９つの質問項目からなる「形成的授業評価」を行った。その結果、「成果」、「意欲・関心」、「学び方」、「協力」の全ての次元において高値を示した。生徒の視点からも学習成果があり満足度の高い授業であったことが分かった。

「思考・判断」する活動は、表面的には体の動きが停滞しているように見えることが多く、子供たちが楽しさを味わっているか判断が難しい部分である。しかし、上記のような授業者の観察や量的な評価から、「思考・判断」は、「知識」や「技能」、さらには「態度」において学習成果の深化に寄与していることがうかがえる。したがって、「思考力・判断力」の育成は、結果として運動の楽しさや運動への意欲・運動の継続を、そしてより効果的で永続的な体力向上につながる可能性があると考える。

（2）教師及び生徒の関係性

学習内容をより確かに身に付けさせるための重要な要素である、教師の効果的な働きかけや生徒同士の関係性については、次のとおりであった。

ア　教師の働きかけ（教師と生徒との関係性）

学習のねらいや課題提示をする際には、「思考・判断」を促すような発問に心掛けた。これまでの学習過程を振り返りながら、身に付けた「知識」や「技能」を基に、これからの学習活動への見通しをもたせた上で展開した。その結果、明確な課題意識をもって学習活動に取り組む生徒の様子が観察できた。また、学習活動が思うように進まないグループや支援の必要な生徒には、気付きを促すスモールステップ（段階的）指導を行うことができた。そして、行動観察する授業者にとってもねらいに即した的確な声がけ（フィードバック）をすることができた。「技能」を扱わない「体つくり運動」では、学習カード上に自分の「思考・判断」を記録として残す活動を取り入れ、その取組に対する教師のフィードバックも設定した。生徒は、自分の学習成果が明確に分かることで、学習の取組に対する自己評価も容易になり、次の学習への動機付けにもつながったと考える。さらに、学習カード上の教師のフィードバックから、つまずきの部分が明らかになったことにより、それを踏まえてポイントを絞った助言をすることができた。つまずきへの支援は、ＩＣＴ機器やピクチャーカード、掲示物、板書などを活用することにより、ねらいの再確認、学習内容や学習活動（運動）の視覚化、ねらいに即した学習の振り返りなどが可能になった。これらのような教師から生徒への有効な働きかけにより、学習内容をより確かに身に付けさせることができたと振り返る。

イ　生徒同士の関係性

基本となる学習形態を設定し、学習場面によって変更した。そして、「思考・判断」の学習内容に応じて「互いの動きを見合う。」、「アドバイスし合う。」、「役割を分担する。」といった協力する場面を適宜設定した。このような生徒同士の相互作用により、学ぶことへの楽しさが生じ、学習内容をより確かに身に付けさせることができると感じた。さらには、社会性の育成にも貢献できると期待できた。このことについても、結果として運動の楽しさや生涯にわたる運動への意欲・運動の継続につながるものと考える。

２　今後の課題

今回の研究で取り上げた単元は、第１学年「体つくり運動」・「武道（柔道）」、第２学年及び第３学年「球技・ゴール型（バスケットボール、サッカー）」であった。しかし、同一学習者における他領域でも同様の成果があるか、あるいは同一領域における他の学習者でも同様の成果があるかについては明らかにはなっていない。また、同一学習者において第１学年から第３学年までの経過に即してどのような成果が見られるのかも重要な視点である。したがって、今後は横断的かつ縦断的な研究を進め、総合的に成果を検証する必要があると考える。

併せて、「思考・判断」だけではなく「技能」や体力向上に向けての効果的な指導方法を引き続き研究していく必要があることは言うまでもない。例えば、昨年度の委員会で５つの運動特性に分類した「補強運動として効果的な運動例」を、効果的に単元計画に位置付ける研究を進めることも有効であると考える。いずれにしても、生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現に向けた体力の向上を図るために、指導内容をバランスよく相互に連動させるための研究開発を進めていくことが大きな課題である。

平成 26 年度　研究開発委員会　委員名簿

＜中学校保健体育研究開発委員会＞

	学　校　名	職名	氏　名
委員長	江戸川区立南葛西中学校	校　　長	大友　照典
委員	港区立高松中学校	主任教諭	竹内　俊輔
委員	墨田区立竪川中学校	主任教諭	木原　慎介
委員	練馬区立上石神井中学校	主任教諭	土屋　太志

〔担当〕東京都教育庁指導部指導企画課　統括指導主事　松岡　弘悟

＜中学校道徳研究開発委員会＞

研究主題・副主題

人間としての生き方についての自覚を深める道徳の時間の在り方

～語り合い、話し合うことで道徳的価値の自覚を深める指導方法の開発～

研究の概要

道徳の時間の目的は、教育活動全体を通じて行う道徳教育の要として、生徒自らが望ましい生き方について学び、内面的資質を高めることである。生徒は、自らの生き方について、考え、葛藤や内省を繰り返しつつ、道徳的価値を自分のこととして深めることが、道徳の時間には重要である。

そこで本研究では、生徒が授業での話合い活動を通して、多様な価値観に触れ、新たな見方や考え方から学ぶために、話合い活動の活用について工夫・研究した。

読み物資料や教材を通して、主人公の心情や判断を辿るとともに、生徒が自分の言葉で表現し、語り合い、話し合う活動によって、生徒は、他者の意見に耳を傾け、自他の見方・考え方との相違や共通点を見いだし、道徳的価値の内面化を図ることができる。自分を見つめ直す機会があることは、道徳の時間への手ごたえと楽しさを感じる要因ともなり得る。

道徳の時間の話合いについて本研究を通して見直し、生徒が人間としての生き方について自覚を深めるために、少人数での語り合いと学級全体での話合いの方法と在り方について検証授業を行い、効果的な学習指導の過程について研究開発することとした。

Ⅰ　研究の目的

生徒が人間としての生き方についての自覚を深め、道徳的価値を自分のこととして学ぶ話合い活動を効果的に取り入れた学習指導過程について研究開発した。

授業研究では読み物資料や格言などを効果的に提示し、人間としての生き方について、生徒同士が話し合うことに重点を置いた。少人数の語り合いや学級全体での話合いを通して、自分の言葉で表現したり他者の思いに触れたりすることで、道徳の時間のねらいに迫り、人間としての生き方についての自覚を深めたい。

Ⅱ　研究仮説

本研究で取り上げる語り合い、話合いは、生徒が少人数や学級全体での意見の交換をすることを定義した。生徒は、お互いの見方・考え方の相違点や共通点、共感や疑問について確認し、自己の思いを再構成する機会を経て、道徳的価値の自覚を深めることができる。

そこで、より多くの見方・考え方に触れるために、少人数のグループで生徒により思いや考えを交換する。学級全体での話合いでは、より多くの生徒に自分の思いや意見を伝え、聴く機会となる。

学級活動等で行う話合いでは、意見を１つにまとめ、問題解決することが多い。一方、道徳の時間に行う、少人数の語り合い、学級での話合いは、生徒が互いに人間としての生き方についての自覚を深めるために資するものでなくてはならない。より多くの見方・考え方が交換されることで、道徳的価値に関わる自分の考えを深め、広げ、自分のこととしてとらえ

ることが可能であると考え、授業を構想する。

(1)　道徳の授業のねらいに近づくための語り合い、話合い

話合いによって、生徒が、他者との違いに気付く、他者の意見に寄り添う、接点を見出す、共通点を見出すことができる。その上で、自己の見方・考え方を深め、発展させ、自分のこととして内面化する等の効果を期待できる。特に少人数の語り合いでは、通常の生活班や座席を利用して、少人数のグループを作り仲間の発言に心を寄せ、傾聴し、認め、その言葉に自分の考えや思いを重ねる等、心を開いた語り合いが可能である。また、少人数のグループでは仲間への助言や質問等の生徒間の学びも無理なくできる。

学級全体での話合いは、生徒がより一層広い視野をもち、深めることができるものと考える。少人数から全体での話合いは、生徒にとっては、パーソナル・コミュニケーションから学級集団でのコミュニケーションに広がっていくという意義が大きい。

中学校の道徳の時間には、誘導や一つの方向に結論付けることはなく、授業のねらいに向けて生徒の主体的な発言を基軸に授業を展開することで道徳的価値を自分のこととして受け止めるための有効な方法と考えた。

(2)　読み物資料等の扱い

読み物資料や格言等を活用し、考えることで、よりよい生き方としてのパターンや考えるきっかけが与えられ、無理なくねらいに迫ることができると考えた。

Ⅲ　研究の方法と内容

1　資料選定　　東京都道徳教育教材集「心みつめて」、文部科学省の「私たちの道徳」の読み物資料や格言、詩、人物コラムを複数組み合わせて活用するとともに、その他の活用可能な教材・資料を使用した。

2　指導方法　　研究においては、少人数の生徒による話合い活動を組み込んだ。

また、ワールドカフェ方式の話合い活動を活用した。

授業では必ず全体での話合い活動（マス・コミュニケーション）を行い、ある生徒の考えが、学級の全員によって吟味され、共有されるような機会を設定する。

3　検証方法　　生徒による授業評価を行い、話合い活動への参加状況、手ごたえ、自分の思いや考え方を深めることができたか検証した。

4　内　　容

研究授業においては、複数の教材を活用し、発問の精選を行い、少人数の生徒による話合い活動、または、（※１）ワールドカフェの話合い活動を軸にした展開について研究する。少人数の語り合いでの話合い活動を併用し、他者の発言が道徳的価値の自覚を深める刺激となり、時には学級の全員によって共感・共有されるような機会を学習指導案に組み込んだ。

1　指導事例１

(1)　　主題名　　「高い目標」「強い意志」１－（２）

(2)　　資料名　　先人のことばに学ぶ　P.9「宇野千代」の言葉

（東京都道徳教育教材集　中学校版「心みつめて」　東京都教育委員会）

目標を目指しやり抜く強い意志を

P.18「内なる敵」P.19「人生の目標について」

（「私たちの道徳」　中学校　文部科学省）

(3)　主題設定の理由

進路選択を考える中学３年生にとって、「目標」という言葉は身近であり、現実的なものである。中学３年生の多くは、自らの目標を立てその実現に向けて、日々努力を重ねる。しかし、その目標は自分の進路目標の実現に修練されやすい。特に中学３年生の夏休み明けは、自己の進路目標の実現のみに興味関心が集中しやすい時期である。

本授業では、目標を立てる意義を考えさせ、生徒にとって目先の進路実現よりも「高い目標」をもつことの大切さを考えさせたい。

また、生徒同士で自分の価値観を交流させることで、自らの目標に対する意識を高める。そして、自らの目標を達成するためには、自分の弱さを克服する「強い意志」が必要であることを自覚させたいと考え本主題を設定した。

(4)　資料について

・「心みつめて」の第１章「先人の言葉」からP.3の「宇野千代」の言葉を活用した。
　強い意志をもち、自分のよさと可能性を信じて自身を向上させていくことの大切さについて考えさせたい。

・「私たちの道徳」のP.18の漫画『宇宙兄弟』の１枚絵を活用した。生徒が感動を覚えるような魅力的な教材を用い、生徒の発達の段階や特性等を考慮した創意工夫ある指導を行うことができる。

(5)　指導の工夫

ア　ワールドカフェの活用（別掲）

中学校学習指導要領解説 道徳編（「第３章　道徳」の「第３　指導計画の作成と内容の取扱い」の３）配慮する事項（4）に「自分の考えを基に、書いたり討論したりするなどの表現する機会を充実し、自分とは異なる考えに接する中で、自分の考えを深め、自らの成長を実感できるよう工夫すること。」とあるように、「ワールドカフェ（別項参照）」という協同学習の手法を活用し、生徒の意見交流を深めるように工夫した。

イ　ICTの活用

本授業の導入・展開・終末において、プレゼンテーション用ソフトを活用した。資料の提示や指示・発問などをスクリーンに投影した。資料提示にかかる時間の短縮と共に、生徒の視覚に訴え、興味関心を引くように工夫した。

ウ　統計資料の活用

「私たちの道徳」のP.19の「これからどんな目標をもって生きたいか」の資料を活用した。同年代の資料を活用することで身近に考えさせることができた。

(6)　本時のねらい

・目標達成のためには、自分の強い意志が必要であることを自覚し、前向きに生きる態度を養う。

(7)　指導過程

	学習過程（◎中心発問、○発問、・予想される生徒の反応）	指導上の留意点 ☆評価
導入	1　本時の学習内容を予測する。 「心みつめて」のP.3「宇野千代」の言葉を提示し、音読する。	本授業の内容を予測させる事が主なので、言葉の意味などは説明しない。
展開	2　「どんな目標をもって生きたいか」考える。 ○自分の「生きる目標」として以下の６種類のうち、どれが自分の理想に近いか。 ①「高い地位につく」 ②「お金持ちになる」 ③「円満な家庭を築く」 ④「趣味を活かす」 ⑤「気楽に暮らす」 ⑥「社会に役立つ」 個人の意見を書き終えたら、４人グループで、上記６つの目標を重視したい順にランキングさせる。 ○ワールドカフェの手法で交流を深めさせる。 ４人グループでランキングを作らせ、ホワイトボードに記入する。 自分の小グループの意見を、他の小グループと交流する。（２セット行う） 旅人の情報を小グループで発表する。 高校生の意識調査の結果と自分たちの考えの違いを知る。 「私たちの道」P.19のグラフを提示する。 ○高校生の意識調査の結果で①「高い地位につく」 ②「お金持ちになる」⑥「社会に役立つ」が多くの国で少ないのはなぜか。 ・自信がないから・面倒だから・大変だから・給料に関係ないから 3　「私たちの道」P.18の漫画をから考える。 ○漫画『宇宙兄弟』の主人公「南波六太」は「自分の敵はだいたい」何だと言っていると思うか。 ・相手・運命・欲望・本能・自分・みんな ◎「俺の敵はだいたい俺です。」には六太くんのどのような思いが込められているのだろう。 ・多くのことは自分に責任がある。 ・自分でなければできないことがある。 ・自分の弱さを乗り越えたい。	・①「地位」から⑥「社会」とプレゼンテーション用ソフトを使いスクリーンに投影する。 ・自分の意見をもたせるため一つは選ぶように助言する。 ・話合いが円滑に進むように助言する。 ・各小グループの代表生徒１名（旅人）が他のグループの内容を取材させる。 ・漫画の吹き出しの部分を隠して、スクリーンに投影する。 ・「俺の敵は、だいたい俺です。」の言葉の前後も説明する。 ☆発言を見取る。
終末	4　「心みつめて」のP.3「宇野千代」の言葉を再度音読する。	・本授業との関連を考えさせながら音読する。

	・授業の感想や意見を書く。	・ワークシートに記入し、意見を発表させる。 ☆ワークシートの記述を見取る。

(8)　本時の評価

・自分の目標に対する考えをまとめ、他者と意見や思いを交流する中で、さらに深めることができたか。

・目標達成のためには、強い意志が必要であることを知り、これからの生活に活かそうとしたか。

(9)　授業記録

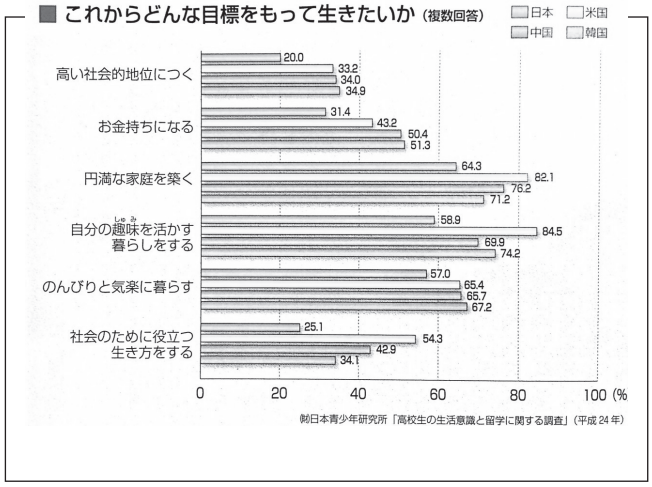
「心みつめて」の宇野千代の言葉を音読する。

信じると言うことは面白いことである。
人の力ではなく、自分の力を信じる。
自分にはこれっぽっちの力しかない、と思っていたときと、
そのこれっぽっちの力を大切にし、そして、
その上にもまた積み重ねて行く力があるかも知れない、
いや、ある、と思うようになったときは、違う。

授業の導入時に上記の言葉を音読した時は、言葉の意味を理解できない様子の生徒が多かった。しかし、本授業を通し、終末時に再度音読した時には、表情が豊かになり、言葉の意味をかみしめて音読を聞く様子が見て取れた。

発問１「どんな目標をもって生きたいか」考える。

６種類から選択させたので、多様な意見は出ないかと考えたが、生徒の個性に応じて、「趣味」「お金」「社会に役立つ」「家族」「気楽に暮らす」など多様な意見が発表された。さらに４人の小グループで発表し交流し合った。多様な考えやその背景にあるものなどを打ち解けた雰囲気で説明し合っていた。



○お金がなかったら、したいこともできない。

○お金があっても家族が不幸せだったら意味がない。

○自分のしたいことをして、それが社会のためになったら最高の生き方だ。

○社会に貢献するのも大事だけど、趣味がないとつまらない。

○高い地位に就くと、自分のしたいことができそうだけど、責任も大きくなる。

様々な意見を発表し合っていたが、「『気楽に暮らす』のが人生の目標って、どうなんだろう。」という率直な疑問をもった生徒もいた。

次にワールドカフェを行った。自分のグループとは違う多様な考えに触れ、生徒の考え

は大きく揺さぶられたようだ。自分たちと年齢が近い高校生のデータであることで関心ももてたようだ。また、他国と日本の高校生の　考え方の違いに気がついた生徒も多くいた。

発問２　高校生の意識調査の結果で①「高い地位につく」 ②「お金持ちになる」⑥「社会に役立つ」が多くの国で少ないのはなぜか。

ここは深く考えさせることが出来なかった。生徒にはやや難解な発問だったようだ。

発問３　漫画『宇宙兄弟』の主人公「南波六太」は「自分の敵はだいたい」何だと言っていると思うか。

『宇宙兄弟』という作品を知っている生徒がいて、「自分の敵はだいたい自分です」という言葉を知っている生徒も若干名いた。しかし、多くの生徒にとってこの言葉は初見であった。「運命」「世界」「欲求」「時間」などの意見が発表された。

発問４　「俺の敵はだいたい俺です。」には六太くんのどのような思いが込められているのだろう。

○自分自身に勝ち続けることは、他人に勝つことよりも大変だということ。
○多くのことは、自分の臆病さや弱さで克服できない。
○「だいたい」がついていることに意味がある。
○「だいたい」のことは、自分に原因がある。
○何事も自分がきっかけで起きている。
○だいたいが自分の責任だ。
○いつも自分というわけではなく、たまにはその他の者が敵になることもある。

（「私たちの道徳」中学校　文部科学省　P18「内なる敵」）

(10)　研究協議会の要点

①　ワールドカフェの活用

・生徒たちが生き生きと活動していたので、授業の核になる活動としては意義がある。
・「書かせる」活動を強制していないことが、むしろ生徒の活動を活発にさせよく話し合っていた。
・多様な意見がでるような発問を吟味するのが難しい。

②　宇宙兄弟の（「私たちの道徳」）を使用したことについて

・プレゼンテーション用ソフトを活用し、黒板に映し出すという掲示の方法をとったことで、必要な部分だけを写し出すことができた。その結果、生徒が資料に集中することができた。

③　「心みつめて」の宇野千代の言葉について

・導入と終末で使用したことで生徒の理解が深まった。道徳的な価値に近づけた資料だ。

④　「私たちの道徳」の人生の目標の表を使用したことについて

・資料には６種類の目標しか取り上げられていない。自由にいくつも出したらよかったのではないか。
・限定された範囲だからこそ活発に意見が出たかもしれない。

⑤　授業の流れについて

・授業の流れがとてもよかったのはパワーポイントを使用した授業展開にあるのではないか。

⑥　指導の工夫について

・ワークシートを読むと、ねらいをしっかり受け止めている感想が多い。したがって感想の交流をさせてみるとよりねらいに迫ることができたのではないか。

・前半にワールドカフェがあり、後半に再び「俺の敵はだいたい（　　）」です」についての話合いをグループで行っていた。もっと時間をかけて、全体で交流させてみるとより広がりのある授業になる。

(11)　考察

ア　ワールドカフェの活用

話合い活動は道徳授業において、他者と意見を交流し自分の意見を深めるために、効果が高いと感じた。しかしながら、学級全体の話合いをさせると、一部の積極的な生徒の意見ばかりが発表され、多様な価値観や意見を交流することができない場合がある。

さらに、道徳授業はコミュニケーション能力を育てる場でもあり、仲間との話合いを心地よく感じる機会にもなり得る。今回は、ランキングであったので、自分の考えをまとめ、班毎に取りまとめ後に「ワールドカフェ」を行った。ランキングを班で取りまとめなくても、より多くの生徒のランキングとその理由を探そうという、目途で行うことも可能である。

少人数の話合いを基盤にして、他の班や生徒の多様な意見や価値観を交流するために、「ワールドカフェ」は大きな可能性をもっている。

話合いをさせる単位を生活班よりも少人数（４人程度）にして、グループ内での交流を深め、さらに他グループのとの交流をさせることによって、価値観はさらに多様なものになる。

本授業でも、生徒たちは少人数の話合いを打ち解けた雰囲気で楽しみ、同時に、主体的に自分たちの意見を表明し合っていた。

話合い活動としてのワールドカフェは道徳授業のみならず、様々な場で実践されることで、より有効な交流活動へと深化する可能性のある技法であると考える。

ワールドカフェにおいて小グループを代表して、他のグループに自分のグループの考えを伝え、他のグループの考えを集めてくる役割の生徒を「旅人」と呼ぶ。この旅人の動きが他の話合いの方法にない活気を醸成する。また、旅人を自分のグループに呼び込み、自分たちの考えを伝える時にも、自分の小グループの考えを熱心に語る雰囲気が生まれる。

誰が旅人になるのかを決める方法も、「そのグループで誕生日が一番早い人」や、「黒板に一番近い窓側の人」のようにさまざまに工夫ができる。

道徳の時間において、ワールドカフェに使える時間は15分程度が妥当だと思われる。あまり長いと意見が出尽くしてしまい集中力や意欲の低下する可能性が高い。

また、ワールドカフェの最中に授業者は、旅人の動きを促し、旅人との交流がより深

まるように助言を与える必要がある。そのため、授業者は教室全体を見回し、ワールドカフェ全体が活性化するように指導する必要がある。

イ　ICT の活用

今回はプレゼンテーション用ソフトを活用し、資料の提示・発問・指示・説明のほとんどをスクリーンに投影した。本授業のように読み物資料以外に、グラフや漫画を提示するプレゼンテーション用ソフトの活用により、板書にとらわれず、授業をリズムよく進められることや、時間の短縮にも大きな効果を発揮する。

ウ　統計資料の活用

統計資料は、取り扱いの方法次第で、生徒の多様な見方を喚起させる力をもっていることがわかった。ただし、理解力の差があるので、生徒の実態に応じて、授業者は扱う必要がある。

本授業でも、高校生の意識調査の結果で①「高い地位につく」②「お金持ちになる」⑥「社会に役立つ」が多くの国で少ないのはなぜか。という発問に対して、あまり意見がでなかった。統計資料を活用した展開については、更なる研究・実践が必要である。

エ　教材集の活用

道徳の授業の導入時に、「心みつめて」第 1 章の先人の言葉を音読し、さらに終末時に読ませることによって、授業の内容を再確認する効果があるようだ。

(12)　事例のまとめ

生徒の感想には以下のようなものがあった。

○今日の授業で 1 番の敵は自分なんだと思った。私も同じような経験がよくある。走ろうと思いながらも、まあ、又明日走れば良いかと自分に負けてどんどん実行できなくなった。今日の授業はそんな私にとってとてもためになった。自分に負けない意志をもとうと思った。

○不安な時の自分と自信がついて「できる」と思っている自分はやっぱり違う。実力や見た目は変わらないかも知れないけれど、気持ちが違う。もちろん、実力がなければ、勝負では勝てないけれど、気持ちで負けていたら、勝っても負けと同じだと思った。

○自分がたとえどんな生き方を選んだとしても、壁にぶつかることはあるので、その時に自分がどう努力したら乗り越えられるのかを考えることが大切だと思った。将来何か大きな問題に直面したら、今日の授業で聞いた言葉を思い出そうと思う。

○自分の力を信じるには、努力が大切なので、あきらめずに進んでいけば何かが変わって、違う人生があるのかも知れない。宇野千代さんの「信じると言うことは面白いことである。」という言葉の意味は、信じることで人生が変わるということだろう。

○今日の授業を通して、自分は何がしたいのか明白になった。最初、自分はお金が欲しいと思ったが、そうではないことがわかったのだ。自分自身の幸せをつかむためにも、今頑張れることを頑張ろうと思った。

以上の感想から、多くの生徒にとって、本授業が自分の目標に対する考えをまとめ、

他者と交流する中で、さらに深める、目標達成のためには、強い意志が必要であることを知り、これからの生活に活かそうとする態度を養う効果があったと考えられる。

１　指導事例２　「私たちの道徳」（文部科学省）の活用

(1)　主題名「よりよい自己の追求」１－（５）

(2)　資料名　自分を見つめ個性を伸ばす P.42「メッセージ」
（「私たちの道徳」中学校　文部科学省）

(3)　主題設定の理由

人生を肯定的に歩んでいこうとする気持ちは、自分の人生ももちろんのこと、自分に関わる全ての人にとっても有益である。しかし、誰であっても、己を省みる時、長所よりも短所のほうが気になる。特に思春期である中学生時代は、他者との比較において、自分を否定的にとらえて自信をなくしたり、他者をおとしめたりすることで自分を保とうとする感情に陥りがちである。自分と正面から向き合い、短所も長所も受け止め、長所を伸ばしていこうとする姿勢を身に付けることで、人生を豊かに前向きに過ごすことができると考える。

(4)　資料について

「私たちの道徳」P.42 の「メッセージ」は、ＩＰＳ細胞の研究でノーベル生理学・医学賞を受賞した山中伸弥さんの経験がまとめられたものである。患者を治す研究の道を選び自分の「長所」を生かし、新たな道を究めた山中さんの姿勢が描かれている。

(5)　指導の工夫

ア　「リフレーミング」の活用

「リフレーミング」の手法を導入で取り入れる。「リフレーミング」※１とは、「短所」を、視点を変えることで「長所」として見る、という考え方の枠組みの変換のことである。事前に生徒が自分の「短所」と思われるところをＡ５判のカードに書き出したものを、授業の資料とした。よくある中学生の悩みを取り上げることで、ねらいに迫りやすくなると考える。

イ　話合いの活用

４人組の話合いを取り入れることで、自分一人では考え付かない視点に気付いたり、思いを深めたりできると考えた。自分の考えをアウトプットするうちに自らの考えが深まり、人間としての生き方を自分のこととして考えることが可能である。そこで、合意形成をねらうのでなく、ブレーンストーミングとして、それぞれの考えを次々発言する話合いの形を用いた。話合いが効率よく行われることが望ましい。指導の要点として、話合いの後にどのような活動を行うか見通しをもたせ、自分の見方・考え方が深まることが重要である。机間指導では、そのことに配慮して行った。また、学級経営やグループの親和性にもかかわることだが、道徳の時間として、「互いに尊重する」「十分に人の意見を聞く」など話合いのための心構えやマナーについて、話合いの前には改めて指導する必要がある。また、意見を統一したり、安易に人の意見をなぞったりすることが無いように机間指導をした。

(6)　本時のねらい

自己を肯定的に捉え、山中博士の生き方に学び、自身のよさをより一層伸ばしていこうとする道徳的態度を育成する。

(7)　指導過程

	学習活動（◎中心発問、○発問、　・予想される生徒の反応）	指導上の留意点 ☆評価
導入	1　人それぞれの個性について考える。 ○性格を表す言葉をいくつか挙げます。それぞれ、良く言えばどうでしょう。 ・頑固→芯が強い　・熱しやすく冷めやすい→夢中になれるものがある　・優柔不断→色々な人の気持ちを考えられる　・短気→意思決定が速い　・大人しい→思慮深い	・事前調査を示す。 ・「短所」も見方を変えると「長所」になりうることに気付かせる（リフレーミング）
展開	2　山中伸弥さんについて知る。 ○この人は、おそらくこの学級のほとんどの人が知っている人です。誰でしょう。 ・外科医　・校医さん　・近所の○○のお医者さん 「私たちの道徳」P.42 を読む。 3　資料を読み、話し合う。 ○山中伸弥さんとはどのような人でしょう。 ・ノーベル生理学・医学賞受賞 ・ＩＰＳ細胞の研究 ・京都大学ＩＰＳ細胞研究所所長 ○山中さんは「ジャマナカ」と言われてどう思いましたか。 ・ダメだ俺　・くやしい・もういいや・どうしよう ◎山中さんが研究者になったのはどのような思いがあったからでしょう。 ・難病を治したいと思ったから。 ・やはり命を助けたいと思ったから。 ・新しい方法で人を助けたいと思ったから。 ・自分にもやれることがあると思ったから。 ・せっかく医者になったからがんばりたい。 ○全体で発表し共有をする。	・黒板に人形を貼る。ラグビーボール、メガネ、聴診器の貼り絵を貼っていく。 ・全体に質問する。 ・４人組で話し合う。 ・意見をワークシートに記入させる。 ・自分の短所に直面した山中さんが、なぜ乗り越えることができたのか考えさせる。 目標を見失わずに自分の適性に目を向けたことに気付かせる。 ☆発言から見取る。

終末	○今日の授業の感想を書きましょう。	・授業での生徒の発言と山中伸弥さんの生き方の接点を指摘する。 ☆ワークシートの記述から見取る。

(8)　本時の評価

自己を肯定的にとらえ、自身のよさを伸ばしていこうと考えることができたか。

(9)　授業記録

発問１　（リフレーミング）この学級の誰かが書いた自分の「短所」です。 この「短所」を別の見方をすると、どういえるでしょうか。

○熱しやすく冷めやすい・・・夢中になる物があるということではないか。

○頑固・・・自分の考えがしっかりあると言うことだと思う。

○短気・・・すぐ自分の考えを決められるということかな。

○おとなしい・・・静かでいい。きっとなにか深く考えているのだろう。

発問２　山中さんは、「ジャマナカ」と言われてどう思いましたか。

○落ち込んだ。

○もう自分なんてダメだと思った。

○やめてしまおうかな。

○悲しい。

発問３　（中心発問）山中さんが研究者になったのは、どのような思いがあったからでしょう。

○不安はあるけど人の役に立ちたい。

○「ジャマ」でないことの証明。

○外科医で人の役に立てないのならば、研究者になって少しでも人の役に立ちたい。

○こんな僕でも何かできることがあるはずだ。

○簡単に　あきらめてたら　はじまらん　あきらめてたら　試合終了。

○難病で苦しむ人の役に立ちたい（半数）。

発問４　（終末）この授業を通して考えたこと。

○自分は「ジャマ」なんだと思って夢をあきらめるのではなく、「これがダメならどうすればいいか」考えることが大切だと思った。

○短所を乗り越える。自分が苦手なことも、視点を変えればうまくいく。

○短所を長所に。ノーベル賞を取るような人でも短所があったんだとびっくりした。

○短所と長所。山中さんは手術をするのが苦手だが、人を助ける、ということをＩＰＳ細胞の発見で実現できたので長所を生かしたと言える。

○人の役に立つこと。短所もあるが、その短所を生かして、人の役に立つことができる。

○自分の道。どんなに自分が不器用で、運動ができなくても、かならず役に立つことができる。

○ひとそれぞれにできること。自分がダメだと思わず、人のためにできることを探す。

○人は意味をもって生きている。人は苦手なことや得意なことがあり、それを生かして人は生きていける。

○役に立つということ。山中さんのように、一つのことができなかったとしても、他の場で自分が役に立ったと言えるように努力することが大切だと思った。

○自分の個性。自分は何が得意で何が不得意なのかを考えることが大切だと思った。

(10)　研究協議のまとめ

○リフレーミングを導入に活用したのは、生徒たちにも発見が多かった。

○山中さんの行為の変化ではなく、心の変化を捉えさせるには中心発問を「自分だったら、自分の長所をどう生かすか」という発問にしたほうがよかったのではないか。

○資料掲示の方法は大切なので、小さなカードを活用するのではなく大きく映し出すプレゼンテーション用ソフトなどを用いてはどうか。

(11)　考察

ア　リフレーミングについて

授業の導入で、生徒たち自らが書いた「短所」も、見方を変えると「長所」になりうる、という考え方は、生徒たちにとって大きな発見であったようである。見方を変えることができなかった生徒も、他の生徒が発言している内容を聞いてしきりに感心していた。導入にリフレーミングを取り入れることで、授業の方向性が見え、ねらいに迫る中心発問での考え方にも影響を与えたようである。授業の終末での発問で、この授業を通して考えたことを問うた時も、「短所を長所に」などという書き出しを用いた生徒もいた。

イ　話合いの活用について

中心発問について自分の考えを書かせた後、自分の考えを発言すると同時に、友人の見方・考えを聞くことで自分の捉え方や考えの幅を広げていくことを重点にした。生徒たちは自分の考えを次々と発表し、友人の考えを聞いて感心したり首をかしげたりしており、友人の考えを聞いたのちに自分の考えを変えてワークシートに記入している姿も見られた。少人数の語り合いは、多くの生徒にとって見方・考え方を交流しやすい場である。しかし、誰かの発言に流されたり、先に発言した生徒に従ったりしないよう、自分の考えをきちんともたせたうえで、少人数の活動に入ることが大切である。

他者の見方・考え方に触れることで、新たな視点をもち、道徳的な価値にかかわる自覚を深めることができたのではないだろうか。

ウ　中心発問について

山中さんが研究者になったときの「思い」を問うことで、山中さんが自分の「短所」と向き合い、「短所」を「長所」にしていった、その心境の変化に気付かせ、ねらいに迫ろうと考えた。しかし、「難病で苦しむ人を救いたい」という意見も多数あった。

エ　人物像の共有について

話合い活動の前に、いくつか自分の考えを発表させ、その際にこのエピソードを紹介してから話合い活動に進めた方が、ねらいを深めるために役立ったであろうと考える。

(12)　事例のまとめ

今回の授業終了後、「今日の授業で、もっと友達の意見を聞きたいと思ったか。」「自分

の良さを伸ばしていくために自分の課題に気付くことができたか。」という問いに、30人中27人が「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」を選択した。また、この授業を通して考えたことは、前述のように、「自分の良さに目を向けていくことの大切さ」に言及した生徒が非常に多かった。特に、山中さんのような「すごい人」に、「弱点」や「短所」があったこと、そしてその「弱点」や「短所」が、生徒の共感を呼び、自分のこととも重ねて、見方・考え方を深めることにつながったのだと思う。少人数の話しやすい環境は、聴く・話すこととともに、自分の思いを深め、生き方を考えるよい機会になったと感じた。全体での話合い時間の確保が、課題として残った。

３　指導事例３　東京都道徳教育教材集「心みつめて」の活用

(1)　主題名　「国際社会への貢献」　４－（10）

(2)　資料名　「日本とトルコの懸け橋となる」 P.96～P.106
（東京都道徳教育教材集　中学校版「心みつめて」　東京都教育委員会）
「日本人の自覚をもち世界に貢献する」P.214
（「私たちの道徳」中学校　文部科学省）

(3)　主題設定の理由

今日、国際化の進展には目を見張るものがある。すでに日本人が、自分たちの幸せだけを追い求めることは不可能になってきている。したがって、将来の我が国を担う中学生には、日本のことだけでなく、国際的視野に立ち、世界の中の日本人としての自覚をしっかりもつことが必要となってくる。

中学生になると教科等の学習とも相まって、これまで以上に世界の様々な国々に対して興味・関心が高まってくる時期でもある。今後ますます国際的な相互依存関係を深めていく社会の中で生きていく中学生にとって、国際的な視野と国際社会で生きる能力を身に付けることが、これまで以上に必要になると考え、本主題を設定した。

(4)　資料について

山田寅次郎は、トルコ軍艦エルトゥールル号の遭難事故に心を痛め、義援金集めに奔走した。トルコへ行く機会を与えられた寅次郎は、トルコにしばらく滞在して国交を開く一助を担うよう依頼された。寅次郎は20年間に渡り、日本とトルコとの友好関係に尽力した。

不安を感じながらもトルコに滞在することを決意した寅次郎の思いを考えさせることにより、国際社会で生きることの意味を理解させ、これから自分も国際人として生きていこうとする態度を養いたい。

(5)　指導の工夫

ア　話合い活動の工夫

話合いを行わせる発問は、生徒から多様な考えが出るかどうか吟味して決定した。また、話合いは席の近い生徒の４人組で行わせる。４人の座席は班の生徒全員と向かい合えるようロの字型に配置させる。４人組で話し合わせることにより、６人組の班よりも生徒の発言機会を多くすることができ、多様な考えを共有した上で、自分自身の気持ちや考えを見直しやすくできると考える。さらに４人組の話合い後、「ワールドカフェ」方式を活用し、

さらに生徒の意見交流を深められるようにする。

４人組の話合いの後、中心発問では全体での話合いを行う。ワークシートに記入させた上で話合いを行うが、考え方がねらいとする道徳的価値から離れていくようであれば、補助発問を活用する。

イ　導入の工夫

生徒が、資料の登場人物の気持ちについて考えるためには、その登場人物におかれている状況をイメージできなければならない。そのため導入では、トルコやエルトゥールル号、寅次郎のことなど、資料の内容について取り上げる。しかし、あくまでも生徒が登場人物の気持ちについて考えやすくすることを目的とするため、取り上げる内容を吟味した。また、導入の時間が長くならないよう、プレゼンテーション用ソフトを利用し、テンポ良く進めていく。

ウ　資料の活用

読み物資料として、東京都道徳教育教材集「心みつめて」の第二章（先人の生き方に学ぶ）から選定した。先人が残した生き方に触れることで、人間としてよりよく生きることの意味を深く考えることができる。しかし、資料が長文であるため、展開では、資料の後半部分を使用することとする。終末では、文部科学省資料「私たちの道徳」から、本時のねらいと関連する内容を活用し、生徒が自分自身について考えられるようにした。

(6)　本時のねらい

寅次郎の気持ちについて考えることで、世界の中の日本人であることの自覚を深め、他国を理解し日本の文化を伝え、国際人として生きていこうとする態度を育てる。

(7)　指導過程

	学習活動（◎中心発問、○発問、・予想される生徒の反応）	・指導上の留意点 ☆評価
導入	1　寅次郎がエルトゥールル号の遭難事故における募金活動をきっかけにトルコへ行くまでの流れを確認する。	・プレゼンテーション用ソフトを活用する。 ・エルトゥールル号の写真を提示する。 ・トルコの位置を確認し、当時、船での往復がいかに大変であったかを押さえる。 ・トルコ行きが決まったときの寅次郎の気持ちに共感させる。
展開	2　資料「日本とトルコの懸け橋となる」の後半を読んで、考える。 ○トルコに滞在するかどうか悩む寅次郎は、どんなことが不安だったのだろうか。 ・見知らぬ国で生活できるかという不安 ・言葉や文化の違いに対応できるかどうかという不安	・教師が読み聞かせる。 ・日本をしばらく離れる寂しさに触れ、寅次郎の気持ちに共感させる。

	・日本語や日本の文化を教えられるかどうかの不安 ◎約 20 年間の長きにわたり、日本とトルコの国交を開こうと尽力したのはどうしてだろうか。 ・自分にしかできないという責任感があったから ・トルコや日本の人々が、頼りにしてくれているという自負心が強かったから ・世の中の役に立ちたいという使命感があったから。 ・やりがいがあったから 【補助発問】 国を越えて、日本人として何かを成すことを寅次郎はどう思っていたのか。	ワークシートに記入後に4人組での話合いとワールドカフェを行う。 ☆ワークシートの記述から見取る。 ・単に海外への興味や憧れだけでは務まらないことに気付かせ、日本人として世界に恥じぬよう努力をしていた点にも注目させたい。 全体での話合いを行う。 ・生徒の考えを深めさせるために、補助発問を活用する。
終末	3　「私たちの道徳」P. 214 を読み、本時の感想を書く。	・現在の世界における様々な問題に触れさせ、本時の感想を書かせる。 ☆発言から見取る。

(8)　本時の評価

世界の中の日本人であることの自覚を深め、他国を理解し日本の文化を伝え、国際人として生きていこうとする態度を育てることができたか。

(9)　授業記録

ア　導入について

導入では、プレゼンテーション用ソフトを活用し、トルコが親日国であること、日本からトルコへの移動は当時約３ヶ月かかること、エルトゥールル号の遭難事件と寅次郎の募金活動について確認した。

イ　展開について

導入で確認した内容以降の部分（「心みつめて」P. 98 の 12 行目から）を読み、寅次郎の気持ちについて考えさせた。

発問１：トルコに滞在するかどうか悩む寅次郎は、どんなことが不安だったのだろうか。

○何をすればよいのか分からない。

○言葉もわからないのに、トルコの人とコミュニケーションをとることができるのか。

○自分の家族はどう思っているか。

○日本の代表として自分はふさわしいのか。

○日本でやることが残っているのではないか。

発問２（中心発問）：約20年間の長きにわたり、日本とトルコの国交を開こうと尽力したのはどうしてだろうか。

○自分がいない未来でも、日本人とトルコ人が仲良く交流してほしいと思っていたから
○不安よりも、この仕事をやりたいという気持ちの方がかって勝っていたから
○いろいろな人に頼られて、自分でもできることを見付けられたから
○人のため、国のため、トルコのためにやっているということは、すごく嬉しいことであったから
○トルコで生活していくにつれ、楽しさや、やりがいを感じたから
○国や言葉が違っても、つながれるということを人々に教えたかったから

ウ　終末について

「私たちの道徳」P. 214～217 を読み、現在の世界における様々な問題に触れさせた後、本時の感想を書かせた

生徒の感想

○寅次郎の強い決意が、今の日本とトルコの関係に至っていることを知って、とても素晴らしいと思った。
○寅次郎は、「同じ地球上に住んでいる上で助け合うのは当然だ」と思っていたに違いないと思う。
○人と人とに国境はなく、かわいそうとか、大変そうと思う気持ちにも代わりはない。
○いろいろな人が、世界中の人に尽くしていることを知って、自分にも何かできることはないか考えさせられた。
○私たちにできることは、勉強に励み、世界に貢献できるような仕事に就くことだと思う。

(10)　研究協議の要点

・導入部分はテンポを上げていくか、内容を短縮する。
・ワールドカフェは、旅人の行き先を指定せず、決められた時間内に複数のグループを回らせる。また、相手に伝える際は、ワークシートを見せるだけでなく、必ず言葉で伝える。
・中心発問の時間を確保するために、直前の発問の話合い時間を短く行うか、ワールドカフェを中心発問で行う。
・ワールドカフェを終えた後に、そのまま中心発問について話し合わせる。
・机間指導の際に全体で共有したい考えを教師側で把握しておく。

(11)　考察

ア　話合い活動の工夫

様々な考えが出されることを期待し、話合いを行わせる発問は、寅次郎がトルコに滞在するかどうか悩む場面に設定し、寅次郎がかかえる不安について考えさせた。その結果、生徒から様々な考えが出され、活発な話合い活動に発展した。また、ワールドカフェによって、他のグループの考えも交換することができた。

中心発問では、寅次郎が約 20 年間の長きにわたり、日本とトルコの国交を開こうと尽力した部分について考えさせた。この中心発問では、ねらいとする道徳的価値に関わる考えが多く出された。これは、中心発問の前に、寅次郎が抱える様々な不安について、多くの考えを話合い活動や、ワールドカフェで共有できたためと考えられる。ねらいとする道徳と的価値にせまるために、話合い活動を工夫することは大変有効であることが分かった。

イ　導入の工夫

展開部分で寅次郎の気持ちについて考えさせるため、導入では、日本からトルコへの移動の大変さやエルトゥールル号の遭難事故、トルコ行きが決まるまでの寅次郎の行動や気持ちについて触れた。プレゼンテーション用ソフトを活用することで、生徒の意欲が高まり、資料の内容理解も短い時間で行うことができた。

また、導入の段階で資料の途中の内容まで取りあげることで、資料を読む時間が削減され、生徒が寅次郎の気持ちについて考えたり、話合いをしたりする時間を多く確保することができた。

ウ　資料の活用

先人の生き方や考え方に触れることで、人間としてよりよく生きることについて考えられるようにするため、読み物資料として「心みつめて」の第二章より選定した。「日本とトルコの懸け橋となる」は、主人公である寅次郎の思い悩む場面があり、生徒の多様な考えを引き出しやすいと考えた。実際に、その場面に発問を設定したところ、話合いが活発になされた。資料を活用する際、主人公が思い悩む場面や葛藤する場面に着目すると有効であることが分かった。

また、終末では「私たちの道徳」を活用した。「私たちの道徳」には、生徒が自分の課題について考えられる内容のものが多く、教師が説話をするために活用することも有効であることが分かった。

(12)　事例のまとめ

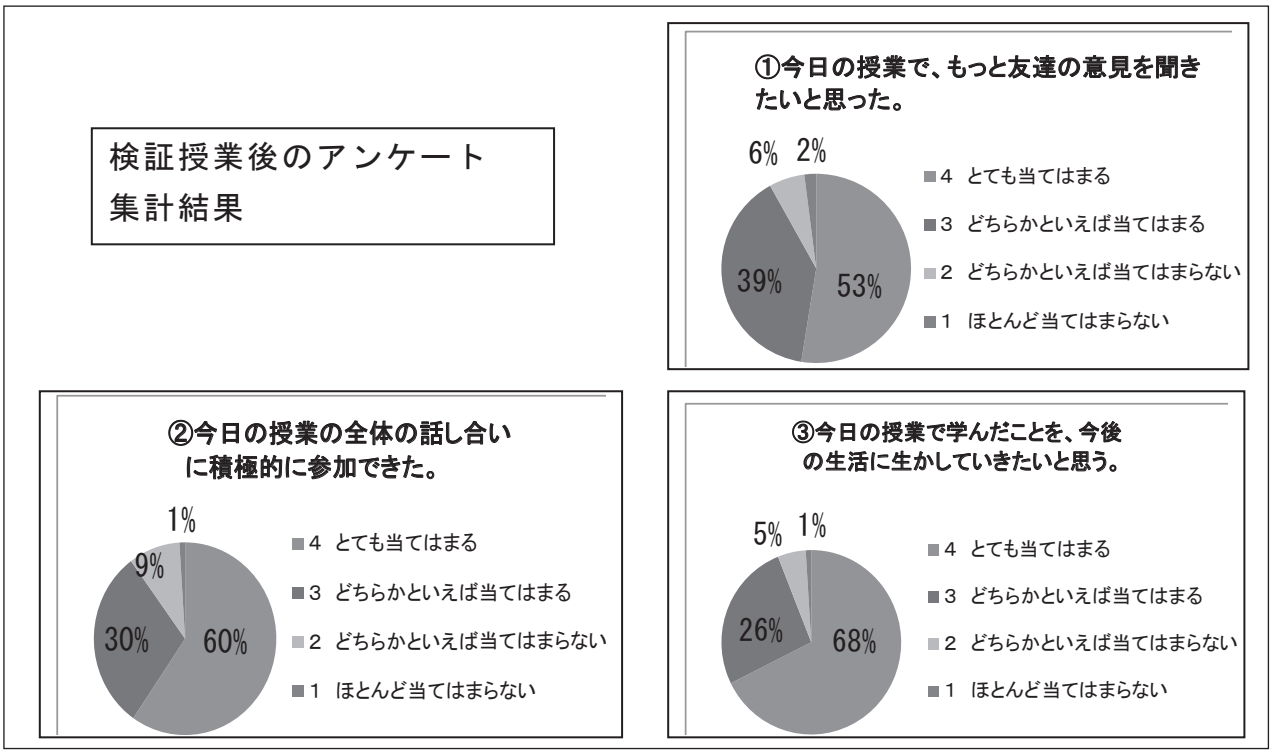
本事例では、先人が残した生き方から学べるように工夫をした。資料について生徒に考えさせるためには、資料中の当時の様子や、登場人物の気持ちについてイメージできるようにすることと、発問を吟味することが大切であると考える。多様な考えが出るような発問は、話合いも活発になるため、ねらいとする道徳的価値についてより深めさせることができる。本事例ではこれらの視点をふまえて工夫をした結果、一定の成果を得ることができた。

しかし、導入の内容、話合いやワールドカフェの行い方、全体の場で考えを共有する方法など課題も多くある。これらの課題の改善に取り組み、よりよい道徳の時間の実現に向けて今後も研鑽を深めていきたい。

Ⅳ　研究のまとめ

本研究では、生徒が多様な価値観に触れ、新たな見方・考え方から学ぶために、道徳の時間の話合い活動を活用することは重要であり、生徒が道徳の授業のねらいに迫る鍵となると考え、少人数での語り合いや学級全体での話合いの方法を中心に、効果的な学習指導の過程について研究を進めてきた。検証授業後の協議会での話合いや、授業後に行ったアンケート

を分析した結果、以下のような成果と課題が明らかになった。



1　成果

・ アンケートの「今日の授業で、もっと友達の意見を聞きたいと思ったか。」という質問に対して、92％の生徒が、当てはまると回答した。少人数での話合い活動で「ワールドカフェ」方式を行うことによって、多くの生徒の多様な意見や価値観を交流することができ、ねらいとする価値に迫りやすくすることができた。

・ アンケートの「今日の授業の全体の話合いに積極的に参加できたか。」という質問に対して、90％の生徒が当てはまると回答した。話合い活動を工夫することで、生徒が話合いに積極的に取り組めるようになり、話合い活動に対する生徒の意欲も向上した。

・ アンケートの「今日の学習で学んだことを、今後の学習に生かしていきたいと思うか。」という質問に対して 94％の生徒が当てはまると回答した。他者と自分の違いについて触れる機会が増えたことから、今後の生活に生かしていきたいと思える生徒が増えた。

・ 資料として「心みつめて」や「私たちの道徳」を活用し、先人が残した生き方に触れたり、統計資料から話し合ったりしたことで、生徒にねらいとする価値について深く考えさせることができた。

・ プレゼンテーション用ソフトなど、ＩＣＴを有効活用することにより、生徒の授業に対する意欲が高まり、発問について考えさせやすくすることができた。

2　課題

少人数や学級全体の話合い活動は、学級の親和性と信頼関係を基盤に、話合いのねらいや筋道をその場で徹底させるとともに、まとまった時間が必要となる。また、話合い以外の学習活動も効率よく行えるように、以下の点を今後も改善していきたい。

(1)　少人数の語り合いから学級での話合いへ

ワールドカフェ方式の話合いは、生徒が何回か繰り返すうちに方法を理解し、手順よく進

めることができる手法である。特に「旅人」役の生徒による情報収集により、積極的に話し合う時間を生みだすことができた。

しかし、少人数から、学級全体での話合いに入ると、意欲はあるものの積極性が失われてしまう傾向が強かった。資料を活用し、課題に向けて生徒が全体で話し合うことの壁は取り払われなかった。学級担任や指導者による、長期的な展望をもった計画的・継続的な指導が必要である。

今後中学校段階では、授業の中で、例えば「目標をもち、やり抜くために何が大切か」「国際協力を実現するには」など道徳的な価値や生き方にかかわる話合いを展開する試みがあってもよいと感じる。

(2)　資料提示について

長文の読み物教材の場合は、必要な内容を全員が把握し、ねらいに向かった学習をするために、以下の工夫も必要と考える。

- 資料のうち、生徒の学習に大きな影響を与えない部分（文章）の粗筋をプレゼンテーションにして示す。
- 前日までに資料の通読を宿題として、内容を把握させる。授業では内容（粗筋）の確認を行い、発問に関わる部分は学級の全員できちんと読む。
- 偉人を扱う資料等では、長文の読み物資料は宿題として読み取らせ、授業では別途ねらいに向けた話合いができる資料を準備し、用いる。

(3)　長文資料と発問の精選

本研究の主たる課題ではなかったが、指導案検討段階で、開発委員会は常に十分に生徒が活動できる時間を確保することを念頭に置いた。中心発問を１つ、その前の発問を１つ程度に抑えるようにした。特に「日本とトルコの懸け橋になる」では、活動の時間を確保するという目的とともに、中心発問で、ねらいとする道徳的価値に迫れるようにするために、中心発問の直前の発問についても時間をかけて吟味・検討した。

また、偉人を扱った資料は、その功績を辿る文章が続き、すでに歴史的にも認められた事実を資料化している。偉人ではあっても人間としての苦悩や迷いが分かる補助的な資料の準備が欠かせない。

（※１）参考資料

ワールドカフェについて　＊ワールドカフェは1995年にアメリカ合衆国のファニータ・ブラウンとデイヴィッド・アイザックスにより始まったとされる。

(1)　概要

ワールドカフェは何人かの会議での討論の一形式である。与えられたテーマについて数人がまず議論し、次にテーブルホスト以外は他のテーブルへ移動し、そこのホストから前の議論を聞いてからさらに議論を深め、これを何回か繰り返した後に、各テーブルホストがまとめの報告を全員にする方法である。参加者が少人数で自由に発言をしながら、他の人々の様々な意見にも耳を傾ける機会を増やすやり方である。

(2)　ワールドカフェの目的

①　他者と対話することによって新しい世界観が生まれることを実感する。

② グループを一度解体して他のグループと情報交換し、同一集団の発想をブレイクスルーする体験を踏むことによって、広い情報収集の必要性を実感する。

③ それぞれの意見を肯定的に受け止めながら、少人数で交流することによって、話合いにおける雰囲気の重要性について知る。

④ ハーベスト（各グループの成果を全体で共有化する場面）による情報の共有化によって、同一テーマに対するものの見方・考え方の多様性について理解する。

（堀裕嗣『教室ファシリテーション 10 のアイテム 100 のステップ』学事出版、2012 より）

(3) 道徳の時間におけるワールドカフェの活用

教室で行うワールドカフェの場合、４～５人の少人数のうち１名を「旅人」と指名し、移動させる。第１ラウンドで模造紙や付箋などを活用し、意見や交流内容を視覚化する。

① 第１ラウンド （テーマについて各自の意見をワークシートなどに記入させる） ３分
ここでは、個人の意見をまとめることに集中させる。

② 第２ラウンド （アイディアを交流する） ３分
３～５人の少人数を作らせ、自分の意見を発表し合う。そのとき、他者の意見を聞き、自分の意見を変更することも可能であることを授業者は明確に説明する。
課題によっては、各グループの意見を１、２本のものにまとめさせる。

③ 第３ラウンド（アイディアを他のグループと交流し合う）
各班１人だけ 「旅人」 を指名し他のテーブルに移動させる。他の参加者は 「テーブルホスト」 になる。移動先の班では、テーブル・ホストが出迎えて、自分の班の意見を発表させる。きちんと自分たちの言葉でコミュニケーションさせる。テーブル・ホストは第１ラウンドでどのような話合いだったかを旅人に説明する。説明を聞いた旅人は、別のグループに移動する。移動する班の数は限定しない。５分

④ 第４ラウンド （気付きや発見を統合する） ５分
第４ラウンドでは、旅人が再び元のグループに戻り、移動して得た他グループの情報を、自班で説明する。そして、自分たちのグループの意見との差異や共通点・多様さなどを実感させる。

⑤ 全体セッション （集合的な発見を収穫し、共有する） ５分
各グループの意見を発表させる。
各ラウンドの所要時間はあくまでも目安ではあるが、生徒や学級の実態、交流し合う課題の内容に応じて変える。20 分程度が目安となる。

平成 26 年度　研究開発委員会　委員名簿

＜中学校道徳研究開発委員会＞

	学　校　名	職名	氏　名
委員長	三鷹の森学園三鷹市立第三中学校	校　　長	賞雅　技子
委員	杉並区立東田中学校	主任教諭	小池 林太郎
委員	練馬区立大泉西中学校	主任教諭	合田　淳郎
委員	武蔵野市立第五中学校	主任教諭	丸山　晶子
委員	三鷹の森学園三鷹市立第三中学校	主幹教諭	服田　昌樹

〔担当〕東京都教育庁指導部義務教育特別支援教育課　統括指導主事　田子森　好房

＜中学校外国語研究開発委員会＞

研究主題・副主題

「聞くこと」「読むこと」の活動から表現活動につなげる指導の工夫

～タスク活動を通した表現力の育成～

研究の概要

平成24年４月から実施されている中学校学習指導要領では、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」及び「書くこと」の４技能の総合的な指導を通して、それらを統合的に活用できるコミュニケーション能力を育成することや、その基礎となる文法指導は言語活動と一体的に行うことが明記されている。

コミュニケーションの成立には、４技能それぞれの力だけでなく、聞いたり読んだりしたことに基づき、話したり書いたりするなど、複数の技能を統合して運用する能力が必要とされており、４技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力を育成するためには、言語活動の充実が不可欠とされている。

言語活動では、知識や技能を習得するための活動を大切にしながら、それらを活用し、思考・判断・表現する活動へつなげていくことが重要である。そのため、本部会では、習得した知識を土台に活用型言語活動を行うために、Task-Based Language Teaching(TBLT)の理論を利用することとした。日常的な習得を目的とした言語活動を生かしつつ、活用に重きを置いた言語活動を設定して工夫することで、自らの考えなどを相手に伝える「発信力」を高めたコミュニケーションができることを目指した指導方法を検討することとした。

Ⅰ　研究の目的

平成25年12月13日、文部科学省が「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」を発表し、グローバル化が進展する社会で国際共通語としての英語力向上を目指した具体的取組の推進を図ることとした。また、平成26年２月に英語教育の在り方に関する有識者会議が設置され、同計画において示された方向性について、その具体化に向けて専門的な見地からの検討が行われた。本有識者会議においては、英語教育の在り方は、主体的に「話すこと」「書くこと」などを通じて、お互いの考えや気持ちを英語で伝え合う言語活動を展開することが重要であることなどが論議された。

現行の中学校学習指導要領では、小学校の外国語活動で培われたコミュニケーションを行う素地を土台として、４技能の総合的な指導を通して、それらを統合的に活用できるコミュニケーション能力を育成することが求められている。そのための指導の一層の充実が求められているとともに、生徒が英語を使った様々な体験を十分に積むことが重要視されている。また、現在、中学校に通う生徒は、東京オリンピック・パラリンピックが開催される2020年には、成人となることを踏まえ、グローバルな視野をもち、英語を使いこなして社会貢献できる人材の育成を一層推進していくことが必要である。

本部会の主題を設定するに当たり、国の調査や都立高校入試の結果に関する調査を始めとする東京都の資料を参照し、中学校の英語教育の現状を把握した。平成22年度国立教育政策研

究所の「特定の課題に関する調査」では、まとまった内容の文章を書くことに課題があることが指摘されている。平成26年度の東京都の「児童・生徒の学力向上を図るための調査」では、外国語表現の観点の平均到達度が約40％であり、その他の観点よりも低い結果が出ている。また、平成26年度都立高校入試では、聞いたり読んだりした内容に関する質問に対して書いて答える問題の平均正答率が20％に到達しておらず、全体の平均正答率に比較しても低い。これらのことから、観点別では外国語表現の能力が弱く、いまだに課題であるといえる。さらに、前述の有識者会議では、準備したものを話したり書いたりすることではなく、その場で考えながら表現する能力に課題があることが指摘されている。

本部会では、生徒の表現力を向上させるため、英語教授法の一つであるTBLTを取り入れた研究を行うこととした。この教授法では、第二言語習得においてインプット、インタラクション、アウトプットの３つが大切であるとされている。また、タスクを達成するために、英語をコミュニケーションの手段として言語活動を行う過程で、英語の運用能力を育成していくことができることから、タスクに基づく指導が、英語によるコミュニケーション能力の基礎を育成することにつながっていくと考えた。

本研究では、TBLTの理論を踏まえながら、実際の授業の中で、基礎基本を大切にしながら教科書本文を活用しそれをアレンジすることで、生徒が興味をもって抵抗なく表現活動に取り組めるような指導方法の研究及び教材の開発を目指した。

Ⅱ　研究の方法

１　研究の視点

本研究では、TBLT（Task-Based Language Teaching）の理論に基づき、学習者に達成させるべき課題（タスク）を与え、その課題達成のために英語を使用する過程を利用して実践的運用能力を育成するための指導方法の研究及び教材の開発を行う。

２　研究の仮説

学習到達目標を明確に設定し、教科書の内容を聞いたり読んだりしたことを踏まえたタスク活動を通して、即興的な表現力を養っていくことにより、コミュニケーション能力の基礎が身に付く。

３　研究の手順

(1)　「聞くこと」「読むこと」の活動から表現活動につなげる指導の現状を分析する。

ア　平成22年度国立教育政策研究所「特定の課題に関する調査」では、まとまった内容の文章を書くことに課題が残った。

イ　平成26年度東京都「児童・生徒の学力向上を図るための調査」では、外国語表現の観点の平均到達度が41.0％であり、４つの観点の中では一番低かった。

ウ　平成26年度「東京都立高校入学者選抜学力検査結果に関する調査」の各問正答率では、全体の正答率が 51.5％であるのに対して、聞いたり、読んだりした内容に関する質問に対して書いて答える問題の平均正答率は16.6％と低かった。

エ　文部科学省、「英語教育の在り方に関する有識者会議」では、あらかじめ準備したものではなく、その場で考えながら表現する能力に課題があると指摘された。

(2)「聞くこと」「読むこと」の活動から表現活動につなげる指導上の課題を抽出する。

ア　英語を聞くこと・読むことで終わらせず、その内容を活用して話すこと・書くことまで指導し、４技能を統合した言語活動を行う必要がある。

イ　正確さよりも内容を重視して、間違いを恐れずに表現する態度を育成する必要がある。

(3)　TBLT (Task-Based Language Teaching)：タスク中心の教授法を確認する。

愛知県総合教育センター研究紀要第98集「TBLT 導入による英語授業の改善―タスク活動を通したコミュニケーション能力の育成―」を参考にした。

ア　TBLT(Task-based Language Teaching)　タスク中心の教授法の内容

学習者に達成させるべき課題（タスク）を与え、タスク達成のための道具として英語を使わせ、その過程を最大限に利用して実践的運用力を育成しようとするアプローチである。発話の正確さより発話される意味に重点が置かれ、タスクを達成するために使用しなければならない文法事項や語彙を特定しない。実際のコミュニケーションに似た体験から、真のコミュニケーションを引き出すことができると考えられている。タスクの内容は、以下の５つのタスクタイプに分類されている。

(ｱ)　Jigsaw（ジグソー）

(ｲ)　Information gap（インフォメーション・ギャップ）

(ｳ)　Problem-solving（問題解決）

(ｴ)　Decision-making（意思決定）

(ｵ)　Opinion exchange（意見交換）

イ　TBLT (Task-Based Language Teaching)　タスク中心の教授法の活動形態

ペア・ワーク又はグループ・ワークの活用が望ましい。発話量が増えるだけでなく、即興的なやり取りを行う中で、意思の疎通を求めて意味交渉（negotiation of meaning, Long1983）を行ったり、会話を維持したりするためのコミュニケーションの手立てを試す機会になる。授業の効率化を図るために、教科書の題材そのものを活用することが提案されている。

(4) 具体的方策の検討

「話すこと」「読むこと」を易しいものから難しいものへ段階的かつ統合的に指導するための言語活動として、教科書の題材を使って行えるタスク活動や、そのタスク活動への橋渡しになる学習活動を検討した。タスク活動としては「ジグソー活動」「クイズ作成」「ディスカッション」「リプロダクション」など、橋渡しになる学習活動としては「穴埋め音読」などを提案し、検証授業に取り入れた。

(5) 検証授業で成果と課題を整理

「学習到達目標を明確に設定し、教科書の内容を聞いたり読んだりしたことを踏まえたタスク活動を通して、即興的な表現力を養っていくことにより、コミュニケーション能力の基礎が身に付く」という仮説を検証するために、研究開発委員の所属校において２回の検証授業を行った。検証授業では、教科書の内容を題材として、「話すこと」「読むこと」を段階を

追って統合的に指導することで、生徒の表現力を育成することに重点を置いた。検証授業終了後、検証授業の内容がそれぞれの授業のねらいに即したものであったかどうかについて分析するとともに、課題を整理した。

ア　第１回　検証授業

NEW CROWN ENGLISH SERIES 3

LESSON 4　The Story of Sadako

教科書の穴埋め音読を行った後、教科書本文の内容を用いたクイズの作成及びクイズ大会を行った。

イ　第２回　検証授業

NEW CROWN ENGLISH SERIES 1

LESSON 6　My Family in the UK

教科書の穴埋め音読を行った後、教科書本文の内容について、写真・絵やキーワードを手がかりにしたリプロダクション活動を行った。

4　研究構想図

全体テーマ　「個々の能力を最大限に伸ばすための指導方法及び教材開発」

外国語委員会　研究主題

「「聞くこと」「読むこと」の活動から表現活動につなげる指導の工夫」

現状と課題（現状を分析し、課題を抽出する）

【現状】

・まとまった内容の文章を書くことに課題（平成 22 年度国立教育政策研究所「特定の課題に関する調査」）

・外国語表現の観点の平均到達度が 41.0%（平成 26 年度東京都「児童・生徒の学力向上を図るための調査」）

・聞いたり、読んだりした内容への質問に書いて答える問題の平均正答率が 16.6%（平成 26 年度都立高校入試）

・準備したものを話したり書いたりすることではなく、その場で考えながら表現する能力に課題（「英語教育の在り方に関する有識者会議」）

【課題】

・英語を聞くこと・読むことで終わらせず、その内容を活用して話すこと・書くことまで指導する必要がある。

・正確さよりも内容を重視して、間違いを恐れずに表現する態度を育成する必要がある。

副主題　　タスク活動を通した表現力の育成

仮　説

学習到達目標を明確に設定し、教科書の内容を聞いたり読んだりしたことを踏まえたタスク活動を通して、即興的な表現力を養っていくことにより、コミュニケーション能力の基礎が身に付く。

具体的方策

・言語材料の定着を目指した学習活動の設定

・易しいものから難しいものへの段階的な活動の設定

・タスクをベースにした言語活動の設定とワークシート等の活用

成果・課題

・即興的な表現力を養い、コミュニケーション能力の基礎を身に付けることができた。

・タスク活動から教師による指示や使用語句の制限などを外して、生徒の活動を支援する工夫をしたり、章末に限らず、短時間で毎時間行える活動として種類を増やしていったりする必要がある。

Ⅲ　研究の内容

1　検証授業１

「話すこと」「読むこと」を段階的かつ統合的に指導することで、生徒の表現力を育成することをめざし、第３学年で次に示す検証授業を行った。

(1)　使用教科書

NEW CROWN ENGLISH SERIES 3

単元　LESSON 4 The Story of Sadako

(2)　単元の目標

ア　教科書で学んだトピックに関して簡単な質疑応答をすることができる。

イ　グループで協力しながら間違いを恐れずに英語の質問を作成したり、英語の質問に答えようとしたりしている。

ウ　It+be 動詞+to 不定詞や、主語+動詞+目的語+補語の文構造の形・意味・用法を理解している。

(3)　言語材料

It+be 動詞+to 不定詞の文構造／主語+動詞+目的語+補語の文構造

(4)　言語活動

It+be 動詞+to 不定詞や主語+動詞+目的語+補語の文構造や既習事項を使ったクイズを発表し合い、内容を聞き取り、クイズに答える。

(5)　評価規準

ア コミュニケーションへの関心・意欲・態度	イ 外国語表現の能力	ウ 外国語理解の能力	エ 言語や文化についての知識・理解
①クイズ大会において、聞き手が理解しやすくなるように工夫して話したり、相づちを打ってメモをとったりするなど、相手の話に関心をもって聞こうとしている。	①It+be 動詞+to 不定詞／主語+動詞+目的語+補語の文構造を用いた文を使って、正しく話したり、書いたりできる。		①It+be 動詞+to 不定詞／主語+動詞+目的語+補語の文構造の形・意味・用法を理解が理解できる。

(6)　単元の指導計画と評価計画

時	主な学習活動	評価規準
第１時	It+be 動詞+to 不定詞の文構造導入 LESSON 4-1 本文の導入・説明・音読	ア①　イ①　エ①
第２時	It+be 動詞+to 不定詞の文構造を用いた言語活動	ア①　イ①　エ①
第３時	主語＋動詞＋目的語＋補語の文構造導入 LESSON 4-2 文の導入・説明・音読	ア①　イ①　エ①
第４時	主語＋動詞＋目的語＋補語の文構造を用いた言語活動	ア①　イ①　エ①
第５時	LESSON 4 USE Read 本文の読み取り活動	ア①　イ①　エ①

第６時	LESSON 4 USE Listen & Write 言語活動	ア① イ①
第７時	We're Talking 4 本文の導入・説明・音読	ア① イ① エ①
第８時	LESSON 4 本文の暗唱テスト	イ①
第９時 （本時）	LESSON 4 本文を使ったクイズ大会	ア① イ①
後日	定期テスト	イ① ウ①

(7)　本時（全９時間中の第９時間目）

ア　本時の目標

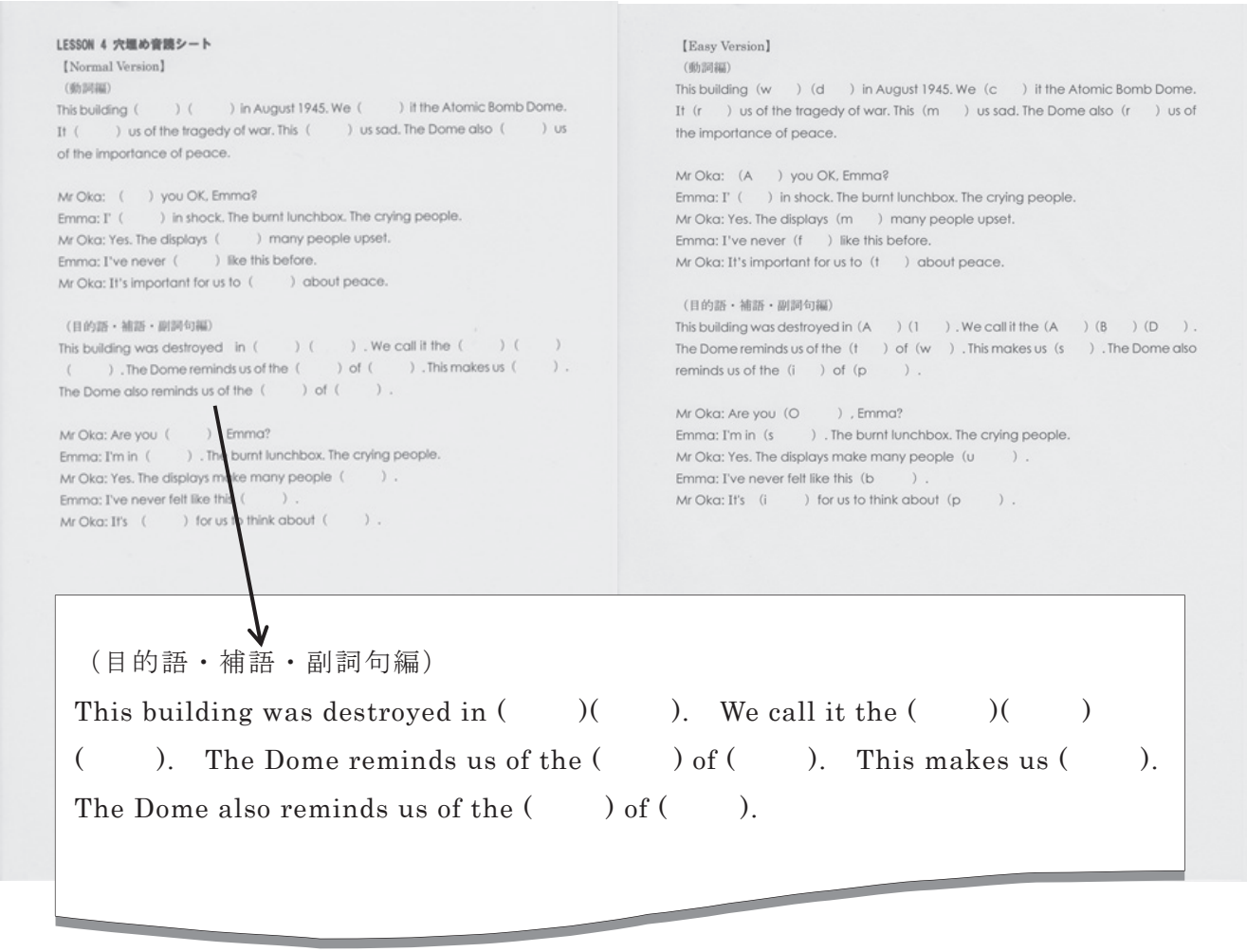
(ｱ)　教科書で学んだトピックに関して簡単な質疑応答をすることができる。

イ　本時の展開

指導項目 配当時間	生徒の学習活動	指導上の留意点 ●教材・教具	評価の方法・観点等 ◎評価（方法）
〈導入〉 （５分）	・元気よく挨拶する。 ・英語の歌を歌う。	・元気よく挨拶する。 ・歌詞を言う。	
〈復習〉 （１０分）	・教科書本文の穴埋め音読をペアで、片方はワークシートだけを見て英語を読み、もう片方は教科書を見ながら聞いて、訂正をする。	・机間指導を行う。 ●穴埋め音読シート -この場で配布する。 -ペアで活動する。	◎ア（観察） ◎イ（音読）
〈展開１〉 （１５分）	・教師の行う既習範囲の英問英答を聞き、クイズの作り方を理解する。 ・説明を聞く。 ・グループで作成する。	・既習範囲の英問英答を行い、板書を用いてクイズの説明をする。 ●ワークシート・辞書 -この場で配布する。 ・机間指導をして、間違いを訂正できるよう支援する。	◎ア（観察）
〈展開２〉 （１５分）	・グループの代表者がクイズを出題し、その他のグループが挙手をして答える。	・クイズ大会を進行する。	◎ア（観察） ◎イ（出題・解答）
〈まとめ〉 （５分）	・元気よく挨拶する。	・クイズの中での誤りなどを指摘する。 ・元気よく挨拶する。	

〔指導上の工夫〕
〈復習〉
・穴埋め音読を通して、品詞や語順を意識し、クイズ作成につなげる。
〈展開１〉
・ペア活動や穴埋め音読を振り返りながら解説をする。
〈展開２〉
・グループワークは６人１組で行う。
授業全体を通して
・ペアワークはソシオメトリーを利用して、英語学習が比較的得意な生徒と苦手な生徒が組むように配慮している。

〈穴埋め音読ワークシート〉



LESSON 4 穴埋め音読シート

【Normal Version】

（動詞編）

This building（　　）（　　）in August 1945. We（　　）it the Atomic Bomb Dome. It（　　）us of the tragedy of war. This（　　）us sad. The Dome also（　　）us of the importance of peace.

Mr Oka:（　　）you OK, Emma?
Emma: I'（　　）in shock. The burnt lunchbox. The crying people.
Mr Oka: Yes. The displays（　　）many people upset.
Emma: I've never（　　）like this before.
Mr Oka: It's important for us to（　　）about peace.

（目的語・補語・副詞句編）

This building was destroyed in（　　）（　　）. We call it the（　　）（　　）（　　）. The Dome reminds us of the（　　）of（　　）. This makes us（　　）. The Dome also reminds us of the（　　）of（　　）.

Mr Oka: Are you（　　）, Emma?
Emma: I'm in（　　）. The burnt lunchbox. The crying people.
Mr Oka: Yes. The displays make many people（　　）.
Emma: I've never felt like this（　　）.
Mr Oka: It's（　　）for us to think about（　　）.

【Easy Version】

（動詞編）

This building（w　　）（d　　）in August 1945. We（c　　）it the Atomic Bomb Dome. It（r　　）us of the tragedy of war. This（m　　）us sad. The Dome also（r　　）us of the importance of peace.

Mr Oka:（A　　）you OK, Emma?
Emma: I'（　　）in shock. The burnt lunchbox. The crying people.
Mr Oka: Yes. The displays（m　　）many people upset.
Emma: I've never（f　　）like this before.
Mr Oka: It's important for us to（t　　）about peace.

（目的語・補語・副詞句編）

This building was destroyed in（A　　）（1　　）. We call it the（A　　）（B　　）（D　　）. The Dome reminds us of the（t　　）of（w　　）. This makes us（s　　）. The Dome also reminds us of the（i　　）of（p　　）.

Mr Oka: Are you（O　　）, Emma?
Emma: I'm in（s　　）. The burnt lunchbox. The crying people.
Mr Oka: Yes. The displays make many people（u　　）.
Emma: I've never felt like this（b　　）.
Mr Oka: It's（i　　）for us to think about（p　　）.

（目的語・補語・副詞句編）

This building was destroyed in (　　)(　　). We call it the (　　)(　　)(　　). The Dome reminds us of the (　　) of (　　). This makes us (　　). The Dome also reminds us of the (　　) of (　　).

〈生徒が作成したクイズ例〉

・When was this building destroyed?—It was destroyed in August 1945.
・Why is Emma in shock?—Because she saw the burnt lunchbox and the crying people.
・What do we call the bomb?—We call it Little Boy.
・Who is in shock?—Emma is.
・Does Emma look happy?—No, she doesn't.
・What was destroyed in August 1945?—This building was.
・What do you see in this picture?—I see a big cloud.
・What makes many people upset?—The displays do.
・What do we call this building?—We call it the Atomic Bomb Dome.
・Is it important for us to think about peace?—Yes, it is.

〈クイズ大会ワークシート〉

LESSON 4 クイズ大会

☆この課で習った教科書本文を使用してクイズ大会を行います。

1　6人でグループを作ります。

2　教科書本文を見ながら英語の質問とその答えを作ります。

（例1）So I came to Japan three years ago.(L2-1)

① ② ③ ④

☆I を Ms Suominen に言い換えてからそれぞれに注目する

①Who came to Japan three years ago?

→Ms Suominen did.

②Did Ms Suominen come to Japan three years ago?

→Yes, she did.

③Where did Ms Suominen come three years ago?

→She came to Japan.

④When did Ms Suominen come to Japan?

→She came three years ago.

（例2）Rakugo is really fun.(L3-1)

① ② ③

☆Emma を補ってからそれぞれに注目する

①What is really fun for Emma?

→Rakugo is.

②Is Rakugo really fun for Emma?

→Yes, it is.

③How is Rakugo for Emma?

→It is really fun.

3　質問を作れたら1点、答えることができたら1点がグループに入ります。ピクチャーカードを見ながら質問を作っても構いません。もしもほかのグループと同じ質問が出た場合、その質問を出題することはできません。

4　下の英文のヒントを参考にしながら問題とその答えを作ろう

This building was destroyed in August 1945.

① ② ③

We call it the Atomic Bomb Dome.

① ② ③ ④

The Dome reminds us of the tragedy of war.

① ② ③ ④

This makes us sad.

① ② ③ ④

The Dome also reminds us of the importance of peace.

① ② ③ ④

Are you OK, Emma?

① ② ③

I'm in shock. The burnt lunchbox. The crying people.

①② ③

Yes. The displays make many people upset.

① ② ③ ④

I've never felt like this before.

① ②

It's important for us to think about peace.

① ②

1
2
3
4

(8)　検証授業の成果と課題

「話すこと」「読むこと」を段階を追って統合的に指導することで、生徒の表現力を育成することを目指し、本時の授業を行った。前時までに英問英答の口頭練習を繰り返し行い、易しいものから難しいものへ段階を追って音読活動や、ワークシートの工夫、グループで作問に取り組ませることなどにより、生徒は積極的に授業に参加することができた。こうした活動を通して、教科書の内容の定着や読解力、即興的な表現力や作文力の育成につながると考えられる。

今後は、口頭練習を増やすことで、よりスムーズに作問させたり誤りを減らすこと、解答者を制限したりグループ内で順番を決めさせたりして学習の機会をより均等にすることが課題である。また、間違った質問に対して、訂正できたらポイントを与えるなどの工夫が必要である。

2　検証授業２

「読むこと」「話すこと」を段階を追って統合的に指導することで、生徒の表現力を育成することを目指し、第１学年で次に示す検証授業を行った。

(1)　使用教科書

NEW CROWN ENGLISH SERIES 1

単元　LESSON 6　My Family in the UK

(2)　単元の目標

ア　写真や絵や keywords を手がかりにして、教科書の内容を自分の言葉で説明する。

イ　ペアワークにおいて、間違いを恐れず話す。

ウ　一般動詞を用いた現在時制の文について、その疑問文と答え方、否定文及び疑問詞（Where / When）がある疑問文の構造を理解する。

(3)　言語材料　一般動詞を用いた現在時制の文について、その疑問文と答え方、否定文
疑問詞（Where / When）がある疑問文とその答え方

(4)　評価規準

ア コミュニケーションへの関心・意欲・態度	イ 外国語表現の能力	ウ 外国語理解の能力	エ 言語や文化についての知識・理解
①ペアワーク・グループワークにおいて、間違うことを恐れず話している。	①写真や絵などの視覚的補助や keywords を手がかりにしながら、簡単な語句や文を使って、教科書本文について自分の言葉で説明できる。		①一般動詞を用いた現在時制の文について、その疑問文と答え方、否定文および疑問詞（Where / When）がある疑問文の構造を理解している。

(5) 単元の指導計画と評価計画

時	主な学習活動	評価規準
第１時	Lesson 6 GET Part1 一般動詞の現在の文　導入・言語活動	エ①
第２時	Lesson 6 GET Part1 本文の導入・説明・音読	イ①
第３時	Lesson 6 GET Part2 一般動詞の現在の文の疑問文その答え方および否定文　導入・言語活動	エ①
第４時	Lesson 6 GET Part2 本文の導入・説明・音読	イ①
第５時	Lesson 6 GET Part3 Where~? When~?の文とその答え方　導入・言語活動	エ①
第６時	Lesson 6 GET Part3 本文の導入・説明・音読	イ①
第７時	Lesson 6 USE Mini-project p.70, 71 ①	エ①
第８時 （本時）	Lesson 6 GET Part2~3 Recitation＋Reproduction	ア① イ①

(6) 本時

ア　本時の目標

写真や絵や keywords を手がかりにして、教科書の内容を自分の言葉で説明することができる。

イ　本時の展開

指導項目 配当時間	生徒の学習活動	指導上の留意点 ●教材・教具	評価方法・観点 ◎評価（方法）
〈導入〉 （１分）	・元気よく挨拶する。 ・Phonics Alphabet 口慣らし	・元気よく挨拶する。 ・生徒の口の形や発音を確認しながら、発音練習させる。 ●Phonics Picture Cards―Phonics Alphabet	

		(Large) (松香フォニックス版)	
〈復習〉 （１８分）	①閉本した状態でCDを１度聞く。 ②本文（Part 2,3）についてのＱＡ ③音読 （ア）Chorus reading (Individual checking) （イ）Buzz Reading （ウ）Overlapping （エ）Read and look up ④Pair Work ・穴埋め音読ワークシートを使い、隣同士ペアで一方が読み、他方が教科書を見ながら確認する。 ⑤Dictation ・④のワークシートを使用し、CDを聞いて１文ずつ書き取る。終わったら教科書を見て自己添削する。	①前時の内容を想起させる。 ②Picture Card を貼り、keywords を書きながら、教科書の内容を確認させる。 ● Picture Card (New Crown 準拠、以下 PC) ③ （ア）１回目は教師の後に続き復唱させ、２回目は一人一人きちんと音読ができているか確認する。 （イ）１分間行わせる。 （ウ）CDに合わせて２回音読させる。 （エ）１文ずつ顔を上げて言わせる。 ④穴埋め音読ワークシートⒶを配布し、空所の数が異なる２種類の中から選ばせる。活動中、机間指導を行う。 ●穴埋め音読ワークシートⒶ ⑤④のワークシートを使用することを指示する。CDを１文ずつ止めながら流す。	◎ ア（観察）
展開 ３０分	①Reproduction (Speaking)の練習 ・４人グループになる。 ・ワークシートⒷを見ながら１人１文を順番に言う練習をする。 ・発表分担を決める。 ②Reproduction (Speaking)の発表 ・グループで発表する。 ・最後の発表者は、本文の内容に関連したコメント（経験、意見、感想）を１文言い、教師の質問に答える。 ・相互評価する。 ③Reproduction (Writing) ・発表した内容について、各自で文を書く。 ・２段階レベルから、各自のレベルに合わせて選ぶ。	①ワークシートⒷを見ながら練習させ、発表分担を決めさせる。 ●ワークシートⒷ ●評価表 ②最後の発表者に質問する。 ③ワークシートⒸを配布し、自分でレベルを選ばせる。活動中、机間指導を行う。 ● Reproduction(Writing)ワークシートⒸ ワークシートⒸと評価表を回収する。	◎ア①・イ①（観察） ◎イ①（ワークシート）
まとめ （１分）	・まとめと挨拶。	・ワークシートⒸは、添削をして次の時間に返却することを伝える。 ・元気よく挨拶させる。	

〔指導上の工夫〕

＜復習＞

・教師が本文についての QA を行う際、使用する文が Reproduction のモデルになるようにする。PC や keywords は、生徒がそのまま Reproduction で使用できるよう、計画的に黒板に貼る。英語は、生徒が Reproduction で使用することを意識して使う。

・音読は、Reproduction のステップになる活動である。教科書で学習したことを適時適切に使えるようになるまで十分に行う。

・穴埋め音読では、個に応じた活動ができるように、空所の数が異なる２種類のワークシートを用意する。

＜展開＞

・発表の前にグループで十分に練習する時間を取り、全員が全ての文を言えるように配慮する。

・班の発表を評価し合うことで、互いに学び合うことができる。各班の中で１人の生徒に、コメントを言わせ、教師の質問にも答えさせることで得意な生徒に、活動の場を与える。

・発表した内容について文を書かせる際には、個に応じた活動ができるように、書く分量が異なる２種類のワークシートを用意する。

ワークシート　★★基礎

LESSON6　My Family in the UK (part2-3, p.66,68) A ★

LET'S PRACTICE

1. 穴埋め音読・・・ブランクを埋めて読みましょう。

2. Dictation・・・・CD を聞いて、(　　)に入る語を書きましょう。

2 Ms Brown: This (　　) (　　) sister, Jean.
Ken: Does she (　　) (　　) bagpipes?
Ms Brown: Yes, she (　　). She (　　) (　　) well.
Ken: Does she (　　) (　　) your parents?
Ms Brown: No. She doesn't (　　) (　　) Scotland.

3 Paul: Where (　　) your sister (　　)?
Ms Brown: She (　　) (　　) London.
She (　　) a job (　　) a college.
Paul: When does she (　　) (　　) bagpipes?
Ms Brown: She (　　) them every summer (　　) festivals. Look
Paul: Fantastic!

★★★発展

LESSON6　My Family in the UK (part2-3, p.66,68) A ★★

LET'S PRACTICE

1. 穴埋め音読・・・ブランクを埋めて読みましょう。

2. Dictation・・・CD を聞いて、出だしの語に続く文を書きましょう。

2 Ms Brown: This_____,_____.
Ken: Does_____?
Ms Brown: Yes,_____. She_____.
Ken: Does_____?
Ms Brown: No. She_____.

ブラウン先生：これは私の妹のジーンです。
健：彼女はバグパイプを吹きますか？
ブラウン先生：はい，吹きます。彼女はとても上手に吹きます。
健：彼女は先生の両親といっしょに住んでいますか？
ブラウン先生：いいえ。彼女はスコットランドには住んでいません。

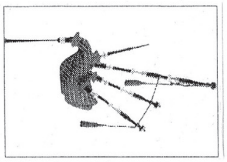
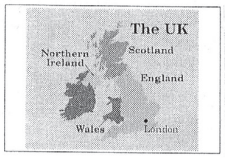
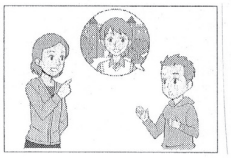
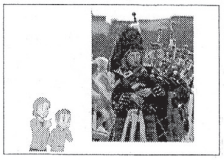
3 Paul: Where_____?
Ms Brown: She_____.
She_____.
Paul: When_____?
Ms Brown: She_____. Look.
Paul: Fantastic!

ポール：あなたの妹はどこに住んでいますか？
ブラウン先生：彼女はロンドンに住んでいます。彼女は大学で職を持っています。
ポール：彼女はいつバグパイプを演奏しますか？
ブラウン先生：彼女は毎年夏にお祭りで演奏します。見てください。
ポール：すてきですね！

LESSON6　My Family in the UK (part2-3, p.66,68) B

LET'S TALK ABOUT p.66,68

絵とキーワードを使って、自分の言葉で教科書を説明しよう。

1　sister,　Jean	2　play the bagpipes,　very well 
3　Scotland / London 	4　a job at a college 
5　every summer,　at festivals 	6 自分の言いたいことを付け加えましょう。 I like~. / I don't like~, but I like~. / I'm good at~. / I want to~.　など。

★★基礎

LESSON6　My Family in the UK (part2-3, p.66,68) C ★★

LET'S WRITE ABOUT p.66,68

ワークシートBを見ながら、教科書を説明する文を書こう。

（　　）に入る語を下の□から選んで入れなさい。同じ語を２回使う場合もあります。

1　This is (　　's) sister, Jean.

2　She (　　) the bagpipes very well.

3　She (　　)(　　) in Scotland.　She (　　) in London.

4　She (　　) a job at a college.

5　She (　　) the bagpipes every summer at festivals.

6

plays / lives / live / doesn't / has / Jean / Ms Brown

1-(　　) No.(　　) Name(　　)

★★★発展

LESSON6　My Family in the UK (part2-3, p.66,68) C ★★★

LET'S WRITE ABOUT p.66,68

ワークシートBを見ながら、自分の言葉で教科書を説明する文を書こう。

1

2

3

4

5

6

1-(　　) No.(　　) Name(

評価表

【リプロダクションのしかた】グループで発表します。全員で、ピクチャーカードとキーワードを使って説明します。1人1～2文、分担を決めて下さい。最後の7を担当した人には、先生から質問をしますので、その場で答えて下さい。自分の番が来たら、絵の脇に立ち、絵を指しながら説明して下さい。聞く人は、評価をして下さい。評価のポイントは、声の大きさ、アイコンタクト、英語らしい発音、の3点です。発表の前と後には、拍手をして下さい。

No.	生徒氏名	声の大きさ	アイコンタクト	英語らしい発音	合計点
1		1・2・3	1・2・3	1・2・3	
		1・2・3	1・2・3	1・2・3	
		1・2・3	1・2・3	1・2・3	
		1・2・3	1・2・3	1・2・3	
2		1・2・3	1・2・3	1・2・3	
		1・2・3	1・2・3	1・2・3	
		1・2・3	1・2・3	1・2・3	
		1・2・3	1・2・3	1・2・3	
3		1・2・3	1・2・3	1・2・3	
		1・2・3	1・2・3	1・2・3	
		1・2・3	1・2・3	1・2・3	
		1・2・3	1・2・3	1・2・3	
4		1・2・3	1・2・3	1・2・3	
		1・2・3	1・2・3	1・2・3	
		1・2・3	1・2・3	1・2・3	
		1・2・3	1・2・3	1・2・3	

1-(　) No.(　　) Name(　　)

(7) 検証授業の成果と課題

「話すこと」「読むこと」を段階を追って統合的に指導することで、生徒の表現力を育成することを目指し、前述した〔指導上の工夫〕に留意し、本時の授業を行った。

成果として挙げられるのは、リプロダクション活動がスムーズに行えたことである。練習の段階から1人1文ずつ順番にすらすらと言えていたのは、1グループの人数を3、4人にしたためと考えられる。能力差を考えてグループ編制したため、得意な生徒が不得意な生徒に教える場面が見受けられ、発表の分担を決める際にもそれぞれの特性を考慮する様子が見られた。発表は、全ての生徒がほとんど間違えずに行うことができた。穴埋め音読よりもリプロダクションの方がスムーズに行えたのは、グループで行ったため、一人あたりの負担が軽減されたためであると思われる。

課題として挙げられるのは、第一に、リプロダクションへの橋渡しになる学習活動がスムーズに行えなかったことである。ペアで穴埋め音読を行ったが、すらすらと言えない生徒が目についた。その要因として考えられるのは、音読の分量が教科書2ページ分と多かったこと、ペア活動に入る前の音読のうち Read and look up がきちんと行えなかったことなどである。穴埋め音読用に空所の数が異なる2種類のワークシートを用意したが、さらに易しいもの、すなわち穴埋め箇所が少ないものを使用すれば取り組みやすくなる。第二の課題は、一部の生徒が英語による指示を理解できていなかったことである。新しい活動に入る前には、日本語も使ってきちんと理解させる必要がある。第三の課題は、一部の生徒が発表の仕方を理解

できていなかったことである。立ち位置や絵の指し方、聞き手に背中を向けないなどの注意事項を伝えるべきであった。第四に、全体的に時間に余裕がなかったことが挙げられる。穴埋め音読とリプロダクションの間のディクテーションは割愛すべきであった。２ページ分のディクテーションを行うのには時間がかかること、「書く」活動はリプロダクションの後にも行うこと、などが理由である。今後は、これらの課題を解決できるような指導案を作成することが重要である。

Ⅳ　研究のまとめ

１　研究の成果

本研究では、タスク活動を通した表現力の育成を目指し、活動や指導法を工夫して、検証授業を行った。２回にわたり行った検証授業では、「聞くこと」「読むこと」から表現活動へつなげる活動を行うことを前提としたうえで、以下の３点を設定して進めた。

・言語材料の定着を目指した学習活動
・段階的な活動の設定
・タスクをベースにした言語活動

検証授業１では、教科書本文の語句を空所にしたワークシートによる「穴埋め音読」を「言語材料の定着を目指した学習活動」としてペアで行った。このときに使用するワークシートは、括弧の数が違うものが両面に印刷されており、生徒は自分の習熟度に合わせて任意の方を使用できる。その後に、同じ教科書の内容を活用した「オリジナルクイズの作成・発表」を「タスクをベースにした言語活動」をグループで行った。基礎的なものから発展的なものへと段階的に活動を設定することで、定着させた言語材料を、英語を使用する場面で無理なく活用することができ、生徒は英語によるやり取りを楽しんで行うことができた。

検証授業２でも、同様に教科書本文の「穴埋め音読」を「言語材料の定着を目指した学習活動」としてペアで行った後に、同じ教科書内容を自分の言葉で説明する「リプロダクション」をグループで行った。こちらでも段階的に活動を設定することで、定着させた言語材料を、英語を使用する場面で無理なく活用させることができ、生徒は生き生きと登場人物を紹介し、自分の意見を付け加えて発表することができた。

二つの検証授業の中で、言語材料を定着させ、学習到達目標を明確にしたタスクをベースにした言語活動を設定するというように、段階的に活動を設定することで、即興的な表現力を養い、コミュニケーション能力の基礎を身に付けさせることができた。

こうした生徒主体の学びを実現するために必要なことは、文脈から切り離された語句と構文だけを教えて練習させるのではなく、既に十分理解した、まとまりのある英文を活用して、段階的に即興性を高めていくように活動を工夫することである。

２　今後の課題

本研究では、検証授業１で「読むこと」から「英語による質疑応答」、検証授業２では「読むこと」から「英語による口頭発表」と、「聞くこと」「読むこと」から表現する活動の一部の検証を行ったに過ぎない。また、活動の機会も章末のみであったため、コミュニケーション能力の基礎の育成をより効果的に図るために、学習活動（知識・技能を習得する活動）と

タスク活動を有機的に関連させながら、「聞くこと」「読むこと」から「話すこと」及び「書くこと」の活動を継続的に行っていく活動を設定することが課題である。

また、学習活動では、どのような活動が言語材料を定着させるのに効果的なのか、また、どんな工夫が必要なのかについて、さらに研究を深める必要がある。

さらに、タスク活動においては、より自然に英語を使用できるように、教師のコントロールをどこまで行うべきなのかを踏まえて指導を工夫する必要があるとともに、毎時間、継続できる短時間の活動例などについても模索していく必要がある。

平成２６年度　研究開発委員会　委員名簿

＜中学校外国語研究開発委員会＞

	学　校　名	職名	氏　名
委員長	国分寺市立第二中学校	校　　長	重松　　靖
委員	品川区立荏原第六中学校	主任教諭	岡﨑　伸一
委員	武蔵野市立第三中学校	主幹教諭	坪内 英津子
委員	あきる野市立秋多中学校	主任教諭	宮﨑　太樹

〔担当〕東京都教育庁指導部高等学校教育指導課　統括指導主事　米村　珠子

平成２６年度
研究開発委員会指導資料集〔中学校〕

東京都教育委員会印刷物登録
平成２６年度第　１　８　７　号

平成２７年３月発行

編集・発行　東京都教育庁指導部指導企画課
所　在　地　東京都新宿区西新宿二丁目８番１号
電話番号　（０３）５３２０－６８３６
印刷会社　松本印刷株式会社

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。